

かに迫つてをる。此の怨鬼が此の世を去つたのは七日以前であるから、今日から四十二日の間、戸を閉め、内に籠つて深く物齋しなくてはなりません。私の禁戒を能く守られたならば、九死に一生を得て助かりませう、もしも一寸の間でも懈つて過りがあつたならば、とても此の災厄を逃れる事は出来ませぬ」

と嚴重に教へて、筆を採つて、正太郎の脊中から手足に至るまで、篆字や籀文のやうな文字を書いて、猶も別に朱書きにした御符を澤山呉れて、

「呪文を書いた此の御符を戸毎に貼つて其上神佛を念じなさい、輕としく過して生命を亡くしなさんな」

と教へたので、正太郎は且つは畏れ、且つは喜んで家に歸り、朱書の御符を門といはず窓といはず、方々に貼つて、教へられたままに家に閉ぢ籠つて慎重に物齋した。

其の夜の事である。三更の頃になつて、恐ろしく氣味の悪い聲がして、

「あア憎くにくしや、此處に尊い御符を貼りをつたわ」

と叫んだが、二度と聲がしなかつた。

正太郎は恐ろしさのあまり、夜の長いのを恨んでをつたが、程なく夜明けたので、生きた心地がして急いで彦六の方の壁を敲いて、昨夜の事を語りかけた。彦六も今になつて陰陽師がいつた事の不思議さを感じて、自分も次の夜は眠らずに三更の頃まで待ちくらしした。

此の夜は風荒く、松を吹くさへ物を僵すがやうで、それに雨さへ降つて來て雷ならぬ夜のありさまに、二人は壁を隔てて聲をかけ合ひ氣強くしてゐたが、既に四更になると、下屋の障子にさつと赤い光がさして、

「あア憎くや、此處にも貼つてあるわ」

といふ聲、眞夜中に一層物凄く、正太郎は髪も身柱も總立して、暫らくは魂消えて死人のやうになつてゐた。かうして明日になれば昨夜のありさまの恐ろしさを語り、暮れば早く明けろのを待ち慕つて、此の日頃は二人共に一日千秋の思ひで過ぎした。磯良の怨鬼も毎夜家を廻り或は屋の棟で叫び、其の憤怒の聲一夜増しに凄くなり、かくて禁戒の期限の四十二日目の夜

にもなつた。

今は早此の一夜だけになつたので、正太郎は殊更に慎んで時を過ぎて来たが、最早五更の空も白々と明け渡つた。正太郎は長い悪夢の覺めたがやうに思はれて、直ぐさま彦六を呼ぶと、彦六は壁際に寄つて来て、

「どうだつた」

と答へた。正太郎は、

「重い物齎ももう済みました。とんと哥兄の顔も見ぬので懐かしいし、此の日頃のつらさ恐ろしさも存分に語つて氣を晴らませう。床を離れなさい、私も外へ出ませう」

といつた。彦六は思慮のない男であつたから、

「今はもう大丈夫ぢや、さア此方へ來なさい」

といつて、戸を開けかけたが、隣の軒端で、

「きやッ」

と叫ぶ聲が耳を貫いて聞えたので、彦六は思はず尻餅をついたが、さては正太郎が身の上こそと斧引提げて大道へ出ると、明けたと思つた夜はまだ暗く、月は中天にあつて影朧ろに、風は颯々と冷やかに吹いてゐる。正太郎が家の戸は開け放しになつてをつて、本人は見えない。家の内に逃げ込んだのであらうと急いではいつて見たが、何處にも隠れられるやうな廣い家でないのに、姿が見えないので、大道に倒れてでもゐるのかと探したが、其の邊には何物も見えない。どうなつたものかと、或は恠しみ或は恐れながら、燈火をにかけて其所此所と尋ね廻ると、開けた戸の側の壁に生血が灌がれ、流れて地に傳はつてゐる。併し屍も骨も見えない。月あかりにすかして見ると、軒端に何か物がある。燈火をさしかざして能く見ると、男の髪の手髻だけが懸つて居つて、外にはなんにも無い。

此の事の淺ましくも恐ろしさは、筆に盡されさうもない。夜が明けて近くの野や山を探し求めたが、遂にその跡が分らなかつた。此の事を井澤家へ傳言すると、井澤では涙ながらに娘の里の香央へも知らせてやつた。

されば陰陽師の占も著しく驗があり、吉備津の宮の御釜の凶き祥も違はなかつた。まことに尊い事であると世の人が語り傳へた。

註

(一)吉備津。ここは吉備津の宮を指す。吉備津の宮は備中國賀陽郡真金村にある。其の近郷を宮内といふのも此の宮があるからである。又吉備の中山といふのも此處をいふので、古歌に「荒れはてし吉備の中山なかなかにゐますが如き神の御社」、此の歌の神の御社は即ち吉備津の宮をいつたのである。此の宮の神は、大日本史に「初め孝靈天皇の皇子、彦五十狹彦命、弟稚武彦命と共に吉備の國を綏撫せり、後世吉備津彦神社を備中に建てて之を祀る」とあるのは之である、それで、吉津津彦の宮といふのが本格であるが、彦の一字を除いたのは略稱と見しよ。

(二)釜。吉備津の宮に古來存する釜である。神社考に「備中國吉備津の宮の裏に釜有り、つねに祈ること有る毎に巫人湯を燂らし、竹葉を浸して以て身に灌ぐ、又神に詣づる者の、事を試さんと欲せば、奠黍を釜前に盛り、祝唱し畢りて柴を燃せば、則ち釜鳴ること牛聲の如くなれば即ち吉、若し釜鳴らざれば則ち凶なり」とある。これを以て見ると、吉備津の宮の釜といふものは靈驗まことにいちじるしく、又世に名高いものである。

(三)妬婦の養ひ難き云云。謝肇淛曰く「人妬婦の爲に嘲を解く者有りて曰く、士君子情欲節無く一嚴婦を得て之と約束す、亦心を動かし性を忍ぶの一端なり。故に諺に曰へる有り『老に到つて方に妬婦の功を知る』と、坐客難すること能はざるなり」云々と。

(四)吉備の國。備前・備中・備後・美作四ヶ國の總稱。

(五)賀夜郡。備中國の郡名、今は賀陽郡と書く。

(六)庭妹。和名抄の訓に爾比世とある。今の庭瀨村。岡山と倉敷間の驛。

(七)播磨の赤松氏。村上天皇の皇子具平親王の玄孫頼範が保元三年に播磨守となつて任地に下り任滿ちて後も赤穂郡赤松莊白旗山の城に居つた。赤松の姓は赤松莊から出た。其の子孫則村が建武中興に大功を建て、後足利尊氏に屬したが度々戦功あつて播磨の外に攝津・因幡・備前・

美作四國の地を分領した。

(八)嘉吉元年の亂 將軍足利氏の愛ひの本は豪族權臣の跋扈であつた。將軍義教が前に鎌倉の持氏を滅し、嘉吉元年の前年永享十二年には赤松滿祐の弟義雅の所領を奪つて他人に遣つたり、又滿祐も討伐せらるべしなどの流言があつたので、持氏の遺子春王安王の誅せられたのを祝福する名のもとに將軍義教を饗應すべく、六月二十四日に己が京都の東洞院の邸に招いて弑した。義教の子義勝代つて將軍となるや、九月十日山名持豊・河野通直等が幕府の命を奉じて、滿祐を播磨の木山城に攻め殺した。

(九)吉備の鴨別 笠田氏の祖。(此の物語には香央かさたとある)吉備武彦の三男。仲哀天皇御西征半ばにして崩御あらせられた時、神功皇后の命によつて熊襲を征して功があり、のち波久岐國造となつた。

(一〇)荒井の里 高砂の西に接し、洗川を隔てて印南郡伊保村と相望む。今加古郡に屬して荒井村と云つてゐる。

(一一)刀田の里 戸田とも書く。播磨國加古郡に刀田山鶴林寺といふ有名な寺がある。戸田の太子堂とも云つて、寺傳には聖德太子の造營と稱してゐる。其の地方尾上・鳩里村邊を刀田の郷と

(一二)陰陽師いんやうし

オンミヤウジとも訓ずる。官職としては卜筮・相地などを掌るが、民間でいふ陰陽師は、占卜・祓ひなどして神佛に祈禱し祟りなどを取り靜める。又昔は天文を察したり豫言などもした。安倍の清明などはそれである。

兩月物語 卷之四

蛇性の姪 (第七)

〔梗概〕 紀州三輪が崎に豊雄といふ容貌秀麗て性質も風流な若者があつたのに、白蛇が眞女まなごといふ美人に化けて、豊雄に戀慕し、どこまでも付き纏うて居るのを、道成寺の老僧法海和尚といふのが、其の妖怪を取り鎮めるといふ筋。其の出處は西湖佳話の雷峯怪蹟の翻案である。日本のも

ので少しく似通つてゐるものには、元享釋書の釋安珍傳であるが、其の安珍傳は、今昔物語の紀伊國道成寺僧寫法華救蛇語と同日の談であり、今昔物語の語は其以前に出來た大日本國法華經驗記の第二百二十九紀伊國牟婁郡惡女から出てをり、此の三篇も同一のものである。しかるに不思議にも此の三篇に似通つてをるものに、琉球に關した中山傳信錄に鐘魔といふ題で、陶松壽といふ者の淫女けきに懸想けきさるる物語は能く安珍の物語に似てをる。併しいづれも、西湖佳話の雷峯怪蹟のやうに此の蛇性の淫に似てゐるとはいへぬ。雷峯怪蹟の許宜は本編の豊雄であり、白娘子は眞女兒であり、戴捉蛇は鞍馬寺の僧であり、法海禪師は矢張り本編でも法海和尚になつてゐる。又俗書に安珍清姫云々の事があるが、此の蛇性の姪と結びつけて論ずるまでもない。ただ眞名子の庄司の姓をとつて白蛇の化物ばけものに眞女兒と名付け、庄司を芝の庄司と用ゐた位のものである。それも夫等の俗書と雨月物語の先後もわからぬ、またわからせようとする程の値うちもない。併し一應安珍傳を参考までに爰に載せて、西湖佳話の雷峯怪蹟と比べて見よう。雷峯怪蹟は少し長文だが、今はそれを手に入れ難くなつてゐるから持たぬ人の爲に載せる事にする。吾人は能く其の出處の名目ばかりを聞いて、其のものの持ち合せがないと、比較する事が出來ず、誠に靴を隔てて痒きを搔くの自烈じれつたさを感じるものである。それで老婆親切までに。

雷峯怪蹟

嘗思聖人之不語怪，以怪之行事近乎妄誕而不足為訓，故置之勿論。然而天地之大，何所不有荒唐者固不足道，若事有可稽，蹟不能泯。而彰々于西湖之上，如雷峯一塔，考其始實為鎮怪而設流傳至今，雷峯夕照已為西湖十景之一，則怪而又常矣。湖上之忠墳仙嶺，既皆細述其事，以為千古之快瞻。而怪々常々，又烏可隱諱，而不傾一時之欣聽哉。徐道這雷峯塔是誰所造，原來宋高宗南渡時，杭州府過軍橋黑珠巷內，有一人叫做許宜，排稱小乙白幼兒父母雙亡，依傍著姐夫李仁現做南廊閣子庫幕事官的家裏住，日閒在表叔李將仕家生藥舖中做主管，此時年纔二十二歲，人物也還算得齊整的，是年恰值清明，要往寶叔塔寺裏薦祖宗，燒香子，當晚先與姐々說了次日早起，買些紙馬香燭，經幡錢梁等物，吃了飯，換了新衣服，好鞍轡，把套子錢馬，使條袱子包好，徑到官巷口李將仕家來道，小姪要往保叔塔追薦祖宗乞叔叔容假一日，李將仕道，這也是你孝心，只要去便回許宜離了舖中，出錢塘門，過石函橋，徑上保叔塔，進寺卻撞著送饅頭的和尙懺悔過頭燒了套子，到大殿上隨喜，到客堂裏喫罷齋，別了和尙，還想偷閒各處去走走，剛走到四聖觀不期雲生西北，霧鎖東南，早落不微々的細雨來了，初還指望他就住不意一陣一陣，只管綿々不絕，許宜見地下

濕了難于久待，只得脫了新鞋新襪卷做一卷縛在腰間，赤著脚，走出四聖堂來尋船，正東張西望恐怕沒有，忽見一個老兒，搖著一隻船正打面前過，連忙一看，早認得是熟識張阿公，不勝歡喜，忙叫道張阿公，帶我到湧金門去。那老兒搖近岸來。見是許宜，便道小乙官著雨了，快些上船來。許宜下得船，張老兒搖不得十餘丈水面，只聽得岸上有人叫道，搭了我們去，許宜看時，卻是戴孝的婦人，一個穿青的女伴，手中捧着一個包兒要搭船張老兒看見，忙把船搖攏道想也，是上坎遇雨的了，快上船來，那婦人同女伴上得船便先向許宜深深道了箇萬福，許宜慌忙起身答禮，隨撥身半邊道，請娘子艙中坐，那婦人進艙坐定。便頻把秋波偷瞧許宜，許宜雖說為人老實，然見了此等如花似玉的美人，又帶著個俊俏的了豈未免也要動情，正不好開口不期那婦人轉先道，請問官人高姓大名，許宜見問忙答道。在下姓許名宜，排行小乙，婦人又問道，宅上何處，許宜道，寒舍住在過軍橋黑珠巷舍親生藥舖內，做些買賣，說完就乘機問道，娘子高姓潭府那裏，亦求見示。那娘人答道，好家是白三班，白直殿之妹，嫁了張官人，不幸亡過了，現葬在這邊，因今日清明墳上祭掃而回，不期又值此雨，猶幸遇搭得官人之船，不至狼狽，彼此說些閒話，不覺船已到了湧金門，將要上岸，那婦人故作忸怩之狀，叫侍兒笑對許宜說道，清早出門得急了，忘記帶得零錢在身邊，欲求官人借應了船錢，到家即奉還，決不有負。許宜道，二位請便，這小事不打緊，因腰閒取出付了船家，

各自上岸，岸雖上了，雨卻不住，恐天晚了，只得要各自走路，那婦人因對許宣說道，奴家在蘆橋雙茶坊巷口，若不棄時，可到寒舍奉茶，并納還船錢，許宣道，天色已晚，不能久停，改日再來奉拜，罷說過。那婦人與侍兒便冒雨去了，許宣忙進湧金門，從人家屋簷下，捱到三橋子，親眷家借了一把傘，正撐著走出洋欄頭，忽聽得有人叫道，許官人慢走，忙回頭看時，卻原是搭船的白娘子，獨自一人，立了一個茶坊屋簷下，許宣忙驚問道，娘子如何還在此，白娘子道，只因雨不住，鞋兒都踏濕了，因叫青兒，回家去取傘，和脚下，又不見來，望官人傘下略搭幾步兒，許宣道，我到家甚近，不若娘子把傘戴去，明日我自來取罷。白娘子道，可知好哩，只是不當。許宣遞過傘來，與婦人，自去方沿人家門簷下，冒雨而回到家，喫了夜飯，睡在牀上，翻來覆去，想那婦人，甚是有情，忽然夢去，恰與日間相見的一般，正在情濃。不覺金雞三唱，卻是南柯一夢。正見

心猿意馬馳千里 浪蝶狂蜂鬧五更

許宣天明起來，走到舖中，雖說做生意，卻像失魂一般，東不是，西不是，捱到喫過飯，便推說有事，便走了出來，遂一徑往蘆橋雙茶坊巷口，尋問白娘子，問了半晌，並沒一人認得，正東西躊躇忽見了鬚青兒，從東邊走來，許宣見了，忙問道姐姐，你家住在那裏，時來取傘。青兒道，官人隨我來，遂引了許宣，走不多路，道這裏便是。許宣看時，卻是一所大樓房，對門就是秀王的府牆，

青兒進門，便到官人請裏面去坐，許宣遂隨到中堂。青兒向內低聲叫道，娘子，許官人在此。白娘子裏面應道，請許官人進來奉茶罷。許宣尙遲疑，不敢入去。青兒連催道，入去何妨。許宣方走到裏面，只見兩邊是四扇暗櫺子窗，中間挂著一幅青布簾，揭開簾兒入去。卻是一個坐起，桌上放一盆虎鬚膏蒲兩傍挂四幅名畫，正中閒挂一幅神像，香几上擺著古銅香爐花瓶，白娘子迎出來，深深萬福道，夜來遇雨，多蒙許官人應付周全，感謝不盡。許宣道，些微何足挂齒。一面獻茶，茶罷。許宣便要起身，只見青兒早捧出茶蔬果品來，留飲。許宣忙辭道多謝娘子厚情，卻不當取擾略飲了數杯。就起身道，天色將晚，要告辭了。白娘子道，薄酌不敢苦留，官人但尊傘，昨夜舍親又轉借去了，求再飲幾杯，即著人取來。許宣道，天晚，等不得了。白娘子道，既是等不得這傘，只得要求官人明日再來取了。許宣道，使得使得遂謝了出來，到了次日，在店中略做做生意便心癢難熬。只託故有事，卻悄悄地又走到白娘子家來討傘。白娘子見他來早，又備酒留飲。許宣道，爲一把破傘，怎敢屢擾。白娘子道，飲酒飲情，原不爲傘，不妨飲一杯，還有話說。許宣喫了數杯，因問道不知娘子有何話說。白娘子見問又斟了一杯酒，親自送到許宣面前，嘻嘻說道，官人在上，眞人面前不敢說假話，奴家自亡過了丈夫，一身無主，想必與官人有宿緣，前日舟中一見，彼此便覺多情，官人若果錯愛，何不尋個良謀說成了，百年姻眷，許宣聽了，滿心歡喜，卻想在李將仕家做生

意居停不穩便怎生娶親，因此沈吟未答。白娘子見不回答。因又說道：官人有話，不妨直說，何故不回答語。許宣方說道：蒙娘子高情，感激不盡，只恨此身為人營運自慙窘迫，仔細尋思，實難從命。白娘子道：官人若心不願為婚，便難勉強，若為這些，我囊中自有餘財，不消慮得，便叫青兒你去取些銀子來，青兒忙走到後房中，去取出一個封兒遞與白娘子。白娘子接了，復遞與許宣道：這一封你且權拿去用，若要時不妨再來取。許宣雙手接了，打開一看，卻是五十兩一個元寶，滿面歡喜便落在袖中，對白娘子說道：打點停當，再來奉復，遂起身作別。青兒又取出傘來還了許宣，許宣一徑到家，先將銀子放好，又將傘還了人，方纔睡了。次日早起自取了些碎銀子，買了些鷄鵝魚肉之類並果品回來，又買了一尊好酒，請姐夫，與姐姐同喫。李幕事聽見舅子買酒請他，到喫了一驚，因問道：今日為何要你壞鈔。許宣道：有事要求姐夫，姐姐作主。李幕事道：既有事何不說明，許宣道：且喫了三杯著，大家依序坐定喫了數杯，李幕事再三又問，許宣方說道：愚舅蒙姐夫姐姐，照管成人，感謝不盡，但今有一頭親事，與愚舅甚是相宜，已有日風，不消十分費力，但我上無父母，要求姐夫姐姐，與我玉成其事，李幕事夫妻聽了，只道要他出財禮便淡淡的答應道：婚姻大事也，須慢慢商量今日須吃酒，吃完酒各自散去，竟不回答過了兩三日許宣等不得因催，姐姐道：前日說的說，姐姐曾與姐夫商量麼。姐姐道：不曾。許宣道：為何不商量。姐姐道：連日姐夫

有事心焦我不好問他。許宣道：我曉的姐姐不上緊的意思了，想是你怕我累姐夫出錢了，因在袖中取出那大錠銀子來，遞與姐姐道：我自有財禮，只要姐夫做個主兒。姐姐看見銀子，笑說道：這來你在叔，舖裏做生意，也原得這些私房可知要娶老婆哩我且收在此，待你姐夫回時我替你說就是了。過一會，李幕事回家，妻子即將許宣的銀子遞與丈夫看道：我兄弟要娶親，原來銀子自有只要你做個主兒，須替他速行之，李幕事接了銀子手中，翻來覆去，細看那上而鑿的字號，忽大叫道：不好了，我全家的性命，都要被這錠銀子害了，妻子道：活見鬼，不過一錠銀子，有甚利害。李幕事道：你那裏知道現今邵大尉庫內，封記鎖押都不動，意不見了五十錠大銀，正著落臨安府捉賊，十分緊急，臨安府正沒尋頭路，出榜緝捕，寫著字號錠數捉獲者賞銀五十兩，知情不首，及窩藏正賊者，全家發邊遠克軍這銀子與榜上字號相同，若隱匿不報，日後被人首出，坐罪不小，妻子聽了，只嚇得咯抖的發戰道：不知他還是借的，還是偷的，卻怎生區處，李幕事道：我那管他是借的，是偷的，他自作自受，不要害我一家因拿了這錠銀子，竟到臨安府出首，臨安府韓太尹，見銀子是真忙差緝捕捉拿正賊許宣，不多時拿到許宣當堂。韓大尹喝問道：邵大尉庫中不動封鎖不見了大銀五十錠，現有李幕事出首一錠在此，稱是你的，你既有此一錠，那四十九錠卻在何處，懶不動封鎖能偷庫銀，定是妖人了可快快招來，因一面分付息快，備豬狗血，重刑伺候許宣見為銀子起，

忙辨道、小的不是妖人、待小的直說、便將舟中遇著白娘子、併借傘討傘、以及留酒講親借銀之事細細說了一遍、韓大尹道、這白娘子、是個甚麼樣人、現住何處。許宣道、他說是白三班白殿直的妹子、現住在薦橋雙茶坊巷口、秀王牆對門、黑樓子、高坡兒內。韓大尹即差捕人何立、押著許宣、去雙茶坊巷口、捉拿犯婦白氏來聽審、何立押著許宣、又帶了一千做工的、徑到黑樓子前、一看時、卻是久無人住的、一間冷屋隨拘地方、並左右鄰來問、俱回稱道此係毛巡檢家的舊屋、五六年前、一家都瘟疫死盡了、青天白日常有鬼出來買東西、誰敢還在裏頭住、且這地方、並無姓白的娘子何立因問許宣道、你莫要認錯了、不是這裏、許宣此時、看見這個光景也、驚得呆了道、分明是這裏、纔隔得三五日、怎使如此荒涼、何立道、既是這裏、只得打開門進去、因叫地方動手、將門打開、一齊擁了人去、只見內中冷陰々、寒森々、並無一個人影、大家一層一層直開了入去、並無一痕跡、直開到最後一層、大樓上、方遠々望見一個如花似玉穿白的婦人、坐在一張牀上。衆人看見、不知是人是鬼、便都立住脚獨何立是公差、只得高聲叫道娘子想是白氏了。府中韓大爺有牌票在此、要請你去、與許宣對甚麼銀子的公事哩那婦人動也不動、聲也不做、何立沒奈何、只得大著膽子、擁衆上前、將走到面前、只聽得一聲響亮、就如青天打一箇霹靂、衆人都驚倒了。響定再近牀邊一看、只見明晃々一堆大銀子、卻不見了婦人、及點々銀數、恰正是四十九錠、何立遂叫衆人將

銀子、扛到臨安府堂上、一一交明、又將所見之事細々稟上、韓大尹聽了道、這看起來自是妖人作祟、與衆人無干地方鄰里盡無罪寧家、許宣不合、私想授受、發配牢城營、銀子如數交還邵太尉、請邵太尉給賞五十兩與李幕事、一件方纔完了。惟李幕事因出首許宣、得了賞銀五十兩、又見許宣因我出首發配牢城、心下甚是不安、即將給賞銀子、都付許宣作盤費、又叫李將仕、與了他兩封書、一封與押司苑院長、一封與吉利橋下開客店的王主人、許宣痛哭了一場、辭別姐夫姐姐、便同解人搭船、到了蘇州城牢營來、一到了就將二書投見范院長、並王主人、虧二人出力、與他上下使了錢、討了回文、與解人而去、許宣毫不喫苦、就在王主人樓上歇宿、終日獨坐無聊、甚是悶人正是

獨上高樓望故鄉 愁看斜日照紗窗

自憐本是真誠士 誰料相逢狐媚娘

白氏不知歸甚處 青々豈識在何方

隻身孤影留吳地 回首家園寸斷腸

許宣在蘇半載甚是寂寞、忽一日王主人進來、對他說道、外面有一乘轎子、坐著一位小娘子、又帶著一個丫鬟尋你、許宣聽了吃驚暗想道、誰來尋我、慌忙走到門前來看、不期恰正是白娘子與青青、一時見了、不勝氣苦因跌著脚、連聲叫道、死冤家自被你盜了官銀、害我有屈無伸、當官喫了多少

苦楚、今已到此田地、你又趕來做甚、白娘子道、小乙官人不要錯怪了、我今特來要與你分辨、王主人見二人、只管立在門前、說長道短恐人看見不雅、因說道、既是遠來有話請裏面去說白娘子乘機便要入去、許宜到橫身攔住道、他是妖怪不可放他進去。王主人因將白娘子仔細看了。兩眼帶笑說道、世上那有這等一個妖怪、不可出口詆人請進去不妨、白娘子進到裏面、先與主人媽々見過、然後對許宜說道、奴家既以身子許了官人、就是我的夫主了、終不成反來遺害官人麼、就是付銀子與官人、也是爲好、誰知有禍、若說銀子來歷不明、罪皆坐于先夫、奴家一婦人、如何得知、奴家一婦人如何是怪、恐官人錯埋怨、故特々來與官人辨明白了、我去也甘心、許宜道這都罷了、只是差人來促時明々見你坐在床上爲何響了一聲就不見了、豈不是個妖怪、白娘子笑道、那一聲響是青々用毛竹片刷板壁、弄怪嚇衆人、衆人認做怪大家呆了半晌、故奴家往床後遁去、衆人既害怕、不敢搜求見了銀子、又以銀子爲重去了、故奴家得脫身、躲在华藏寺前、姨娘家裏、復打聽得你發配在此、故帶了盤纏來看你、并討你婚姻的信息、不期你疑我是妖怪、我只得去了。遂立起身來要走、主人媽々忙留下道、既係遠來了、就要去也在舍下權住幾日白娘子尙未肯、只見青々道、既是主人家好意、再三勸留、娘子再住兩日、再商量況當日原許過嫁小乙官人的、今日也難硬絕、白娘子接口道、差殺人、終不成奴家没人要、定捱在此、主人媽々道既然當初已曾許下、誰敢番悔、選個須好

日子、就在此成就了百年姻眷爲妙。許宜初已認真是妖是怪、今被他花言巧語、辯得乾乾淨淨、竟全然不疑了、又見他標々致々、殊覺動心、借主人媽々之勸、便早欣々然、樂從了、做親之議。白娘子囊中充足、彼此喜歡、到了做親之後、白娘子放出迷人的手段、弄得個許宜昏昏迷迷、如遇神仙、恨相見之晚、時光易過倏忽半載、一日是二月半、許宜同著幾個朋友、到臥佛寺前看臥佛忽走到寺門、前見一道人、在那裏賣藥並施符水。許宜無心偶上前去看々、那道人一見了、便吃驚道、官人頭上一道黑氣定有妖怪纏身、其害非淺、須要留心、許宜原有疑病、一聞道人之言、便不禁伏地拜求救度。那道人與他靈符二道、分付他、三更燒一道、自家頭髮裏藏一道、許宜到家、忙將一道、悄悄の藏在頭髮之內這一道、要等到三更燒化、暗候時、白娘子忽歎口氣道、我和你許久夫妻、尙沒一些恩愛、反信別人言語、半夜三更要、燒符來嚇我、你且把符來燒々看。許宜被他說破、便不好燒、白娘子轉奪過符來、燈上燒了、全沒一些動靜、白娘子笑道、如何我若是妖必然做出來了。許宜道、這不于我事是臥佛寺前一個雲遊道人、說你是妖怪、白娘子道他既說是我妖怪。我明日同你去、且叫他變一個怪形、與你看々。次日分付青々、照管下處夫妻二人、來到寺前、只見一簇人、圍著那道人、正在那裏散符水哩、白娘子輕輕走到面前、大喝一聲道、你一個不學無術的方士小人、曉得些甚麼、怎敢在此胡言亂語、鬼畫妖符妄言惑衆、那道人猛然聽了、喫了一驚、忙將那女娘一

看、見他面上氣色古怪、知他來歷不正、因回言道、我行的五雷天心正法、任是毒妖惡怪、若喫了我的符水、便登時現出形求、何況你一妖女、你敢喫我的符水麼、白娘子聽了笑道、衆人在此做個證見、你且書符來我喫與你看。道人忙書符一道、遞與白娘子、白娘子不慌不忙接將過來、搓成一團、放在口中、用水吞了下去、笑嘻嘻立了半晌、並無動靜。看的人便七嘴八舌、罵將起來道、好胡說、這等一個女娘子、怎說他是妖怪道人被罵、目瞪口呆話也說不出一句。白娘子道他方上野道、毀謗閻賢應該罰他墮落、今看列位分上、只吊他一索罷了一面說、一面口中不知念些甚麼、只見那道人就像有人細縛的一般漸漸的縮做一團、又漸漸的高高吊起空中哼個不住。衆人看見盡驚以爲奇連許宣也驚得呆了。白娘子道若不看他地方子係、把這妖道吊他一年纔好、因輕輕噴口水、那道人早立時放下地來那道人得能落地、便只悵爹娘少生兩隻脚、飛也似的去了衆人一闕而散。夫妻依舊歸家正是

邪々正々術無邊 紅日高頭來有天

寧在人前全不會 莫在人前會不全

過了些時、又是四月初八日佛生日、許宣一時高興要到承天寺去看佛會。白娘子道、甚麼好看既要去、因取出兩件新鮮衣服、替他換了、又取出一把金扇上繫著一個珊瑚墜兒與他榻、又分付他早早

回來、勿使奴記挂、許宣答應了、便穿著一身華服、搖々擺々到承天寺來鬧戲耳朶裏雖聽得亂哄々傳說周將仕家典庫內、不見了許多金珠衣物、現今番捕拿人許宣卻全不在意、自同著燒香的男女、遊玩不期緝捕有心、看見許宣身上穿的、手裏拿的、與失單上相同、便攢近許宣面前道、官人扇子、可借我一看、許宣不知是計、遂將扇子遞與公人、家公人看了是真、便吆喝道、賊賊有了快々拿下、衆人齊上遂把許宣一索子綁了好似

數隻皂鵬追紫燕 一羣饑虎啖羔羊

許宣被捉再三分辯、衆人那裏聽他適值府尹坐堂、衆人竟押上堂來、府尹因問道、穿的衣服扇子、既已現々被捉、其餘金珠贓物、現在何處、從實供來、免受拷打。許宣稟道、小的穿的衣服物件皆是妻子白娘子贈嫁的、怎說賊贓、望相公明鏡詳察。太尹道、好胡說獲物現與單對、怎敢以妻子推託、且你妻子今在那裏。許宣道、現在吉利橋王主人樓上、太尹卽差緝捕押了許宣、速拿白娘子來審、衆人一闕到了店中、王主人見了驚問道做甚麼、許宣道、白娘子害我、特來拿他、王主人道、白娘子如今不在樓上了、因你承天寺不回、他同青青來寺前尋你、至今未回、緝捕見說白娘子不在家、便鎖了王主人來回太尹。太尹道、婦人家尋丈夫、諒去不遠、著王主人尋拿、許宣寄監、候拿到白氏審明定罪、此時周將仕見拿著了許宣、正立在府門前催審、忽家人來報道、金珠等物都在庫

關頭、空箱子內尋著了。周將仕慌忙回家看時，果然全有，只見扇子扇墜。將仕道、扇子或有相同，明是屈了許宜，便又到府中，暗與該房說知有了情由，叫他鬆放許宜，救不復問罪，只說地方不相宜，改配鎮江，將行恰好杭州邵太尉，又使李幕事到蘇州幹事李幕事記挂著許宜忙到王主人家來看他，聞知改配，李幕事因說道、鎮江的李克用，是我結拜的叔叔，住在針子橋下，開生藥舖，我寫書與你，投他自有好處許宜得書，同差不數日到了鎮江，尋到李克用家，見了李克用，將書授上，說道小人是杭州李幕事的舅子，家姐夫有書在此，求老將仕青目，李克用看了書，便請兩個公差同他入去喫飯，一面即差當直的同到府中，下了公文，使用些錢鈔，保領回家，公差討了回文自去。許宜到家拜謝了克用。克用見書上說，許宜原是生藥店中主管就留他在店中做買賣，看了幾日，見他十分精細，甚是歡喜，許宜恐眾人妒忌，因邀他們到酒肆中一叙，通河港，眾人喫完散去，許宜還了酒錢，出門覺道有些醉意，恐怕沖撞了人，只低著頭往屋簷下走，不期一家樓上，推開窗，播下灰來，飛了一頭，許宜便立住了罵道誰家不賢之婦，難道眼睛瞎了，只見那婦人走下樓來道，官人休罵是奴家一時失誤，許宜擡頭看時，不是別人，恰是白娘子。不覺怒從心上起，因罵道、你這賊妖婦，連累得我好苦，吃了雨場大官司，蘇州影也不見，卻躲在這裏，遂走上前，一把捉住，今日決不私休了。白娘子忙陪笑臉道，一夜夫妻百夜恩，你不消著急，且聽我說明了，

若有差錯，再惱也不遲，前日那些衣服扇子，都是我先夫留下的又不是賊贓，因你恩愛情深，故叫你穿在身上，誰知被人誤認，此皆是你年災月晦與我何干。許宜道，那日我回來尋你，如何不見，反在此間。白娘子道，我到寺前尋你，聞知你被捉，決要連累我出醜只得叫青々討隻船，到此母舅家暫住，好打聽消息，我既嫁了你是許家人，死是許家鬼，決不走開，今幸相逢，任你怎麼難為我，我也不放你的。許宜被他一頓甜言，說得滿肚皮的氣都消了。因說道，你在此住，難道是尋我。白娘子道，不是尋你卻尋那個，還不快上樓去。許宜轉過念來，竟酥酥的跟他上樓去住了。正是

許多惱怒欲持刀 幾句甜言早盡消
豈是公心明白了 蓋因私愛亂心苗

許宜與白娘子住了一夜，相好如初。依舊同搬到下處過日子，一日是李克用的壽誕，夫妻二人買了燭麪手帕等物，同到李家來拜壽李克用安排筵席，留親友喫酒。原來李克用是個色中餓鬼，一見了白娘子生得如花似玉，卻便、或東或西、躲著偷看，忽一會兒白娘子要登東，便叫養娘指引他到後面僻靜處，李克用卻暗閃在一邊，讓白娘子到後面去了，他卻輕腳輕手，悄悄跟到東廁的門縫裏張看，不張看猶可，一張看內裏有個如花似玉的佳人，但看見一條吊桶粗的大白蛇，盤在東廁之

上、兩眼就似燈盞、放出金光來。李克用突然看見、驚個半死、忙往外跑、剛轉灣腿脚戰、早一交跌倒、面青唇紫、人事不知。養娘看見、慌忙報知老安人、并主管用安魂定魂丹服了、方纔醒轉、老安人忙問、這是爲何、李克用不好明言、只說連日辛苦、一時頭風病發、不妨、你們自己去飲酒。衆人飲散。白娘子回家恐怕李克用到舖中、對許宣說出本相來、便心生一計、只是歎氣、許宣道、今日出去喫酒、是快活事、因何歎氣。白娘子道、說不得、你道李克用這老兒是好人麼、竟是假老實、見我起身登東廂、他遂躲在裏面、欲要姦騙我、扯裙扯褲來調戲我、叫起來又見衆人都在那裏、怕裝幌子、只得推倒他、方得脫身、這惶恐卻從那裏出氣。許宣道、既不會玷污你、他是我家主人家、出于無奈、只得忍了、以後再休去了、娘子道、既如此、我還有二三十兩銀子在此、何不辭了他、自到馬頭開個小藥舖、豈不强如去做主管。許宣道、好忙與李克用說了、李克用自知惶恐、也不苦留。許宣自開店後、生意日盛一日。忽一日是七月初七、乃英烈龍王生日、許宣要去燒香、白娘子先再三勸他不要去、見他定要去、因說道你既要去、只可在山前山後、大殿上走走、切不可到方丈裏去、與禿子講話、恐他又纏你布施。許宣道、這個使得依你便了、遂在江邊搭了船、徑投金山寺來、先到龍王堂燒了香、然後各處閒走走、無心中忽走到方丈裏去、看見許多和尚圍看像說法一般、方想起妻子叮囑之言、急急退出、卻不防座上大和尚、早看見了道、此人滿臉妖氣、因

分付侍者叫他來說話、及侍者下來叫、時許宣已出方丈去了。大和尚見他不著、便自提了禪杖趕將出來、趕到寺前、見衆人皆欲渡江、因風大尙立在門外、等待忽見江心裏一隻小船飛也似來得快、衆人都驚道、這些小船、怎麼不怕風、又來得快、此時許宣也立在衆人中、伸頭爭看、不期那來的小船、恰正是白娘子與青青立在上面、許宣正吃驚要問他來做甚麼、只見白娘子早遠遠叫道、丈夫風大我特來接你、可速速上船來。許宣見了一時沒主意、正要下船。不料大和尚在後看得分明、大喝一聲道、孽畜你到此做甚麼、正要舉禪杖打去、正見白娘子與青青連般都翻下水底去了。許宣看見、嚇得魂不附體、忙問人道、這禪師是誰。有認的道、這是法海禪師、要算當今的活佛。正說不了、那禪師早著侍者喚許宣去問、道你從何處遇此孽畜。許宣見問、遂將前項事情、從頭說了一遍、禪師道、雖是宿緣、也因汝慾念太深、故兩次三番、述而不悟、今喜汝災難已過、可速回杭、修身立命、如再來纏你、可到湖南淨慈寺裏來尋我、有詩四句、你可奉記者、

本是妖蛇變婦人 西湖岸上賣嬌聲

汝因慾重遭他註 有難湖南見老僧

許宣拜謝了禪師、急急回家、果然白娘子與青青都不見了。此時方信真二人是妖精、次早到針子橋李克用家、把前項事情告訴了一遍。李克用道、我生日之時、被他露出形來、我幾乎被他嚇死、因

你怪我而去，我雖不好與你說，今事既已明白，你且搬到我家暫住不防，過不數日，朝廷有恩赦到來，除十惡大罪，其餘盡行釋放。許宣聞赦，滿心歡喜，遂拜謝李克用回家，一到家即來姐夫姐，拜了四拜，拜畢，李幕事即發話道：兩次官司，我也曾出些氣力，舅，你好無情，怎娶了妻子在外，就不通個喜信兒與我，是何道理，許宣道：我並不會娶妻，姐夫此話那裏說起，正說不了，只見姐，同了，白娘子青青從內裏走了出來道：娶妻好事，何必瞞人，這不是你妻子麼。許宣一見魂不附體，忽叫姐，道：他是妖精，切莫信他，白娘子因接說道：我與你做夫妻一場，並無虧負你處，爲何反聽外人言語，與我不睦，我婦人家，既嫁了你，卻叫我又到那裏去，一面說一面便嗚，咽，笑將起來。許宣急了，忙扯李幕事出去，將前邊之事，細，說了一遍道：此婦寔，是個白蛇精，不知有法可遺他，李幕事道：若果是蛇，不打緊，白馬廟前有個呼蛇戴先生，極善捉蛇，我同個去接他來捉就是了，一人去時，適值戴先生立在門前，便問二位有何見教，李幕事道：舍下有一條大白蛇，相煩一捉，先奉銀一兩，待捉蛇後，別又相謝，戴先生收了銀子，問了住處道：二位請先回，在下隨後即到，忙裝了一包雄黃，一瓶煮的藥水，一徑來道李家，許宣接著，指他到裏邊房內去捉，戴先生走到房門前，只見房門緊閉，因開，門道有人在此麼內裏問道：你是甚人，敢道此內裏來，戴先生道：我非輕易到此，是你家特，請我來捉蛇，白娘子曉得，是許宣請來捉他便笑說道：

蛇是有一條，只怕你捉他不到。戴先生道：我祖宗七八代，俱出名叫戴捉蛇，何況這把蛇怎麼就捉不到，內裏忽開了門，說道既會捉請進來戴捉蛇纔打帳走進去，只見房門口忽刮起一陣冷風來，直刮得人寒毛逼豎，昇現出一條吊桶相的大蟒蛇來，一雙眼睛就是兩隻燈盞直射將來，戴捉蛇突然看見喫了一驚，望後便倒連雄黃確兒，藥水瓶兒，都打得粉碎那蛇張開血紅的大口，露出雪白的牙齒來咬先生，先生見來咬，慌忙跑起來，只恨爹娘少生了，兩隻脚，死命跑出堂前李幕事與許宣迎著問道：捉得如何了，戴捉道原銀奉還，蛇是我捉，妖怪如何我捉得，幾乎連我性命都送了，頭也不回，竟跑去了二人你看我，我看你，無計可施轉是白娘子叫許宣入去，說道你好大膽，怎敢叫捉蛇的來捉我，你若和我好意，便佛眼相看，若不好時，帶累一城百姓，都要死於非命，許宣聽了，心寒胆戰，不敢做聲便往外跑一直跑出清波門外，再三躊躇卻無可奈何，忽想起金山寺法海禪師來，會分付道：若妖怪再來纏你，可到淨慈寺來尋我，今無心中走到此間，何不進去求他遂一徑走到淨慈寺來，急問監寺法海禪師會到上刹來否，監寺回道：不會來，許宣聽說不在，又不敢回家，性急起來遂走到長橋看著一湖清水道：到不如我死了罷省得帶累別人，正要翻身跳下，只見背後有人叫道：男子漢何故輕生有事還須商量，許宣回頭一看卻正是法海禪師，背馱衣鉢手提禪杖，卻好走未許宣納頭便拜道：救我弟子一命，禪師道：這孽障如今在那裏，許宣道：現在姐夫家裏，禪師因取

出鉢盂、付與許宣道、你悄悄到家不可使婦人得知、可將此鉢劈頭一單、切勿手輕、緊々按在不可心慌、我自有道理、許宣拜謝了禪師回家、只見白娘子正坐在那裏、罵張罵李、許宣乘他眼慢演、到他身背後、悄悄的將鉢盂往白娘子頭上一單、用盡半生之力、按將下去、漸漸的壓下去塵到底竟不見了白娘子之形、不敢手鬆、緊々按住、只聽得鉢盂內叫道、我和你數載夫妻、何苦將我立時悶死、略放鬆些也是你的情、許宣正沒法處置、忽報道、外邊有一個和尚說來收妖怪的、許宣聽得忙叫李幕事快請進來禪師到了。許宣說道、妖蛇已罩在此、求老師發落、不知禪師口裏念些甚麼、念畢揭起鉢盂、只見白娘子縮做七八寸、長如傀儡一般、伏在地下。禪師喝道是何孽畜、怎敢纏人、可說備細、白娘子道我本是一蟒蛇、因風雨大作、來到西湖同青青一處安身、不想遇著許宣、春心蕩漾、按納不定、有犯天條所幸者實不會傷生害命、望老師慈悲。禪師道、淫罪最大本不當、怨姑念你千年修煉僅免一死、快現本形。白娘子乃現了白蛇一條、青青乃現了青魚一尾、那白蛇尙昂起頭來望著許宣、禪師因將二怪置了鉢盂之內、扯下福衫一幅、對了鉢盂口、拿到雷峯寺前、將鉢盂放下、令人搬磚運石、砌成一塔、壓于其上、後來許宣又化緣而成了七層、使千年萬載、白蛇與青魚、不能出世、禪師自鎮壓、後又留偈四句道、

雷峯塔倒 西湖水乾

江湖不起 白蛇出世

法海禪師頌罷、大眾作禮而散。惟許宣情愿出家、就拜法海禪師爲師、披剃于雷峯塔下、修行有年、一夕無病坐化。衆僧買龜燒骨、造骨塔于雷峯之下、怪蹟雖不足紀然雷峯自此而成名于西湖之上。故景仰雷峯、又不得不憑吊。

これが西湖佳話中の一文であるが、誠に悪本で脱字があり、句讀點の誤りがあつて讀み悪いもので、少しく訂正もしたが、餘りに武斷過ぎる虞れもあるから大抵にした。次に元享釋書の安珍傳を擧げよう。

釋安珍、居鞍馬寺、與一比丘詣熊野山、至牟婁郡、宿村舍、舍主寡婦也、出兩三婢、箇二比丘、珍有姿貌、中夜、主婦潛至珍所、通心緒、初二比丘、怪慰勞之密、至此始覺、珍曰、我是縮服、豈閨閣之徒乎、寡居餘情、溢于非類、又可恥也、婦人大恨、傍珍不離、珍不得已、軟諭曰、我自遠地赴熊野、宿志畜來久、神甚嫌淫穢、者回不可、歸途必來、婦主姑待之、女喜而歸、曉更、珍早前路、著神祠、即便反、經婦家而不入、急奔過、主婦數歸程、儲供膳、傍門伺路、過期不至、適一僧過、主婦問曰、二比丘某物色、熊野及途、有相見乎、對曰、如婦言、二比丘我親見、而其

沙門去此恐二日前也耳。婦聞大怨瞋、乃入室不出、經宿爲蛇、長二丈餘、出宅赴途、奔馳而過、路人噪亡、相語曰、如此大蛇、何爲取路、人人相傳至珍所、珍思女化、急馳入一寺、寺名道成、告衆乞救、衆胥議、下大鐘、置一堂、納珍鐘裏、堅閉堂戶、已而大蛇入寺、血目銜口、甚可怖畏、衆僧走散、蛇赴堂、戶不關、便以尾擊戶、聲如鐵石、戶漸碎、蛇入堂、應時四戶皆開、蛇乃蟠圍鐘、舉尾敲鐘、火燄迸散、寺衆集看、無爭奈何、移時蛇去、寺衆倒鐘見中、不見珍、又無骨、只灰塵而已、其鐘尙熱、不可觸也、數夕、一耆宿夢、二蛇來前、一蛇曰、我是前日鐘中比丘也、一蛇婦也、我爲淫婦害、已爲其夫、惡趣苦報、不易救脫、而我先身持妙法華、未久遭此惡事、微緣不虛尙爲拯因、願爲我寫壽量品、我等二蛇、定出苦道、我等來寺、願垂哀愍、覺後大憐、乃書壽量品又捨衣資、修無遮會、薦二蛇、其夜耆宿又夢、一僧一女合掌告曰、我等因師慈惠、僧生兜率、女生忉利、語已上天。

これを見ると。雷峯怪蹟では白蛇が美人に化け、安珍傳では、寡婦が大蛇に化けたので、本編の蛇性の姪は雷峯怪蹟と同趣向て白蛇が美人に化けてゐる。

いつの時代であつたか、紀伊の國三輪が崎といふ所に、大宅の竹助と云ふ人が居つた。此の人は海の仕事に幸運があつて、漁獵するに大きなものでは鯨・鮪・小なものでは鰯・飯蛸と、何でも漏らさず取り得るので、家も富貴に暮してをつた。

竹助の子供は男二人・女一人あつた。總領の太郎は性質素朴で、よく家業を勵み、二番目の女子は大和の國の人に所望されて、其所に嫁いつた。三番目の男子は名を豊雄といつて、生れつき優しく、平常に風雅な事ばかりを好んで、農業や漁業などには一向振りむきもしなかつた。父の竹助が、豊雄の性質を心配して思ふには、家財を幾ら分けて遣つても、畢竟は他人に取られて仕舞ふであらう。それぢやといつて、他家に養子に遣つたなら、面白からぬ事でも仕出かして、厭な事を聞くやうになるのも心外である。ただ爲すがままに任せて、博士にでもなればよし、又は坊主にならうと構はない、生命のある限りは、太郎の厄介者にして置かうと考へて、強てかうせよあアせよとやかましくは、云ひ聞かせなかつた。

それで此の豊雄は、家から一里ばかり隔てた新宮の神主安部の弓鷹を學問の師匠として通つ

てをつた。

九月下旬の頃であつた。其日は朝から天氣がよく、いつもより海も凪いであつたのに、驟かに東南の方から雲が出て、小雨が降つて来た。豊雄は新宮の師匠の處から傘を借りて歸つたが、飛鳥神社の神寶庫が見えるあたりから雨が強くなつたので、其の邊の海郎の家に雨宿りした。さうすると、其の家の老人が這ひ出て来て、

「これは親方の家の弟子様でゐられますか、こんな汚ない所にお出で下さつて、まことに恐れ入つた事で御座ります、まアこんな物でもお敷き下され」

といつて、圓座の塵埃を拂叩いて勧めた。豊雄は辭退して、

「いや、雨の晴間を休息してもらふだけだから、何もいりませぬ、どうかお騒ぎ下さるな」といつて休んでゐた。其時外面に美しい聲がして、

「此處の軒端を一寸お借りします」

と云ひながら入つて来たのを、不思議に思つて見ると、年頃は十九か二十歳位の女で、容顏・

髪かみの結むすびぶり如何にも艶あでかで、遠山とほやま摺すりの染ぞめの善よい衣服きものを著き、稚子ちご鬢むすの十四五ばかりの清麗きよれいな少女せうじゆに包物つひものを持たせて、びっしより雨に濡ぬれて侘わびしげに門かどに立つた。

其女そのをんなが豊雄とよゆうを見て、さつと顔面かほを紅あからめ、恥はにかかしげな様子を、豊雄は高貴な婦人ふじんと見て、知らず識しらず心が動き、且つ想像さうぞうするに、此こゝの近ちかくにこんな美人びじんの居ゐるならば、それを今まで聞かぬ事はない筈はずだ、これは屹度きつと都みやこの人が、三さんつの御山おやま詣まゐりのついでに、珍めづらしい海の景色けしきでも見物けんぶつしようと思つて此所こゝらに來たのであらう。それにしては、男おとこの供たごを一人も連れないのは、不ぶ用心しんな事だと思ひながら、少し席せきを譲ゆづつて、

「ここにお入りなさい。雨も其のうち止みませう」

といつた。女は、

「それでは御免ごめん下さい」

といつて入つたが、廣さの幾いらもない家の事であるから、二人は肩かたの付き合あふばかりに竝ならんでゐるので、豊雄は能く見ると、近勝ちかまさりして此こゝの世よの中なかの人ひととは思おもはれない程ほどの美人びじんなのに、豊

雄は心も空になつて女に向ひ、

「御身分の高い御方とお見受け申しますが、三つの御山に御詣りなされるので御座いますか、それとも峯の温泉へでもおいでになつたので御座いますか、こんな見どころもない荒磯をどうしてお歩行なされるのですか。此處は昔の人が、

(七) くるしくも降りくる雨か三輪が崎

佐野のわたりに家もあらなくに

と詠みました所で御座いますが、此の歌も定めし今日のやうな雨降で詠んだので御座います。」と云つて又

「此の家はきたなくとも、私が親の目を懸けてやつておく男ですから、御心置きなく雨晴しをして下さい。そして何方に御宿をおとりで御座いますか。そこまで御見送するのも卻つて御無禮と存じますから、此の傘をお持ち下さい」

といった。女は、

「まことに御親切ありがたう御座います、其のお志に甘え、濡れた著物も乾してまゐりませう。妾は都の者では御座いません。つい此の近所に年來住んで居る者で御座いますが、今日は朝から宜い日和なので那智の御山まで参詣致しましたところ、驟雨の恐ろしさに、貴方様の御休息になつてをらるるとも存ぜぬより、不用意にも立ち寄りして戴きました。此所から遠くも御座いませので、雨も小止になりましたから歸り仕度を致しませう」

といふのを、豊雄は強ひて、

「此の傘お持ち下さい。いつかの序にお貰ひ致しませう、雨はまだすつかり止みもしません。してお住ひは何處で御座いますか。此方から頂戴に使者を差上げませう。」

といふと、女は、

「新宮の近くで、縣の眞女兒の家はお尋ね下さいませ、もう日も暮れませうから、それでは御親切に甘えてお傘を拜借して歸ります。」

といつて、傘を持つて外に出るのを、豊雄は見送りながら、自分は其の家の主の簀笠を借りて

我が家に歸つて來たが、猶も先刻の女の佛が忘れかねて、寢ても眠られなかつたが、曉方になつて暫くうとうとと眠つたが、彼の眞名兒が家に訪ねて行つて見ると、門も家も宏大到に造られて、葎をおろし、簾を垂れ込めて、ゆかしげな住ひであつた。すると眞名兒が出迎へて、

「お情が忘れられませす、お出でを待ちこがれてをりました。此方へお入り下さいませ」

といつて、奥の座敷に誘ひ、酒や菓子や種々と款待された。豊雄は嬉しい酔心地で、遂に枕を並べて語らつたと思ふと、夜が明けて夢も覺めた。これが現在の事ならばと思ふと、覺えず心が急きたてられて、朝飯をも打忘れて外面に浮れ出た。そして新宮の郷に來て、縣の眞名兒の家はと逢ふ人毎に尋ねたが、誰も知つた者が無い。半過ぎまで尋ねて尋ねあぐんでゐると、彼の稚子鬘の小女が東の方から歩いて來た。見るより豊雄は大きに喜んで、

「縣の娘子様のお住ひは何處ですか、傘をお貰ひに參りました」

といふと、小女は莞爾笑つて、

「よくお出で下さいました。此方へおいで下さいませ」

といつて、前に立つて行くと、幾程も來ぬところで、

「此處で御座います」

といふ所を見ると、門を高く、家も大きく、葎をおろし、簾を垂れ込めたまでが、今曉がた夢で見たのと寸分違はぬので、豊雄は不思議に思ひながら門の内に入つた。

小女は家の中に走り入つて、

「傘をお貸し下さつたお方がお出でになりましたので、お連れ申しました」

といふと、

「何方においでなさるか、こちらへ御案内申せ」

と云ひながら奥から出て來たのは眞名兒であつた。

豊雄は、

「此の新宮で安部先生と申しますのは、私が年來教へを請けて居ります師匠で御座います。其所に參ります序に、傘を戴いて歸らうと存じまして推して參りました。お住居がわかりま

したからは、改めて又お伺ひ致しませう」

といふのを、眞女兒は強ひて止めて、

「まろや、お止め申せ」

と言ひつけると、小女は豊雄の前に立ち塞がつて、

「貴方様は傘を無理にお貸し下さつたでは御座いせんか、其の御返報に無理にお留め申します」

といつて、豊雄の腰を押して、南向の座敷に請じ入れた。豊雄は其所ら見廻すと、板敷の間に牀疊を敷いて、几帳や御厨子の飾り、壁代の繪なども、皆古代の立派なものばかりで、普通の人の住居とは見られなかつた。其所に眞名兒が出て来て、

「子細あつて無人の家となりましたので、何んにもお饗應が出来ませんが、ただ粗酒一獻差上ませう」

といつて、高杯や皿の立派なのに、山海の珍味を並べ盛つて、土器をさし、瓶子を捧げて小女が

酌をするので、豊雄は夢見る気持ちで、また覺めて悔むのではないかと不安であつたが、正しく現實なので却て不思議がつてゐた。

豊雄も眞名兒も共に酔心地になつた時、眞名兒は杯を舉げて豊雄に向ひ、爛漫と咲いた櫻の枝の、水に映つたやうな顔に、そよそよと水の面を吹く春風のやうな笑みを含み、梢を潜る鶯のやうな優しい聲でいふには、

「お恥しいことながら申上げずに戀死にでも致したならば、あれは神の祟だなどと噂されて、無き名を神様に負はすやうな勿體ない事となりますから、恥を忍んで申しあげます、決して心にもない徒言とお聞き下さるな、もと妾は都の生れで御座いますが、父にも母にも早く離別れまして、乳母の許で成長りましたが、此の國の國守の下司、縣の何某といふ者に妻として迎へられまして、一緒に此國に下りまして最早三年にもなります。夫は任期がまだ果てない此の春に、假初の病で亡くなりましたので、便りのない身となりました、それに都の乳母も尼となつて、行方定めぬ修行の旅に出たと聞きますので、都も今では知らぬ他國に

なりました。不憫と思召し下さいませ。昨日の雨宿りに、御親切な眞實あるお方と存じましたので、これからさきの一身を貴方様にお任せして、生涯お仕へしたいものと存じますのを汚れた身體とお見捨てなくば、此の杯で千歳の契りを固めたう存じます」

といふ。豊雄はもとより斯うありたいものと、心が亂れるまでに思ひ詰めてをつた戀ひ女房であるから、塙の鳥の飛び立つばかりに嬉しく思つたが、併しまだ部屋住の身を顧みると、親や兄弟の許しもなくして勝手に結婚もなり難く、且は嬉しく、且は畏れて、急には返事もしかねて居ると、眞女兒は氣の毒に思つて、

「女の淺はかな心から、嗚呼がましい事を申しあげて、取返しつかぬことを致しまして恥かしう御座います。こんな淺ましい身を海にでも投げて果てもしませずに、人様の御心を煩はしましたことは罪の深いことで御座います。只今の言葉は浮いた徒ごとでは御座いませぬど、ただ酒の上の戯言と思召されて、此の前の海にお捨て下さいませ。」

といふ。豊雄はこれに答へて、

「始めから貴女を都の高貴な方と御見うけしましたが、自分ながら目が高いと思ひます。鯨の寄るやうな荒濱に生ひ立つた田舎者が、こんな嬉しいお言葉をいつの世に聞かれませう、御即答の出来ませぬのは、親や兄の世話になつてをる身體で、自分の物としては爪か髪の外は御座いませぬ、何を結納としてお迎へするすべもありませんので、ただただ身に財寶の無いのを悔んでをるので御座います。若しどんな事でも御忍耐下さるなら、いかにもいかにも後見致しませう。孔子様さへお倒れになるといはれる戀の道には、親も身も忘れて……」

といふと、眞女兒はまた、

「まことに嬉しい御心をお聞きいたしました上は、貧しい暮しで御座いますが、時折お出で下さつて一緒に御住み下さい、爰に前の夫が身にかへて二つとない寶として持つてをつた佩刀が御座います、これをいつも御身體にお帯びになつて下さいませ」

といつて呉れたのを見ると、裝飾は金銀を鏤めた太刀の、鍛や鈍の目覺しきまでの古代の業物であつた。豊雄は、

「物のはじめに御辭退致しますのも縁起の悪いことで御座いますから、遠慮なく……」
 といつて、それを受け納めた。それで眞女兒は、

「今夜は此處でお明し下さい」

と、強ひて止めたが、豊雄は、

「まだ許しを得ませぬ外宿は、親が咎めませう、明日の夜は、父や兄を能く言ひこしらへて、改めて参りますから」

といつて、其所を出た。家に歸つて、其の夜も牀に著いたが、思ひ寢のよく眠らずに夜が明けた。

兄の太郎は、漁網を調べる爲に朝早く起き出たが、何心なく弟豊雄が寢間の戸を覗き込むと、消え残つた燈火の影に輝とする太刀を枕邊に置いて寝てゐた。これは怪しい、何處から持つて來たのだらうかと、不安に思つて戸も荒しく明けたので、豊雄の目が覺めた。兄が立つてるのを見て、

「何か御用ですか」

といふと、太郎は、

「輝かしい枕もとの物はそれア何ぢや、高價の物は海人の吾々の家には相應しくない、親御に見つかつたならば、どんなに叱られるか」

といふと、豊雄は、

「お金をもつて買うたではありません、昨日人に貰つたのを、ここに置いたのです」と答へた。太郎は、

「どうしてそんな寶物を呉れる人が此の邊に居らうか、彼の小むづかしい唐人の書物を買ひ溜めるのさへ、家の冗費と思つて居るが、親父が黙つて居るから、私は今まで何にも言はないのぢや。其の太刀差して大宮の御祭りを練り歩くつもりか。どうしてさう狂氣染みたことをするのか」

といふ怒りを帯びた聲が高かつたので、父が聞きつけて、

「性無し者が何を仕出かしたのぢや、此所に連れて来い。太郎」と呼ぶと、太郎は、

「何處で求めて来たのか、大將軍の差すやうな輝く物を買つて来たのは善くないと叱つたのぢや、お側に呼んで、よう聞き糺して下され。私は船子どもの差圖に行かなければなりません」と云ひ捨てて出て行つた。母親は豊雄を呼んで、

「そんな物、何の爲に買ったのぢや、家も金も皆太郎が物ぢや、お前の物とて何一つ持つてをる。平常はお前の我儘を許して置いたが、こんな事で兄に悪まれたら、末とは何處にも身の置きどころがあるまい。學問もした者が、なんで是程の事が分らぬのぢや」

といふ。豊雄は自ら辯護して、

「本當に買った物ではありません、ある譯で人が呉れたのを、兄が見咎めて責めるのです」といふと、父はまた、

「お前になんの取得があつて、そんな寶物たからものを人様ひとさまが呉れたのぢや、ちつとも譯わけがわからない

ではないか、さ、その所縁いはれをよつく言へ」

と罵つた。豊雄はまた、

「此の事は私からは言ひ兼ねます、他人を頼んで申しあげませう」

といふと、父はまた、

「親や兄にも云へぬ事を、誰にいふのぢや」

と、聲荒く叱るので、太郎の嫁よめが傍そばに来て

「御不承ごふじょうでも、その譯妾わけわらしが伺うかひませう、こちらへいらつしやい」

と、豊雄を宥なだめて立つと、豊雄も後あとについて離れの座敷いに入つた。豊雄は兄あにへ向つて、

「兄に見咎められぬ前に、内證ないしょうで姉様ねいさんに御相談しようと思つてをりましたのに、早く見つけられて叱られたのです。實はかくかくの女の方が便りない身の上なので、後見うしろみして呉れというて其の家の寶を呉れたので御座います。まだ部屋住へやずみの私が、親の許しも受けなくて勝手な事をするなどは、勘當かんたうされるばかりでせうから、今更後悔するよりほかありません、姉様ねいさんど

うぞ不憫と思つて下され」

といふ。兄娘は笑つて、

「男子の獨寝するのを、かねがねいと思つてゐたのぢや、それは結構、妾が足らばずとも、能く取りなませう」

といつて、其の夜夫の太郎に、

「かくかくの事で御座います、丁度善いでは御座いませんか、親父様の手前を善いやうに取り持ちなされ」

といつた。太郎は眉を擧めて、

「それは怪しい、此國の國守の下役に縣の何某といふ人を聞いた事がない、我家は村長であるから、其のやうな人の亡くなつた事が耳に入らぬ筈がない、兎に角その太刀を此所に持つて來て見せよ」

といはれて、太郎の妻は早速太刀を持つて來ると、太郎は丁寧に見終つて、溜息を吐いていふ

には、

「いやはや爰に恐ろしい事が出來あがつた、近頃京都の大臣様が御願成就なされて、此地の權現様に澤山の寶物を奉納された。ところが其の御神寶が御寶藏の中で、僅の間に失せたといふので、大宮司様から國守様に訴へ出られた。國守様は此の盜賊を探して捕へようがために、介のお役の文屋の廣之様が、大宮司様の館に來られて、今此のことの御詮議中だと聞いた。此の太刀はどう見ても下司などの佩くべき物ではない。親父様にもお見せませう」といつて、父の前に持ち行き、

「かくかくの恐ろしい事がありますが、どうしたもので御座いませう」

といつて父に相談すると、顔色を眞青にして、

「これは困つた事が出來たものぢや、常日頃は毛一本盗みなどはせぬ豊雄だが、何の因果でこんな悪い事を仕出かしたのだらう、若し外から露顯したなら、此の家も斷絶しよう、先祖に對し、また子孫の爲、不孝の子一人惜むことはない、明日早速、大宮司様へ訴へ出よ」

といった。

太郎は夜の明けるのを待つて、大宮司の館に往つて、しかじかのわけを申し出て、其の太刀を見せ奉ると、大宮司は驚いて、

「これこそ大臣殿の奉納物ぢや」

といふと、文屋の廣之が聞いて、

「此の外にも紛失したものを問ひ糺さう、召捕れ」

と命令したので、武士十人ばかりが、太郎を案内に大宅の家に向つた。

豊雄はそんな事とも知らずに、書見してをると、武士等が押ししかかつて豊雄を捕へた。豊雄は、

「これは何の咎で」

といふのも聞き入れずに縛りあげた。兩親や太郎夫婦も、今になつて見ると、淺ましくも不憫に思ふばかりであつた。

「公廳からのお召ぢや、疾く歩め」

とて、武士等は豊雄を中にとり籠めて、介の居る館に追ひ立てて行つた。

介は豊雄を白眼まへて、

「手前が神寶を盗み取つたのは、例のない恐ろしい國賊ぢや。猶ほ此の外の種々の財寶は何處に隠しをる。すつかり白狀致せ」

といつて責めた。豊雄はやうやう事情を覺つて、泣きながら、

「私は決して盗みを致しませぬ。かくかくの譯で縣の何某の御婦人が、亡き夫の佩びたものぢやと申して私に呉られた物で御座います。今直ぐにも其の婦を召し出されて、私には罪の無い事をお明らめ下され」

といふと、介はいよいよ怒つて、

「己が下役に縣の姓を名乗る者はゐない、其の偽りをいふ罪は卻つて重いぞ」と叱つた。豊雄は、

「このやうに縛られて、いつまで偽を申しませうや。どうぞ彼の女を呼んでお尋ね下され」と歎願すると、介は武士等に向つて、

「縣の眞女兒なる者の家は何處ぢや。此の罪人を案内にして召捕つて參れ」

といふと、武士等は畏つて、また豊雄を押し立てて、眞女兒の家に行つて見ると、嚴めしく造りなした門の柱も朽ち腐り、軒の瓦も大方は碎け落ちて、葱草が生ひさがり、人が住んで居るとも見えない。豊雄はこの有様を見て、ただ呆れはてるばかりであつた。武士等はそこら駆け廻つて、近隣の者共を呼び集めた。木樵の爺や米搗男等がやつて來て、其所に恐れ惑つて皆跪ばつた。武士がそれ等に向つて、

「此の家は何者が住んでゐたのぢや。縣の何某の婦の此處に居るといふのは本當か」と聞き糺すと、鍛冶屋であるといふ爺が這ひ出して、

「其のやうな人の名は決して聞きをり申さぬ。此の家は三年ばかり前までは、村主の何某と云ふお金持が、賑しく住んでをられたなれど、筑紫へ商賣物を澤山積んで下つた船が行方知れ

ずになり申してからは、家に残つた人も散り散りになり、その後は住む人とはほとんど無いのに、此の男が昨日此の荒家に入つて、暫くして歸つたのを、不思議な事ぢやと、これ此の漆師の老人が申された」

といふと、武士等は、

「ともあれ、よく見届けて介殿に申し上げよう」

といつて、門を押し開いて入つて見たが、家の内は外よりも荒れまさつてゐる。なほ奥の方に進んで行くと、前栽廣く造られてゐるが、池は水涸れて、杜若・澤瀉の類の水草は皆枯れ果て、葎生ひ靡いた中に、松の大木が吹き倒されてあるのも物凄しい。客殿の格子戸を開くと、腥い風がさつと吹いて來たので、人々は恐れ惑うて後込した。豊雄はただ聲を呑んで泣いてゐる。武士の中に、巨勢の熊鷹といふ者が膽の太い男で、

「各方、拙者の後について來られよ」

といつて、板敷を荒らかに踏んで進んで行くと、塵埃が一寸ばかりも積つて、鼠の糞のひり散

された中に、古い几帳を立てて、花のやうに美しい女が一人坐つて居た。熊鷹が女に向つて、

「國守のお召しぢや、急いで參られよ」

といったが、答へもせず居るので、近く進んで捕へようとする、忽ち地も裂けるばかりの霹靂が鳴り響いたので、皆の者が逃げる間もなく其所に倒れた。暫くして見ると、女は何處へ行つたのか影も形も見えなかつた。

其處の牀の上に、きらきら輝く物がある。人々が恐る恐る行つて見ると、(一一)猫錦・(一二)吳の綾・(一四)倭文・(一五)縑・(一六)楯・(一七)靱・(一八)釜の類で、それが皆前に失せたといふ神寶であつた。

武士等は此の品々を持ち歸り、荒屋に美人といへ、晴天の雷といへ、怪しかつた事共を仔細に言上した。廣之も大宮司も妖怪のなせる業であることを悟つて、豊雄を責める事を寛大にはしたが、併し當の罪は許されずに國守の館へ渡されて獄屋に繋がれた。なれども、豊雄の父と兄が多く物を賄賂して、其の罪を贖うたので、百日ばかりで赦されることが出來た。牢屋から出た豊雄が、

「こんな面目もない身になつて、近所の人に顔見られるのも嫌ぢやから、暫く大和の姉の許に往つて世話にならうと思ひます」

といふと、親や兄も、

「まことにこんな憂目を見た後は、重い病氣にもなるものぢや、氣晴しに往つて二月ばかりも暮して見よ」

といつて、人を附けて出立させた。

大和に嫁入した二番目の姉の家は、(二七)石榴市といふ所で、(二八)田邊の金忠といふ商人であつた。

豊雄が訪ねて來たのを喜び、その上此の頃の災厄を不憫に思つて、いつまでも永く滞在せよといつて、親切に勞はつた。

年もかはつて二月になつた。此の石榴市といふ所は、泊瀬の寺に近い所であつて、諸所の佛の中でも、此の泊瀬の御佛の靈驗あらたな事は、唐土までも聞えてをるといはれたので、京都や奈良の都はもとより、遠く田舎からも參詣する者が數多で、春の頃は殊に賑はつた。そして

此の石榴市は其の参詣人の通る道筋なので、必ず此の市に泊るので、旅人宿が軒を並べてあつて旅人を止めた。

田邊が家は御蠟燭・燈心の類を商ふので、それを買ふ人が店先狭きまで立ち入る中に、都の人の忍びの参詣と見えて、稀に見る美人一人が、小女一人を伴にして薰物買はうとして此の店に立ち寄つた。其の小女が、店先で豊雄を見て、

「旦那さまが此所において御座います」

といふので、驚いて見ると、彼の眞女兒とまるやであつた。豊雄は、

「あア恐ろしい」

といつて、奥に隠れると、金忠夫婦が、

「これはどうしたのぢや」

と、不思議さうに聞くと、豊雄は、

「かねての鬼が此所まで逐うて來たのぢや、彼に近寄りなさるな」

といつて、猶も隠れようとして、まごまごするのであつた。あたりの人々が、

「それは何處に」

といつて立騒ぐと、眞女兒が内へ入つて來て、

「皆々様、お疑ひ下さるな、妾の旦那様も恐がりなさるな。妾の至らぬ心から、旦那様に罪を著せ申した悲しさに、御在家を探し求めて、事の由縁をも申上げ、御安神おさせ申さうと存じて、お住居を尋ねましたのに、その甲斐あつてお目にかかる事の出來ましたのは、實に嬉しう御座います。御主人様、よくお聞きわけ下さいませ。妾が若しも怪しいもので御座いましたなら、此の人出の多い繁花の場所へ、しかも今日のやうならかな眞晝にどうして出られませう。衣物には縫目も御座います、お日様に向ひますれば影も御座います。此の正しい道理をお聞き下さつて、お疑ひをお晴し下さいませ」

といふ。豊雄は稍人心地がついて、

「お前が確かに人間でない證據には、私が捕はれて武士共と一緒に前前の屋敷に行つて見る

と、前の日とはまるで替つて、淺ましく荒れ果て、まことに鬼の住むべき家に唯一人であるたの
のを、皆として捕へようとする、忽ち青天に雷が鳴つて、お前が跡形も無くかき消えたの
を目前に見たのに、どうして人間であるものか、それに又逐ひかけて来て、今度はどうしよ
うとするのぢや。早く去つてしまへ」

といふと、眞女兒は涙を流して、

「まことにさう思召すのは御尤で御座いますが、妾の申上げのことを暫くお聞き下さいませ。あなた様がお役所へお召捕られになつたと聞きましてから、豫て恩恵をかけてやつて居りました鄰の老人をかたらつて、俄かに荒屋のやうにこしらへたので御座います。そして妾を捕へようとした時、雷を鳴らしたのは、まるやが謀らひで御座いました。其の後、船をもとめまして難波の方に遁れましたが、あなた様の御安否を知りたく存じ、此所の觀音様に願懸しましたところ、二本杉の靈驗あつて、かう嬉しい逢ふ瀬を得ましたことは、ひとへに大慈大悲の御利益を蒙つたので御座います。又種々の御寶物は、女の身でどうして盗み出

すことが出来ませう。あれは先の夫が悪い心からした事で御座います。こここの所をよくよく御聞きわけ下さいまして、妾の思ふ心を露ばかりでもお受けとり下さいませ」

といつて、清然と泣いた。

豊雄は且は疑ひ、且は不憫にも思はれて、何もいふべき言葉がなかつた。金忠夫婦は、眞女兒がいふ事の道理が明らかなのに、又その女らしい立振舞を見て、少しも疑ふ心はなく、

「弟の話では、世にも恐ろしい事と思つたのに、そんな不思議な事のあるべき世ではなし、はるばる尋ねあるきなさるのがおいとしい。弟が合點なくとも、拙者共がお返めいたさう」といつて、奥の一間に迎へ入れた。

眞女兒は田邊の家に一日二日と過ごすうちに、夫婦の機嫌をとつて、豊雄との仲をひたすら歎願した。金忠夫婦は、その志の厚きに感じて、豊雄に勧めて遂に結婚を取りはからつた。豊雄も日に日に心も解け、もともと眞女兒の美貌を愛し、千歳をかけて契るのは、大和の名所、葛城や高間の山に夜とごとに雲が湧いて、初瀬寺の曉の鐘にやうやく雨が收まるといつたあり

さまで、ただ相逢ふ事の遅かつたのを今は卻つて恨むのであつた。

早くも三月になつた。櫻花も咲いた。金忠は豊雄夫婦に向つて、

「嵯峨や御室の花には及びませまいが、紀の路よりは勝りませう。花の名所の吉野山は、春はまことに善い所ぢや。三船山や、菜摘川は平常に見ても飽かぬ所ぢやが、此頃はどんなに面白からう。さア出かけませう」

と云ふと、眞女兒は莞爾して、

「よき人のよしと、歌にも賞められた吉野の山は、都の人も見ぬのを恥と申してをりますが、妾は幼少の時から、人出の多い所や、長い道申しますると、氣がのぼせまして苦しいなる持病が御座いますので、お供の出来兼ねますのは誠に心辛く存じます。妾はお留守を致しまして、お山のお土産をお待ち申します」

といふのを、金忠は、

「それは歩けばこそ病氣も出ませうが、車こそ持つてゐませぬが、駕籠なり馬なり、決して

土をお踏ませ致すやうな事はしませぬ。お前様が後に残つて居られると、弟がどのやうに心配するか知れませぬ」

といつて、夫婦が一緒に勧めるので、豊雄も、

「こんな御親切に云はれるのに、途中で倒れるまでも、どうして行かずに居られますか」といふので、眞女兒は心外であつたが、止むなく出かけた。

花見の人とは紅白粉はもとより、今日を晴れと著飾つて居るけれども、眞女兒が天性の美しさには及ぶものもなかつた。

吉野の何某の院は、田邊の家と心易い間柄なので、先づ其所を訪ねて行つた。院の住職が出迎へて、

「此の春はお出でが遅う御座りました、花は半ばは散り過ぎて、鶯の聲も老いたなれど、奥の千本あたりはまだ宜い所も御座りませうから、其の邊へ御案内致さう」

といつて、精舎の精進料理で夕飯を馳走した。

しののめの明け方の空はいたく霞んでをつたが、ほがらほがらと晴れゆくまに見渡すと、此の院は高い所にあるので、其所此所の僧坊などが明らかに見おろされ、山中の種種の鳥が、方方に轉り合ひ、櫻の外にも、草にも木にも色々の花が咲き交つてゐるのは、同じ山里でも他所の山里とは違つて、目の覺めるやうに美しかった。

初めて来た方には、瀧のある方が面白からうといふので、案内人を頼んで其の方へ出かけた。谷を繞り回つて下りて行くと、むかし行幸のあつた離宮の跡は、岩をはしり落つる瀧のむせび流れるのに、若鯨が羣をなしてそれを泳ぎのぼるなど、他所では見られない面白さであつた。花咲く小草を毛氈がはりに、辨當を開き散らして皆と喰ひながら遊山した。

その時岩を傍うて来る人があつた。髪は麻絲を束ねた如く、亂れ勝ちに眞白であるが、手足は常人よりも達者さうな老人であるが、此の瀧の側に近寄つて来て、人人を不思議さうに見詰めて居たが、

「奇怪千萬、此の悪魔奴、なんで人を惑はす。此の翁が目前でも其の儘で居られるか」

と、つぶやいたが、それを聞くと、眞女兒とまろや二人は、同時に躍り上つて目の前の瀧壺に忽ち飛び入ると見えたが、水は空さまに湧きあがつて、その姿も匿れたと見ると、俄に空低く摺墨を流した様な眞黒な雲が起り、雨は篠を亂したやうに、ドツとばかりに降つて来た。老人は人人の慌て惑ふのを押し靜めて、人里に下つた。

人人は逃げ走つて、生きた心地もなくあやしげな軒下に雨宿りをしてゐると、其所に先の老人がまたも見えて、豊雄に向ひ、

「熟く其方の面色を見ると、前の隠神の爲に惱まされてゐられるが、翁が助けなかつたなら、遂には生命を失しなさらう。此の後はよく慎まつしやれ」

といふので、豊雄は地に御辭儀して、此の事の始めよりを物語つて、

「此の上にも御助け下さい」

と、畏れ敬ひながら歎願した。老人は、

「さればぢや、彼の魔物は年經た大蛇ぢや、あれは姪らなもので、牛と孳んでは麟を生み、

馬と交つては龍馬を生むと申す。其方に魅つたのも、其方の美男なのに淫心を起したものと見える。かくまで執念深いからは、此の上はよく慎まなければ今度は生命を失ふやうな事になりますぞ」

といふので、人人はいよいよ恐れ惑ひながら、其の老人を尊んで、遠津神であらうといつて崇め拜んだ。老人は笑ひながら、

「いや、私は神でも佛でも御座らぬ。大倭の神社にお仕へ申す當麻の酒人といふ老人ぢや、道の案内してあげませう、此方へ來なされ」

といつて、歩き出したので、人人は其の後について歸つて來た。

翌日は人人が早速大倭の郷に、昨日の老人を訪ねて、恩恵を述べ、謝禮として美濃絹三尺・筑紫綿二積を贈つて、なほ妖災の身褻をして下さいと謹んで願つた。老人はこれ等の品を受け納めて、祝部等に分け與へ、自分は少しも取らないで、豊雄に向つていふには、

「彼の蛇は、其方の眉目秀麗なのに畜生ながら慕ひ寄つてつき纏ひ、其方は又、蛇の假の姿

に魅せられて、丈夫の心を失ひさしやつた。今からは雄健心を振り起して、よく心を落ち著けなかつたならば、此の老人が力を借らずとも、妖魔は自づと退散するでござらうから、よくよく精神を静めなさい」

と真心こめて諭して呉れた。豊雄は夢の覺めたやうな氣持で、お禮の言葉も云ひ盡さずして歸つて來て、金忠に向つて、

「この年月、彼の畜生に魅せられたのは、私の心が方正でなかつたからで御座います、親や兄に孝悌も盡さずに、こちらの御厄介になつて居りますのは、まことに道理に負いてをります。御志は誠に忝けなう御座いますが、又こそ參ることに致しませう」

といつて、紀の國の己か家に歸つた。

豊雄の兩親や兄夫婦が、吉野での恐ろしかつた話を聞いて、いよいよ豊雄の罪でないのを憐み、かつは又、妖蛇の執念深いのを恐れた。親と兄夫婦は豊雄を獨身で居らせるから、こんな事も出て來るのぢやと、俄に妻を迎へさせようと相談した。

芝といふ里に、芝の庄司といふ者があつた。女子一人持つてゐたのを、都に上して内裏の采女に仕へさせてゐたが、此の度暇を貰つて此の豊雄を婿にしようと、媒人を以て大宅が許へ申しこんだ。大宅が方でも渡りに船と喜んで、婚姻の約束をした。斯くて庄司から都に女子を迎へに人を遣つたので、采女の富子も喜んで歸つて來たが、年來の大宮仕に馴れたので萬事の行儀作法から身の容姿まで見違へる程美しくなつた。豊雄はここに婿に迎へられて、富子が容貌も美しく、すべてが満足であつた。

婚姻して最初の夜は別にいふべき事がなかつたから筆を擱く。二日目の晩である、豊雄はほろ酔機嫌で、新妻の富子に向つて

「年來御所住ひの貴女には、田舎者の私等などはうるさいでせう、あの御所などでは、何の中將・何の宰相殿などといはれる立派な方々に添ひぶした事であらうと思ふと、今更憎らうしう思はれる」

などと戯談をいふと、富子はやがて面をあげて、

「古い契りも情もお忘になつて、斯く因縁もない人を愛されるのは、貴方よりも妾の方が恨みに存じて憎らう御座います」

といふのは、妾こそ富子であるが、正しく眞女兒が聲であつた。豊雄は聞くにあさましく、身の毛もたちて恐ろしく、ただ呆れ惑ふのを、女はほほ笑んで、

「貴方何も不思議に思ひなされるな、あれほど二人の中を海と深く、山と高くお盟ひなされて早くもお忘れにならうとも、しかるべき縁が御座いますれば、又もお逢ひしますのに、他人の言葉を眞實らしく思召されて、無理にも妾を遠ざけられたなら、その恨みは報いませう。紀の路の山山こんな高いなれど、貴方の血を以て、峯から谷と灌ぎませう。あつたらお身體をむやみな事になさいませう」

といふので、豊雄は恐ろしさに、わなわな戦慄へて、今にも取り殺される心持で氣絶した。其の時、屏風のうしろから

「旦那様、何故そんなにおむつかりなさる、こんなに目出度い晩なのに」

といつて出て来たのはまるやである。豊雄は見るに、臆消え、眼を閉ぢて疊の上に平伏した。女二人は賺したり嚇したりして、代る代る宥めたけれども、豊雄はただ死んだやうになつてしまつたが、其のうちに夜が明けた。

豊雄は閨房を逃げ出し、外舅の庄司に向つて、

「昨夜は斯く斯くの恐ろしい事がありました、これをどうして避けたら宜いでせうか、よく御工夫して下さい」

といふさへも、背後で聞いてゐるかも知れぬと、聲を密めて語るのであつた。庄司夫妻も眞青になつて歎き惑ひ、

「これはどうしたものぢやらうか。さうぢや、都の鞍馬寺の和尚さんで、毎年毎年此地の熊野に参詣なされるのが、昨日から此の向山の寺に泊つてゐらつしやる。たいさう験のある和尚さんで、疫病や憑物や蝗の災難なども禱り落されるといふ噂で、此の郷の人は皆尊敬し合つてをるから、此の和尚様にお願ひしよう」

といつて、慌て急いで迎へると、暫くして来て呉れた。これこれの次第だと語ると、其の和尚が鼻を高くして、

「これ程の魔物を抑へ捕るに、何の造作もないことぢや、まア御安心なさつて、御氣を静めなさい」

と事もなげにいふので、人人は安心した。和尚はまづ雄黄をもとめて、それに何やら薬の水を調合し、それを小瓶に入れて、その閨房に向つた。人人は驚き隠れるのを、和尚は嘲らつて、

「御老人もお子供衆も必ず其處にゐなされ、只今、其の蛇を捉へてお目にかけてませう」

といつて進んで行つた。閨房の戸を開けるを遅しと、待つてゐたかのやうに彼の蛇は頭を差し出して和尚に向つて来た。その頭はどれ程あるかといふと、其の戸口に充滿して、雪を積んだよりも白くきらきらして、眼は鏡の如く、角は枯木のやうで、三尺あまりの口を開き、眞赤な舌を吐いて、ただ一呑に飲まうとする勢であつた。和尚は、

「あッ」

と叫んで、手に持つてゐた小瓶も其所に打ち捨てて、足も立たず、こけつ轉びつ這ふばふの體で逃げて来て、人人に向ひ、

「ああ恐ろしい祟りの強い神であるのを、どうして愚僧等の力に及びませう、此の手足がなかつたなら、生命をなくしたことぢやらう」

こいひひ氣絶してしまつた。人人が扶け起したけれど、まるで面も肌も黒赤く染めたやうになつて、手に觸れるとその熱いことは焚火にあたるにも等しい。毒氣に當つたものと見えて、其の後はただ兩眼を見張つて、物云ひたげであつても聲さへ出ない。水を吹きかけてやつたりして介抱したが、遂に死んでしまつた。

これを見た人人は、いよいよ魂も身に添はぬ思ひをして泣き崩れるのであつた。豊雄は少しく心を落ちつけて、

「かやうに驗者の法師さへ祈り得ぬ恐ろしき者が、執念深く私につき纏ふのでは、天地の間にをる限りは、何處まででも探し出されるであらう、自分一人の命の爲に、人人を苦しめる

のは不人情で御座います。今はもう他人の力は借りますまい。決心しました御安心下さい」といつて、閨房に行くのを、庄司の家の人人は、

「これは氣でも狂ひなすつたか」

といつてみたが、豊雄は聞こえぬ顔に其所にいつた。靜かに戸を開けると、何の騒がしい事もなくて、二人が向ひあつてゐた。富子は豊雄に向つて、

「貴方は何の恨みがあつて妾を捕へようと、人と相談したのですか、此の後とても妾に仇を以てお返しなさるなら、貴方の御身ばかりではない、此の郷の人人も總べて苦しい目に逢はせませう、ほんとに妾の貞操を嬉しいと思召して、徒々しいお心をお持ちなさいませう」

と、如何にも惚れ惚れしくいふのが、卻つてうたてく思はれた。豊雄は、

「世の諺にも聞いたことがある、人には必ずしも虎を害する心はないが、虎は卻つて人を傷ふ意があると、お前は人間でない心から私につき纏うて、幾度もつらい目に逢はした事さへあるに、かりそめにいふ言葉にもそんな恐ろしい人おどかしを云ふのは、まことに卑劣なこ

とぢや。併し吾を慕ふ心は世人と變りがないのに免んじてお前と一緒にならう。それで此所に居つては人人の難義になるから、富子の生命も助けてやつて、そして我を何處になりと連れて行け」

といふと、如何にも嬉しさうに點頭いた。豊雄は閨房から出て来て、庄司に向ひ、

「こんな淺ましいものが附き添つてをるのに、私が此所に居つて皆様に難義かけるのは眞に心苦しう御座います、只今お暇を下さい、さすれば娘子の命も無事で御座いませう」

といふのを、庄司は更に聞き入れないで、

「拙者は弓矢の家に生れて、その本末も承知してをる武士の數でありながら、いひ甲斐のない事しては、大宅家の方との思はくも恥かしう御座る。猶ほよく施すべき手段も考へて見ませう。おもへば小松原の道成寺に、法海和尚と申して尊い祈の師が居られる。今では年寄られて庵室の外へも出られぬと聞いたが、拙者の爲とあれば何としても捨てては置きますまい」といつて、馬上で急ぎ出立した。道が遠いので、夜半頃に寺に著いた。老和尚は眠藏をるざり

出て、此の話聞いて、

「それはお困りで御座いませう。愚僧は今は老い朽ちて験もありさうにも思はれないが、お前様の家の災難を餘所にも見て居られぬ。まづ先にお歸りなされ、愚僧も追ッつけ参りませう」といつて、

永年の間護摩の煙に染みた袈裟を取り出して、庄司に與へて、

「その畜生をうまく賺し寄せて、此の袈裟を頭に被せて、力一杯押し伏せなされ。手弱かつたなら恐らく逃げ去りませうぞ、よく心を懲らしてうまく計らひなされ」

と懇切に教へてくれたので、庄司は喜んで馬を飛ばして歸つて来て、豊雄を竊かに呼んで、法海和尚の言ひつけを話して

「此の事うまくやつて下さい」

といつて、袈裟を渡した。豊雄はそれを懷に隠して閨房に行き、

「庄司が今私に暇を呉れました。さあ出立しませう」

といふと、如何にも嬉しさうであるのを、懷から袈裟を取り出し、素早く打ち被せ、力一ぱい

押し伏せると、

「あア苦しや。貴方は何故そのやうに邪見でゐられる、一寸ここ放して」

といつても、猶ほ力まかせに押し伏せた。さうしてゐるうちに法海和尚の輿がやがて入つて來た。庄司の人人に扶けられて、其所に來られて、口の中で咒文のやうな事を唱へながら、豊雄を退かせて、彼の袈裟を取り除けて見られると、富子は正氣なく伏してをる上に、三尺餘りの白蛇がとぐる巻いて身動きもせずになる。老和尚はこれを捉へられて、弟子が捧げ持つてゐる鐵鉢に入れられた。猶も何か唱へて念じられると、屏風の後から一尺ばかりの小蛇が這ひ出て來た。それも捉へて鉢に入れられ、さきの袈裟を以てよく封じて、そのまま輿に乗られると、庄司の家の人人は掌を合し、有難涙を流して拜み奉つた。

老和尚は寺に歸られて、御堂の前を深く掘せられ、蛇を鉢のままに埋めさせ、永劫二度と世に出ることを戒しめられた。今も猶ほ道成寺の前に蛇が塚といふのがあるといふ事である。

庄司の娘富子は、遂に病に罹つて死に失せたが、豊雄は恙もなく生き永らへたといふことを

語り傳へられた。

註

(一)三輪が崎 東牟婁郡の村名。新宮から南方一里を隔てて、鯨突の漁場として有名である。昔の佐野の庄の一部落で、萬葉集に「くるしくも降りくる雨か神之崎狭野のわたりにもあらなくに」又「三輪の崎荒磯も見えず波たちぬいつくへ行かんよき道はなし」とあるのは此處である。

(二)飛鳥神社の神寶庫 原本に飛鳥の神秀倉とある。飛鳥神社は新宮の攝社で、今の字上熊野にある。其所の神寶庫には神寶類が十四種あつて、いづれも美術工藝品として今は國寶になつてをる。

(三)圓座 原本ワラウダと振假名がある。前篇淺茅が宿に解釋した。

(四)遠山摺。遠山の景色を染め出した織物。後撰集元良のみこの歌に「逢ふことは遠山ずりのかり衣きてはかひなく音をのみぞ泣く」とある。

(五)三つの御山。原本三つ山とある。本宮・那智・新宮を熊野の三山といふ。

(六)峯の温泉。湯の峯温泉を云つたのであらう。新宮にも本宮にも其の附近に峯の湯といふのが在るのを聞かぬ。湯の峯温泉ならば、本宮の西南一里近くに在る。今四村といつて居る。古くから知れた温泉地で文武天皇が行幸なされた事があり、其所の東光寺には鳥羽天皇の勅願として二重の寶塔が建てられた程であるから、此の蛇性の淫のやうな古い物語には相應した地である。草根集に正徹「熊野路や雪の中にも沸かへる湯の峰かすむ冬の山かぜ」とある。

(七)くるしくも降りくる雨云云。萬葉集卷三、長忌寸奥麿歌「苦毛、零來雨可、神之崎、狹野乃渡爾、家裳不有國」神之崎をミワガサキと訓んだものもある。萬葉集古義で、其の善惡を論じてをるが爰ては此の雨月物語の原本通りにミワガサキと訓んで然るべきで、兎に角三輪が崎も神之崎も同地を指した地名である。佐野のわたりは、萬葉集には狹野の渡とある。ヌもノも音便でどうでもよいが、今は佐野と書いてサノと訓んでをり三輪崎村の大字になつて遺つてゐる地名である。三輪が崎は前に註した。

(八)几帳。中古、室内に立てた屏障具。臺の上に二本の柱を立て、横木をつけ、それに帷帳を懸けたもの。多くは女の居間に置く。

(九)厨子。櫃を立てたやうな形のもので、二層又は三層の棚があり、其の一部に俗に観音びらきといふ兩開の扉を附け、調度・書畫卷などを容れ又は載する具。

(一〇)壁代。中古、壁の代りに懸けられたる帷帳。綾や絹で作り、その制作大概几帳の帷にのつとれるもの。

(一一)孔子云云。源氏物語に「戀の山には孔子の仆れ」といふ語がある。

(一二)狛錦。三韓の中の高麗から産した錦。多く衣服の紐を作る故、紐にかかる。萬葉集十一卷「狛錦紐ときあけてゆふべだに知らざるいのち戀ひつつあらむ」

(一三)吳の綾。支那の東南方吳の國から産する綾織。

(一四)倭文。シヅリは倭文織の略。古の織物で、穀・麻等の緯を青・赤などに染めて亂れ模様織り出せるもの。

(一五)縑。細絲を以て目を緻密に織つた薄い絹布。固織の義。もと大和國の貢物といふ傳説がある。

(一六)鞞。矢を盛る函。箆の類。

(一七)石榴市 いま磯城郡三輪町の字、金屋に當る。海柘榴市と書く。ツバイチは略稱らしい。また略して棒市と書いたものもある。初瀬からは西の方に一里あまり隔ててをって、奈良・郡山の方から長谷寺参詣の途中で、古は世に聞えた市街である。萬葉第十二「紫は灰指すものぞ海石榴市の八十の衢に逢ひし兒や誰」とある。

(一八)泊瀬 今初瀬村といふ。雄略天皇の皇居、泊瀬朝倉宮趾の在る所で、昔は泊瀬と書いた。此所に長谷寺の大伽藍があつて本尊觀音大土の靈場である。

(一九)二本杉 二本は相生に縁がある。古く初瀬川の岸にある杉で、古今集旋頭歌に「はつせ川ふる川のべに ふたもとある杉 としを経て またもあひみむ 二もとある杉」。また新後撰、俊成の歌に「初瀬川相見むとこそたのめしか思ふもつらしふたもとの杉」。いづれも再び逢ひ見ることに縁ある歌である。

(二〇)大慈大悲 觀世音菩薩をいふ。即ち長谷寺の觀音を指したのである。

(二一)葛城や高間 葛城は金剛山下の高宮郷。高間は高天とも書いて、葛城村大字高間。併し、爰では雲に縁があるから山をいつたので、葛城山は大和國西界の峻嶺で其の山脈北に赴く者は戒那山二上山と爲り、西に趨る者は河内紀伊の國界を爲し由良海門に至る、其の高峰は南葛

城郡の西に於いて高天山と爲る。一名金剛山。萬葉集「春柳葛城山にたつ雲のたちてもゐても妹しおもふに」古今集「よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山のみねの白雲。」二首共に蛇性の淫の爰のところに實に相應の歌である。

(二二)雲が湧いて雨收まる 宋玉の高唐賦に出た楚の襄王と巫山の神女の交會の朝雲暮雨の意で男女の淫事。前篇淺茅が宿に詳しく解した。

(二三)三船山 榮摘の東南に在る山。遠くから望むと船の形に見える。萬葉集に「瀧への三船の山に居る雲の常にあらむと我おもはなくに」の歌がある。

(二四)榮摘川 吉野川の一部。宮瀧から國栖あたりまでをいふか。太平記、吉野城軍の事の條に、「二階堂出羽の入道道蘊、六萬餘騎の勢にて、大塔宮の籠らせ給へる吉野城へ押寄する。榮摘川の川淀より、城の方を見上げたれば」云云で世に知られてゐる。萬葉集に「吉野なるなつみの河の川淀にしきぞ鳴くなるやま影にして」とある。

(二五)よき人のよしと云云 萬葉集、天武天皇の御製に「よき人のよしとよく見てよしと云ひし芳野よく見よよき人よく見つ」の三十三字の歌がある。

(二六)遠津神 人倫に遠く、神にましますもの。萬葉集、舒明天皇の御製に「霞立つ、長き春日の

暮れにける、分もしらず、むらどりの、心を痛み、ぬえこ鳥、うら敷居れば、玉襟、懸けのよろしく、遠つ神」云云とある。

(二七)芝の里。不明だが、作者秋成は根なしごとの小説を作るにも、在りもしない地名を用ふるやうな人ではない。此の芝といふのは紀州の東牟婁郡の太田川の川口に下里しもさとといふ所があるが、其の南にあたる對岸の地を指したのではあるまいか、其所なれば芝といふ地名に強ち縁故がないでもない。三輪が崎から南方四五里の所である。併し後で道成寺から法海和尚を招請する段になるが、日高川下流の吉田の道成寺なれば芝の庄司の家からはあまりに隔たつてゐる。それで三輪が崎と道成寺の中間にある所だと相應する。寶曆五年刊の魯竹文輯中、熊野詣記に「芝汐見を過ぎて漸く再び海原を見ぬ」といふ文がある。芝と汐見といふ二ヶ所の地名であらう。

(二八批評)「二三行の間に原文に衍文があるやうに思はれる。原本上略「豊雄ここに迎へられて見るに、此の富子がかたちよく、萬よろこぶ心に足ひぬるに、かの蛇へびが懸想けんさうせしことも、おろおろおもひ出づるなるべし」下略とあるが、豊雄が都に馴れた富子を見て満足したは聞こえてゐるが、かの蛇が懸想せしこともおもひ出でられるとは意をなさぬ。蛇が懸想したのは男

の豊雄にであるのは前からわかつてをる。しかるに此の文では富子に懸想したのも略推察ぼつさつされるといふ意で、全くの衍文である。それで圈點の個處は此の譯文では除いた。

(二九)眠藏。寺院の寢室。

(三〇)小松原の道成寺。紀州日高川の川口の西岸に御坊町と云ふ大きな市街がある。その町はづれから北方十町餘りの所に小松原と云ふ小さい町がある、其所から北東十二三町にして道成寺がある。吉田村の道成寺と覚えてゐるが、今は藤田村の道成寺といふべきであらう。道成寺は古刹で、寺傳には文武天皇の勅願所で、紀大臣道成奉行して建立したとある。本尊は義淵僧正の作で千手千眼大聖菩薩。其所の鐘は有名なものだが、正平中鑄造の鐘は天正の兵亂に、京軍の收むる所と爲つて、今は京都の妙滿寺にあるとの事である。猶ほ道成寺は大日本地名辭書によると「矢田村大字土生に在り、御坊の北四十町、天台宗を奉じ、天晉山千手院と號す、阜上に堂舎排列蕩々たり。本堂(十間半九間半)後堂・釋迦堂・護摩堂・念佛堂・十王堂・三重塔樓門の諸宇なり、僧舎は古へ十六坊と云ふ」とあるから、迦藍の大きさが推しはられる。

(三一)蛇塚。道成寺の門前左二三丁の所にある。

雨月物語 卷之五

青頭巾 (第八)

〔梗概〕 愛慾の極、生きながら鬼となつたのを、高德の僧が濟度するといふ物語で、或山寺の僧が愛してをった稚児が死んだのを埋葬するのに忍びず、死屍を猶ほ愛して遂にそれを食らひ盡し、後には鬼となつて、生きた人間も取り食うといふ筋。古來かういふ事に似通つた事を物色すると、

愛慾といふ方から、清玄・鳴神上人などを引き合ひに出して論じてをる人もあるが、それ等は美人に執著したといふまでであり、また人肉を食つたといふ點から隋の麻叔謀などを引き合ひに出してをるのも餘りに縁が遠い。なぜとなれば麻叔謀の人肉は死屍でなくて、併も愛慾からでなくただ單に小兒の肉を美味として食つたのである。人肉を喰つたといふ事は古來饑饉の爲や籠城の爲に食つた事實は支那には澤山あつて、唐の安祿山の亂に、張巡が尹子奇に圍まれて、食盡き、愛妾を殺して食はしめた有名な話もあり、日本でも饑饉の時人肉を食つた例がある。

後深草天皇の正嘉三年には京都で疫癘が流行し、飢餓の者も多かつたが、飢ゑの餘りか鬼となつたか不明だが、小尼が死人を喰つて歩いた記事が、五代帝王物語にも百練抄にも出てゐる。五代帝王物語「正嘉三年の春頃より世の中に疫癘夥しくはやりて下臈どもが病まぬ家なし、川原などは道もなき程死體みちて淺ましき事にて侍りき。中略三月二十六日改元あり正元と改まりしが正月上旬の頃死人を喰ふ小尼出來てよろづの所にて喰ふと云ふ程に十四五計りなる小尼内野より朱雀の大路を南ざまへ行くとてまさに死人の上に乗居てむしり喰ふ目もあてられずぞ有りける。わらべども後先に立ちて打ちさいなめば鳥羽の方へまかりける後はいかかなりぬらん」云云百練抄「後深草院正元元年五月五日戊申近日十三四許小尼於一條壬生破食死人未曾有事歟。」

次に愛慾の爲に死見を食ひ盡くす事は馬琴の著、四天王剽盜異録にもあつたやうに記憶するが、それは此の雨月より後のものだから例に引くまでもないが、寛延二年刊本の新著聞集に、僧屍肉を噉ふと題して奇怪の記事がある。これは秋成が見れば見てをるべき書であり、それに僧だけに似通つてゐるから載せて見る。増上寺塔中の徳水院へ、ある時、亡者をつれ來り、沐浴剃髪までもたのみしに、同宿の僧、髪を剃り、何とかあやまりて、頭一寸ばかり切り離して、甚だ赤面し、此の事、施主に見とがめられんも口惜とおもひ、自ら口の内へ入れ、隠さんとしけるに、その味、得もいへずして終にくらひけり。それより、かの風味しばらくも忘れがたくて、夜に入り、餘りに堪へかね、裏なる墓所に忍び出て、土をほりかへし、葬りし屍の肉を切りとり噉し事、夜々に及びければ、住持の僧、墓所の荒れし事を訝り、一夜、深更までうかがひ見しに、かねて案ぜし狐や犬の所爲にはあらで、同宿の僧なれば、興さめ臆ひえて、ひそかに彼僧を招き、しかしかの事尋ねられしに、僧、泪を流し、されば我いかなる宿殃にや、いかばかり心を押へしかど、餘りに堪へかね、かくはいたせしと懺悔し、此のうへは、人中の交りも止めなんと、わりなく暇を乞うて出てさりしとなり。元祿中の事なり」とある。次に明和七年の序文のある煙霞綺談に、元文三年の實事として、死人を喰つた女が鬼となつて山深く逃げて行方知れなくなつた記事がある。雨月物語は明和五年の序文があつて煙霞綺談よりは二

年以前に成つたものだが、元文三年の事實とすれば、物の本の上からばかりでなく、世間の噂、讀賣等から見聞を得ないとも限らぬ。煙霞綺談は西村白鳥の著述で、安永二年刊の新井白蛾の儘と同本であるが、明和七年だけに四五年先だつてゐるから、夫を主として爰に載せて見る。「天文三年西三河にてある女鬼となり、葬所へ行く死人を喰ひたる事あり。亂心ともいへど、其まま捨て置きがたく、村のもの大勢あつまり打殺さんとせしが、山へ逃げ入り行きがた知らずとなり」これは女でもあり、前の増上寺の僧から見ると、なほ一層隔たりがある。此の青頭巾の主眼として見るべき個處は私には屍肉を食つた恐ろしい鬼を描寫した點よりは、それほどの執著心を、一偈或は一考案によつて大悟したといふ點に重きをおいて見るのが面白いとおもふ。其の方面からいふと、怪談との袋の「禪座を以て怪を伏す奥州の禪僧」や「魔佛を以て一如とす悟道の聖人」などが大きに似通つてゐて、秋成も前の佛法僧と同じく、怪談との袋に負ふところがあつたのであらう。また連歌の附句を案じ煩つて死んで後も幽霊となつて出て、それを見る者恐れをなして、寺ならば廢寺となるといふやうな話が小説にもあり、前に引いた煙霞綺談にもある。即ち、關東の或寺に夜々幽霊出て「墨染をあらへば波もころも著て」といふ句を唱へて、しきりに涕泣す。此の故に住職する僧なき所に、一僧あり行きて見るに、果して怪しきもの出て、彼句を吟ず。其あとへ「水は浮世をいとふものは」と付けたれば、幽

靈はつというて消えうせたり、其後ふたたび出でずとなり、とある。兎に角此の青頭巾では、永嘉の眞覺大師が證道歌の江月照松風吹云云を骨ばかりの者がぶつぶつ唱へてをるところが眼目であらう。

むかし、快庵禪師といふ徳の高い僧があつた。幼少から教外別傳の本旨を學び明らめて、常に身を雲や水の如く定まる處なく、諸國を行脚なされた。或時美濃の國の名刹龍泰寺に一夏の禪定を終り、この秋は奥州出羽の方に假住しようとして旅立たれた。行き行いて下野の國に入られたが富田といふ里に著いた時は、日が全く西の山に入り果てたので、大きな富貴らしい家に立ち寄つて、

「徧參の僧、一夜の宿をお頼み申す」

といつて音なつた。すると一日の仕事を終へて野良から歸つて來た男どもが、夕暮に快庵禪師の門口に立つてゐるのを見て、非常に怕れた様子で、

「山の鬼が來た、皆の衆出ろ」

と呼びわめいた。家の中でも俄に騒ぎ立つて、女や子供は泣き叫びながら、倒つ轉びつ隅々に逃げ竄れるのであつた。家の主人は山柵を持つて走り出て外の方を見ると、軒下に年の頃五十歳位の老僧が、頭に紺染の頭巾を被り、身體に破れた墨染の法衣を著て、何か裏物を背負つて立つてゐるが、持てる杖を以てさし招いて、

「檀越、何事のあつてこの様にきびしく警戒せられるのぢや。徧參の僧が、今夜一夜の宿を借り申さんと、ここに人を待つてをり申したが、このやうに怪しめられようとは思ひもよらぬことぢや、御覽の通りの瘦法師が、まさか強盜などし得べきものではない。怪しみなさるな」といふので、主人は柵を捨てて、手を拍つて笑ひながら、

「男共の迂濶な眼から貴僧様を驚かし參らせたので御座り申す。一夜の宿を御供養して、こ

の罪を償ひ申さう」

と、禮厚く、奥の方に請じ入れて、快く食事を饗應しながら主人が語るのには、

「先刻下男どもが、貴僧様を見て、鬼が來たと申して恐れましたのは、理由のあることで御座ります。此所に珍らしい話がありまして、世に馬鹿氣た妖怪談で御座いますが、世間にも御傳へ下され。

此の里の上の山に、一棟の精舎が御座ります、それは故小山氏の菩提所で、代々名僧が住職されたので御座ります。今の阿闍梨は何某殿の御養子で、御修行深く篤學の評判が高く、此の國界隈では、御布施をたんと運んで皆歸依して居つたので御座ります。私宅へも始終おいで下さりまして、誠に隔てなくお交際致してをりましたが、去年の春で御座りました、越後か越中か彼方の國へ灌頂會が御座いまして、其の御戒師として迎へられて、百日餘りも御逗留で御座りましたが、其の土地から十二三歳ばかりの御稚兒を一人連れて御歸りになられ、起臥の扶に使はれました。其の稚兒の容顏の秀麗いのを深く御寵愛なされて、年來の御修行

も、いつとなく怠り勝ちになられたやうに見えました。ところが今年の四月頃、其の稚兒が一寸した病に罹つて牀につきましたが、日増しに重く悩みまするのを、阿闍梨様が不憫がられて國府の名醫までもお迎へになられて看護なされたが、其の驗もなく、稚兒は遂に亡くなつたので御座ります。阿闍梨様は、懷の壁を奪はれ、挿頭の花を嵐に吹き取られたやうな思ひで、泣くにも涙が盡き、叫ぶに聲が涸れて、あまりに悲歎にけれ、死骸は火にも焼かず、土にも埋めずに、其のまま牀に置いて顔に顔を押しあて、手を手を取り組んで、日を過ぎされましたが、終には氣が狂つて、稚兒の生きてをつた時のやうに戯れながら、其の肉の腐れるのも惜まれて、肉を喰ひ骨を嘗め、とうとう屍を皆喫ひ盡されましたので御座ります。寺中の人人はそれを見て「院主こそ鬼になられた」というて、周章で逃げ去つた後は、阿闍梨は毎夜里に下つて來ては人を脅かしたり、新墓を發いて生々しい死骸を食ふありさまは、昔物語で聞いてをりました實の鬼を、現在見たといふもので御座ります。それが恐ろしく退治する事も出來ず、日が暮れるとてんでに戸を堅く閉めて夜歩きもせずして、此頃は國中へも聞え

まして、人の往來さへもなくなりました。さういふ理由で、貴僧様を見あやまり申したので御座ります」

と話した。快庵禪師は此の物語を聞かれて、

「世の中には不思議な事もあるものぢや、凡そ人間と生れて、佛菩薩の教の廣大なことも知らず、愚癡・慳貪の心のままで一生を終る者は、その愛慾邪念の業障に牽かれて、或は故の形をあらはして悲を報い、或は鬼や蟒となつたりして祟をなす例は、昔から今日に至るまで數へきれぬほどで御座る。また活きながら鬼になる人も御座る。むかし楚王の宮人は蛇となり、^(一)王舎が母は夜叉となり、吳生が妻は蛾となつたといふ話ぢや。又むかし、或る行脚僧が卑賤の家に宿を求めたところが、その夜は雨風が強く燈火さへもない佗しさに、寝つかれずにをると、夜更に羊の鳴く聲が聞えたが、暫らくすると旅僧の寢息をうかがつて、しきりに嗅ぎまはるものがあつた。旅僧が怪しいと見てとつて、枕もとに置いた禪杖をもつて、力強く撃つたところが、大聲に叫んで其所に倒れた。此の物音に主の姫が燈火をもつて來たので見ると、

若い女が打ち倒れてをるのであつた。すると姫が泣く泣く其の若い女の生命乞をするので、旅僧が其の儘打ち捨てて其の家を出て行つたが、其の後また其所の里を通りかかつた時、田の中に人が多勢集まつて何か見物してゐるので、其の僧も立ちよつて「何であるか」と尋ねると、里人のいふには「鬼になつた女を捉へて今土中に埋めるのぢや」と語つたと申すことぢやが、併しそれ等は皆女子の事で、男が鬼になつたといふ例は聞いたことは御座らぬ。凡て女の性質は慳貪であるからして、さういふ淺ましい鬼にも成るので御座る。又男子でも、隋の煬帝の家來の麻叔謀といふ者が、好んで小兒の肉を喰ひ、竊に民家の小兒を偷んで、それを蒸して食つたといふ事も御座るが、それは淺ましい人道も知らない夷狄心であつて、今御主人の御話の院主とは全く別な事柄で、其の僧こそ過去の因縁のしからしめることで、も御座らう。そもそも其の阿闍梨が、平生の行徳が正しくて、佛に仕ふる事に眞心を盡してをられたのであるから、その稚兒さへも養はなかつたならば、天晴立派な法の師であつたらうに、一度愛慾の路に迷つて、無明の業火が熾んになつて、恐ろしい鬼となつたのも、いはば

剛毅な真正直な心からであつて、心を放せば妖魔となり、收むるときんば佛菩薩ともなるといふのは、其の法師が例を残して御座る。愚僧がもしも其の鬼を教化して、本源の心に歸らしめたならば、今宵の饗應の御恩返しにもなるで御座らう」

といつて、ここで尊い志を發された。

主人は此の話を聞いて、疊に頭を摺りつけて、

「貴僧様がさうして此の禍をお拂ひ下されたならば、此の國の者は淨土に生れかはつたやうなもので御座りませう」

と涙を流して喜んだ。山里の宿であるから、貝や鐘の音もなく、二十日あまりの弦月が出て、古戸の間から洩れるのを見ても、夜の更けたのを知つて、

「さあ御休み下さい」

といつて、主人も寢室に入つた。

人の住まない山院は、樓門には荊棘生ひかかり、經藏も徒らに苔蒸して、蜘蛛は網を結んで

諸佛を繋ぎ、燕子の糞は護摩壇を埋め、方丈も庫裏も、凡ての廊坊は物凄く荒れ果ててゐる。

日影はやや西南に傾く頃、快庵禪師は其の寺に入つて、錫杖を鳴しながら、

「徧參の僧、今夜一夜ばかりの宿を借り申さう」

といつて、幾度も音なつたが、一向返事がなかつた。やがて眠藏から瘦せがれた坊主がやうやう歩き出して來て、嘎れた聲で、

「御僧は何處へ御通りにならうとして、此所に來られたのぢや、此の寺は或仔細あつて、御覽の通り荒れ果てて、人も住まぬ野らとなつたからには、一粒の齋もなければ、一夜の宿も叶ひ申さぬ。早く里に出られい」

といふので、禪師は、

「拙僧は美濃の國を出て、奥州へ下る旅で御座るが、此の麓の里を通ると、山の形、水の流れのさまの面白く、思はずも此所まで詣つた譯で御座る。もはや日も傾き、里に下らうにも道は遠し、足も疲れはて申した、まげて一夜の宿をお貸し下さい」

といふと、主の僧が、

「かう野良となつた所では、善くない事があり勝ちのものぢや、強ひて去けといふのぢやないが、強ひて止めもしかねる。御僧の心まかせになされい」

といつて、後では二度と口を利かない。禪師も無言のまま、主僧の側に座を占めた。

見る見る太陽は山の端に入り果てて、宵闇の夜の常よりも暗いのに、併も燈火を點さないから、面前さへわからずに、ただ谿水の流れの音が潺々と近く聞えるのみで、主の僧も今は眠藏に入つて音がない。

夜更けて月の夜となつた。影玲瓏として隅々を照らした。もはや眞夜中ともいふべき頃、主の僧が眠藏から出て来て、慌だしく物を探す様子だが、探し得ないで大聲に叫び、

「糞坊主、何處に隠れた。此處に居つたのぢやが」

といつて、禪師が前を幾度も幾度も驅け廻つたが、一向に禪師を見つけ得ないで、堂の方に走り行くかと思れば、また庭に出て躍り狂ひ、遂に疲れ臥して起きあがつて來なかつた。

夜が明けて朝日高く上つた時、禪師がもとの所に居るのを見て、酒の醒めたがやうにただ呆れた様をして物さへ言はず、柱に靠れ溜息をついてゐるので、禪師は主の僧に近く寄つて、

「院主何を歎息されるのぢや、若し空腹で居られるなら、愚僧が肉をもつて腹を充たしなされ」

といふと、主の僧が、

「師は終夜そこに居られなかつたか」

といふので、禪師は、

「此所に座して睡らなんだ」

といふと、主の僧は又

「我淺ましくも人間の肉を好み食つたなれども、まだ佛身の肉の味を味はふことが出來かねる。師は眞に佛ぢや。鬼畜の暗い眼を以ては、活佛の來迎を見ようとしても見られないのはもつともな事ぢや。あな尊とや」

と、頭を垂れて黙つてしまつた。

禪師はこれを見て、

「里人の語るを聞けば、汝、一旦の愛慾に神心が亂れて、忽ち鬼畜に墮ちたのは、淺ましきも哀れとも、譬へやうもない惡因果ぢや。汝が夜夜里に出て人を害するので、此の下の里人はもとより、近國の者までも安心が出来ぬとのことぢや。愚僧がこれを聞いて見捨てるに忍びず、わざわざ來つて汝を教化し、本心に還らせようと思ふのぢやが、汝は愚僧の教を聞くか、どうぢや」

といふと、主の僧は、

「師はまことに佛で御座る。斯く淺ましき惡業も直様忘れられる道理を教へたまはれ」

といふので、禪師は、

「汝、教へを乞ふとならば此所へ來れ」

といつて、簀の子の前の平らな石の上に坐らせて、自分の被つてゐた紺染の頭巾を脱いで、主

の僧が頭に被らせ、證道歌の二句を授けなされた。

江月照松風吹

永夜清宵何所爲

「汝、此所を去らずに、徐に此の句の意を求めよ。意が解せたときは、おのづから本來の佛心に會ふは」

と教へて、山を下られた。此の後、里人は、鬼の災難を逃れたといふものの、猶鬼坊主の生死を知らないの、或は疑ひ或は恐れて、里の人人は山に登るのを戒めてゐた。

一年の月日は早くも經ちて、次の年の冬十月の初旬であつた。快庵禪師は、奥州からの歸り路に、また此の里を通られたが、前の年一宿した家に立ち寄つて、其の後の鬼の様子を訊ねられた。主人は喜び迎へて、

「貴僧様の御法徳のお蔭で、彼の鬼が二度と山を下りて來ないので、人人は皆淨土に生れ出した思ひを致して居ります。併し山に行く事は恐ろしがつて、一人として上る者はまだ御座りませぬ。それで様子は一向分りませぬが、なんで今まで生きてをられませう。今夜のお泊り

といふので、禪師は、

に、彼の鬼の菩提を弔うてやつて下され。吾も共も隨縁し奉りませう」

「彼善果に依つて、もはや遷化したならば、佛道の上では先達の師ともいふべきであり、若しまた生きてゐたならば、愚僧が爲には一人の徒弟ぢや。いづれにしても其の消息を見ないでは居られぬ」

といつて、明の日またも山に登られた。

いかさま、人の往來絶えたと見えて、去年踏み分けた道とも思はれぬまで草木に覆はれ、寺に入つて見れば、萩・尾花のたけは、人よりも高く生ひ茂り、露は時雨のやうに滋く降りかかり、寺院の境内の小徑も分らぬまでに、堂閣の戸障子が右左に倒れ、方丈庫裏に縁らされた廊も、杯ちたところに雨を含んで苔が蒸してゐる。

さて、彼の鬼僧を坐らした簀子の邊を尋ねると、影法師のやうな人の、僧とも俗とも見分けがつかぬまでに、髭が延び髪は亂れたままの者が、葎結ばれ、尾花生ひかぶさつてゐる中に、

蚊の鳴くばかりの細い聲で、何を云ふのか分らぬやうだが、まれまれに唱へるのを聞くと、

江月照松風吹 永夜清宵何所爲

といふのであつた。禪師はこれを見られて、持てる禪杖を取り直し、

「作麼生 何の所爲ぞ」

と一喝して、彼の頭を撃たれると、氷の朝日に逢うたがやうに忽ち消え失せて、彼の青頭巾と骨のみが、草葉の上に遺り留まつたのである。まことに久しい間の一念が此の時始めて消散したのであらう。これ併しながら尊い理由のあるからである。されば、禪師の功德が雲の上、海の外までも聞えて、初祖達磨が寂しても、其法は生々しく生きてゐるとまで稱讃されたといふことである。

かくて、里人が集まつて、廢頽した寺内を清め、修繕を施し、禪師を推し尊んで、此の寺に住まはせ奉つてから、本の密宗を改めて、曹洞の靈場を開かれたまうた。今なほ御寺は尊く榮えてゐるといふことである。

註

(一)快庵禪師 名は妙慶。薩摩の人。曹洞宗の僧。華叟正夢に印可を受け、越後の顯聖寺に住す。

下野國都賀郡の大中寺中興の祖。寺に住すること五年、明應二年に寂した。年、七十二。

(二)教外別傳 禪宗の教法。言句經典等を用ひず、直ちに心を以て心に傳へ、悟りを開かしむる事。

以心傳心・直指人心などの聯語。

(三)龍泰寺 美濃國武儀郡下有知にある曹洞宗の名刹。東美濃洞派の總録所で、應永年中僧惠徹の

開基。

(四)富田 下野國の富田は下都賀郡で、今は富山村の大字になつてをる。栃木町から西南一里半ばか

りの所で、北方半里ばかり晃石山の中腹に此の物語に關係ある大中寺といふ名刹がある。

(五)徧參の僧 禪僧が徧く天下の智識に參學するが爲に行脚するをいふ。

(六)山枌 今の天秤棒と同器。山といつたのは山働きに用ひるのをいつたのである。

(七)紺染 ユンゾメといつてよからうが、此の物語の題號は青頭巾あせごんとあるからには、アラゾメと讀むより外なからう。紺染はハナダイロともアサギイロとも解してよからう。

(八)檀越 施主をいふ。即ち布施をする人。越は吳音でヲツと讀む。訛つてダンノツともいふが、ダンエツとは決して言はぬ。

(九)小山氏 快庵禪師の時に下野國小山城主判官重長が居つた。其の祖父の名は持政といつた。

(一〇)灌頂會 頭に水を灌ぐ密教の儀式。印度では立太子・即位式の場合にも頭に水を灌ぐ式があるが、密教では重要な儀軌としてゐる、其の種類も甚だ多い。

(一一)楚王の宮人云云 述異記に「楚の莊王の時宮人一旦化して野蛾と爲りて飛び去る」とあるが蛇となることは未だ考へない。

(一二)王舍が母は夜叉となり吳生が妻は蛾となる 太平廣記卷三百五十六に吳生の妻劉氏が夜叉となつて、鹿の肉を生ながら食ふ記事があるが、王舍の母は誤りであらう。人の蛾となることは、前の述異記の説と文海披沙物化の條に「漢の宮女化して飛蛾と爲るといふ記事がある。

- (一三) 羊に化けた女 此の怪談は、説海を引いて寄園寄所寄の滅燭寄篇にも載せてある。
- (一四) 麻叔謀 五雜俎に「隋の麻叔謀朱粲、嘗て小兒を蒸して以て膳と爲す、五代の袁從簡、好んで人肉を食ふ、至る所多くは潜に民間の小兒を捕へて以て食と爲す」とある。
- (一五) 眠藏 寺院の寢室。ミンザウとは讀まぬ。メンザウと讀む。
- (一六) 簀子 縁側を竹で編んで板敷の代りにしたのをいふ。
- (一七) 證道歌 支那の永嘉の眞覺大師が證道歌を指す。江月照松風吹は此の證道歌中の語句である。證道歌を坐禪儀・十牛圖・信心銘の三部と共に一冊に綴つて一鹹味と題したものがあつた。

貧福論 (第九)

〔梗概〕 戦國の武士としての勇者が、經濟の上から儉約を主として金錢を數多溜め貯へて樂みとしたが、金の神がそれを喜んで一夜その土の枕元に現はれて經濟談をするといふ筋。金の神の談は、淺井了意の伽婢子の和銅錢が出處になつてゐるやうだが、此の武士は實在の人であつた。

兩月物語は明和五年に成立した本だが、それより三十年前元文二年に成立した湯淺元禎の常山紀談に伊達上杉陸奥國松川合戦の事附永井善左衛門岡野左内が事と題して、此の貧福論には岡野左内となり、又蒲生氏郷の家來となつて居るが、紛れもない常山紀談の岡野左内と同一人である。ただ常山紀談には、永井善左衛門と共に、岡野左内の武功を主として書かれて、經濟談は附言のやうにな

つてゐる。此の事は、神澤杜口の翁草には三十三卷と百五十八卷の二個所に載せてあるが、翁草の記事は常山紀談と比較して後に成つたものと見なければならぬから、今御伽婢子の和銅錢と、常山紀談の記事だけを参考に載せて見る。また續崎人傳の岡野左内の傳を云爲する人があるが、續崎人傳は寛政九年に成立して、雨月物語よりは三十年も後のものであるから、論ずる必要はない。また晉の魯褒の錢神論を云爲する者もあるが、これは唯、翼無くして飛び、足無くして走り、莊武仲の智も下莊子の勇も、冉求の藝も錢に如かずとかいつて金錢の徳を述べただけのものである。いま常山紀談の記事を抄出すると事長くなるが、岡野左内は唯の守錢奴でなく、武勇も人に勝れて居つた事を知るが爲に全文を載せて見る。

「慶長六年（關原合戦の翌年）四月、伊達政宗奥州景勝（上杉）の地を斬取らんと、百姓を聞者にして怠を伺はれたり。松川は阿武隈川の枝川にて、伊達領の境なれば、本條出羽守、甘粕備後、岩井備中・杉原常陸・栗生美濃・岡野左内、五千許にて守りけり。政宗は國見峠を踰え、信夫郡より瀨の上の川を涉り、五千の兵にて梁川の城を押へ、松川を指して押寄する。物聞共、斯くと告ぐれば、本條出羽、城を出て、川を渡してや戦ふ、川を前にして半途をや打たん、といふ處に、松木内匠、敵不意の利を謀りて押寄せ候に、味方川を渡りて待ちかけなば、政宗思ひしに違ひて

必ず引退くべきなり。川を涉らんこそ能かりなめ、といふに、栗生同心せず。此川中窪にて極めて渡す事容易からず。政宗涉らん處を半途を打つに利有らん。岡野、否々敵大軍なり。爰に待たんは敵を恐るるに似たり、勇士の志に非ず。疾く川を渡して待設せん、と云ふ。孫子に以テ少合衆是曰兆といふこと有り。小勢にて無謀の軍せんは、大敵の擒とならんは必定なり、といふ處に、甘粕備後、杉原も馳來り、先物見を出せ、とて、猪俣主膳・本庄段右衛門・井筒小隼人、乗り行きて馳歸る。猪俣は、政宗川を涉らじといふ。二人は、政宗川を渡さん事半時許もや有らん、といふ。子細を問ふに、猪俣、敵馬の沓を取らず、障泥を外さず、羽壺を常の如くに附けたり、といふ。井筒・本庄が曰く、我等見し所も同じく候。されども政宗未だ來らず。其間五六町許もや候らん。政宗川際に押寄せて某支度せんに、何の時刻を移すべき。且小荷駄を遠く引退けたれば、戦ひを持ちたる敵なり。政宗二萬の軍兵を帥めて寄來り、空しく引返すやうや候、といふ。さらば川端二町ばかり置いて陣を整へて敵を待たん、といふ所に、岡野は切支丹を信ずる人なるが、南蠻人の贈りける角榮螺といふ胃を著、眞先驅けて川を打涉す。栗生・甘粕・川を渡るべからず、と下知すれども、布施次郎左衛門・北川圖書・小田切新左衛門等二十騎ばかり、まつしぐらに川に乗入り打渡す。宇佐美民部鎗を横たへ、殘る兵をば押し止めてけり。斯れば政宗押來り、先陣片

倉小十郎透間も無く切つて懸る。岡野、四百許眞丸になりて鎗を打入れ、面も振らず喚き叫んで戦ひ、けれども、大軍に取圍まれ、左内僅に打ちなされ、切りぬけて引退く。中略。政宗勇み進んで追驅けられしに、岡野猩々緋の羽織著て鹿毛なる馬に乗り、支へ戦ひけるを、政宗馬を驅寄せ、二刀切る。岡野振顧りて、政宗の冑の眞向より鞍の前輪をかけて切附け、反す太刀に冑の鏝を半かけ、て、研り拂ふ。政宗刀を打折りてければ、岡野すかさず右の膝口に切附けたり。政宗の馬飛退きてければ、岡野、政宗の物具以外の外見苦しかりし故、大將とは思ひも寄らず。續いて追詰めざりしが、後に政宗なりと聞きて、今一太刀にて討取るべきに、とて大に悔みけるとなり。岡野は川へ乗入れたるに、政宗、又十騎許にて追驅け來り、穢し返せ、と呼はりければ、岡野振顧りて、眼の明きたる、剛の者は多勢の中へは返さぬ者ぞ、といひて岸に馬を乗上げたり。中略。其後政宗、岡野に逢ひたりし時、松川の軍の有様語り出して、汝を斬りつるは忘れじ物を、といはれしかば、岡野、大將の刀の跡と存候て、金糸にて縫合せ、家の寶とせんと存ずる由言ひて、羽織を政宗に見せければ、政宗悦ばる。其時岡野、冑の鏝を吹返し、かけてなぐり切にいたりき、と申しければ、政宗色を變じ、物語を止められしとかや。

以上は本文で左内の武功談だが、此の末に附言がある、それは此の貧福論の出處であるから、其の

全文を載せて見る。

「岡野は元蒲生家の士なりしが、上杉家に仕へけり、富有なる人にて、儉を好み奢を憎む。一月の間二三度も金銀を山の如く積みて、其中に臥して慰みとしけるを、聞く人誹り合へり。或時岡野いつもの如く金銀を並べて見居たりしに、近きあたりの士、争をし出し、方人の者共數多驅け寄りて騒ぎしに、岡野聞くや否や、正宗の刀を提げて走り行き、一日一夜其の家に有りて、事能く取扱ひて歸りけり。岡野が馬取の下部、大板金一枚持ちたりと聞き及び、呼び出して、汝が志こそ由々しけれ。人は貴賤に依らず、貧くしては義理の爲すべき事も心ばかりにて叶ひ難し。能く心掛けたり。と云ひて黄金百兩與へけり。景勝、會津に兵を起す時、永樂錢一萬貫文を獻じ、朋輩の親しみ深き人々には數多黄金を分ち送りけり。軍の仕度の人々は慌て奔走しければ、岡野は猿樂に舞踊れ、とて騒がず。人に語りて、日頃は武備に怠らず。猿樂ども世の豊なる時は諸方に招かれて暇なし。今人々あわて騒いで、彼者共暇あれば遊びに招きたるよ。軍に臨む者生きて歸らんと思はず。されば今生の樂みと思ひて慰み候、とぞ云ひける。また政宗福島之城を攻め取らんとて、木幡四郎左衛門、百騎ばかりにて城近く働きけり。岡野、井樓より見、大物見なれ共、三陣に分れたるは軍を心懸けたり。兵を出すべからず、と言ひけるに、鈴木彦九郎、寄せ來りし中

に政宗有るべし。喰止めて討取らん、といへば、尤なりとて兵を出し、先陣二十騎ばかり次の陣に一つにならんと色めく所を、鐵炮を打かけ、煙の下より左内一文字に切つて掛り、遂に木幡を討取りければ、景勝度々の功を賞し、謙信武功の輩に姓名を與へられし例により、左内を越後と更められけり。(景勝關ヶ原合戦後滅封されて米澤に移れる時) 政宗三萬石にて招かれしか共、舊主の好み忘れ難しとて、(會津に居残りて) 蒲生秀行に仕へ猪苗代の城に有り。下野守忠郷の時死しけるが、金子三千兩と正宗の刀を遺物に獻じ、忠郷の弟中務にも、金子三千兩・景光の刀・貞宗の小脇指を形見に進らせけり。また年頃人に貸しける金銀の手形證書の大きな箱に有りしを皆焼き捨てたりしとぞ。

右の記事に依ると、貧福論の岡左内は、常山紀談の岡野左内と同一人である事が明かて、伊達政宗が三萬石で招聘しようとしたところを以て見ると、當時武功者として諸國にも知れわたつて居つた士であらう。翁草には故主の蒲生家に一萬石で仕へたとあるから、政宗の三萬石を顧みないで故主の恩誼を思ふところは、一方から見ると清廉の處がある士である。清廉といふと、左内程の者が何故上杉家を去つて二君に仕へたかと考へると爰に不審が起るが、想ふに上杉家は謙信以來越後佐渡全國・越中・信濃・上野・岩代等の一部宛を領して三百萬石の大大名であつたのが、秀吉に欺かれて

百二十萬石にされ、ついで、石田三成が關ヶ原合戦で失敗したので其の同盟者の景勝が僅かに米澤の三十萬石にされた。それで岡野のやうな高祿の者が卻つて邪魔になつた位の時であるから、主人の爲を思つて浪人した位の者である。其所に丁度昔の主家の蒲生家が會津に六十萬石で轉封になつて來たから、それを幸として一萬石で仕へたのである。

次に伽婢子の和銅錢は、目錄には長柄僧都が錢の精靈に逢ふ事とあつて、古錢が化けて來て僧昌快といふ者と問答する物語であるが、これこそ魯褒の錢神論から出た證據には、錢神論中の文句を大分取つてをるのでも分る。和銅錢と貧福論の一致してをるのは、兩方共貨幣の化物と問答する點であつて、此の點は和銅錢が出處と見なければならぬから爰に載せて見る。

「京都四條の北大宮の西に、いにしへ淳和天皇の離宮ありける。ここを西院と名づく。後に橘のおほききき大后の宮住み給へりといふ。時世移りて宮殿は皆絶えて、僅に名のみ残り、今は農民の住家となれり。文明年中に長柄の僧都昌快とて、學行すぐれたる僧あり。世を厭うて西院の里に引籠り、草庵を結びて靜かに行はれしに、或日怪しき人尋ねて入來る。年五十ばかり、其姿は甚だ世の常ならず、頂圓くして下に角ある帽子をかづき、直衣の色淺黄にて其織りたる糸細く、かるらかに薄き事蟬の翼に似たり。自ら秩父和通と名乗りて、僧都とさし向ひ坐してさまざま物語りす。

我は元これ武州秩父郡の者、中頃都に上り、それより本朝諸國の内、行かざる所もなく見ざる所もなしといふ。僧都心に思はれけるは、これまことの人にあらじと推量おしはかりながら、しばしば問答して時を移す。眞言三部の祕經、兩界の曼荼羅、印明陀羅尼、灌頂の事までも其深き理を陳ぶるに、僧都未だ知らざる事多し。それより世の移り行く有さま、昔今の事目まのあたり見たるが如くに語りけり。僧都問ひけるは、君の帽子は本朝の制法に似ず、外圓くして内方なるは何故ぞやと。和通答へけるは、凡そ天地萬物の形、品々ありと雖も、つづまる所は圓まるき方かたなる二つの外なし。我外まを圓まかに心を方にす。天の形は圓く地の形は方なり。圓きは物にかたよらざる所、方なるは物の正しき所なり。されば我が道は萬物にかたよらずして、しかも萬物にはづれず、正まくして曲まがりゆがまず。これをあらはして頭に戴けりといふ。僧都の曰く、君の直衣は甚だ軽く細うして薄し。是れいづれの國より織出だせると。和通答へけるは、是れ五銖の衣と名付く。天上の衣は三銖といへども、下天の衣は皆重さ五銖六銖なりといふ。僧都、さてはいよいよ人間にあらずと思ひて、重ねて問けるは、君まことは如何なる人ぞ名乗り給へと云ふに、此人打笑ひ、僧都の道心深きによりてこそ來りて物語はすれ、わが名を名乗るには及ばず、やがて名乗らずとも知るしめされんものを。今は日も暮がたなり、いとま申さんとて座を立て出づる。其の行く跡を認とて見れば、庵

の東のかた二十間ばかりにして、竹藪の前にて姿を見失へり。明日里人あくるひを頼みて、其所を掘らせらるるに、三尺ばかりの下に一つの箱あり。其中に錢百文を得たり。其外には何もなし。僧都是を取りて見るに和銅通寶の古錢なり。つらつら思ふに、秩父和通は此錢の精なる事疑ひなしとて、地を掘りける里人をよびて、僧都物語せられけるやう、此人の形初めより惟しみ思へり。今是を案ずるに、昔本朝人皇四十三代元明天皇の御宇、七月に、武州秩父の郡より初めて銅たてまつを貢る。其時の都は津の國難波の宮におはしませり。是により慶雲五年を改めて、和銅元年と改元あり。此年始めて貢りし銅をもつて錢を鑄させらる。されば今この和銅通寶の古錢は、其時の錢なるべし。帽子の外圓く内方なるも、これ錢の狀かたちなり。青き色のひたたれは、これ銅の衣さびならん。五銖の重さは、錢の重さをあらはし、和通と名のりしは、和銅通寶の略せる名なり。秩父の者と云ひしは、もと銅の出せめし所なり。それより都に上り、諸國あまわく巡り見たるといひけるも、錢となり諸國にかたどり、表裏は陰陽なり。文字の數四つは四方にかたどり、其年號をあらはして天下を賑かほくはす寶とす。錢はこれ足なくして遠く走り、翹かほくなくして高く揚る。容曲かほくわるきも錢に向へば笑ひを含み、詞少なき人も、錢を見ては口を開く。杜預に左傳の癖あり。樂天に詩の癖あり。樊光はんくわうは錢

の癖ありといへ共、錢の曲癖は人毎にあり。鬼をしたがへ兵をつかふも、みな錢に過ぎたる術はなし。欲深き者錢を見ては飢ゑて食を求むるが如く、貪り多き人錢を得ては病人の醫師に逢ふに似たり。まことに寶なりとて打笑ひ、かの百文の錢を分ち里人に與へ、みづから眞言陀羅尼をとなへて供養をとげらる。里人それより家々賑はひゆたかになりて、僧都を敬ひかしづきしが、下略。岡野左内の武功談は正徳四年刊行の諸家高名記にもあるが、それには經濟談がないから、此の貧福論には關係がない。

(二) 陸奥の國蒲生氏郷の家中に、岡左内といふ武士がをつた。祿高が重く、武道の譽も高く、其の名を關東に震はしてゐた。此の武士にもつとも偏固な性癖があつた。それは富貴を願ふこと

が、一般の武士とは異なつてゐる事で、儉約を専らとして、それを家の掟としてゐたので、年月が経つに従つて、金錢が殖えて富み榮えた。そして軍の訓練・出陣の準備などをする間暇には、人の好む茶の湯や香を聞くことなどをしないで、一室に澤山の大判や小判を布き並べて、心を慰めて、それを何よりの樂みとして、世人の月や花を見るよりも面白がつてゐた。それであるから世間の人や同輩の武士共が、此の左内の行ひを怪んで、卑むべき吝嗇の人と思つて爪弾きして悪んだ。

左内の家に久しく仕へてをつた男が、一枚の大判を持つて仕舞ひこんでゐるのを聞きつけてその男を傍に呼んで、

(一) 崑山の壁でも、戦亂の世に於いては石や瓦同然で何の役にも立たぬ。かういふ亂世に生れて弓矢とる武士には、堂谿・墨陽のやうな名劍か、其の外に猶もあつてほしい物は金銀ぢや。しかし幾ら名刀でも千人の敵に向つて勝つ事が出来ないが、金錢の徳は天下の人人を従へる事が出来る。それで人の上に立つ武士たる者は、必ず貯へ置くべきもので、漫りに遣つては

ならぬ。お前は賤しい身分に過ぎた金を持つて居るのは感心なことぢや、賞めつかはず」といつて、十兩の金を呉れ、帯刀も赦し一人前の武士に取り立てて召し使つた。

世間の人は此の事を聞いて、左内が金を溜めるのはただ烏のやうに飽くことを知らない慾深でない事を知つて、それからといふものは當世の一奇士ぢやと云ひ觸らした。

下人に褒美の金を遣つた夜である。左内が寝て居つた枕もとに人の來る音がしたので、目が覺めて見ると、燭臺の下に小さな老人がここにこゝ笑つて坐つてゐた。左内は枕から頭をあげて、

「ここに來たのは誰ぢや。拙者に糧食でも借らうといふのなら、力量のある男どもでも來さうなものぢや。汝のやうな老いぼれた姿で、寝たところを襲うとは、狐か狸などが戯れるのであらう。何か覺えた藝でもあるならば、秋の夜長の目覺しに、そつと見せて呉れ」といつて、少しも驚き騒ぐ様子がなかつた。老人がいふには、

「かうして參つた私は、魑魅罔兩の類でもなければ、人間でも御座らぬ。貴方が常々大切になさる黄金の精靈で御座る。年來私を鄭重になされる嬉しさに、夜話でもしませうと存じて

推參して御座る。貴方が今日御家來をお賞めなさつたのに感じ申して、私が思ふ所存の程も語り慰まうと存じて、假に姿を現はし申したが、十に一つの益もない閑談で御座いませうが、云ひ度い事を云はねば腹が膨れるとやら申しますで、態々參つて御座なつた所をお妨げ致して御座る。

さて云つて見ますれば、富貴になつても驕りをせぬのが大聖人の道でもあり又教でも御座る。それを世の口悪き者の言葉に「富貴の者は慳貪だ金持には愚人が多いといふのは、晉の石崇や唐の王元寶のやうな豺狼・蛇蝎の根性をもつた輩のみを申すので御座る。もつと昔の富者といふ者は、天の時を計り、地の利を察めて、無理なことをせず自然に富貴になるやうにしたものぢや。例へて申さうなら、周の呂望が齊に封ぜられて、人民に其の土地相應の産業を教へると、海邊の魚類や鹽の利得を目ざして招かなくとも皆齊の國に集まつて來て、自然其の王様の太公望も餘所の國王よりは富貴になつた譯ぢや。また後の齊の桓公の家臣の管仲は、主人の爲に能く智慧をはたらかして九度も諸侯を會合させ、自分は倍臣でありなが

ら、その富貴なことは列國の王様にも勝つたといふ事ぢや。また(七)范蠡(八)・子貢(九)・白圭などいふ人人は、賣買の道を上手にやつて巨萬の金を積んだ。これ等の人人を列記して史記の中に貨殖傳を入れたのを、其の言ふ所が卑しいといつて、後世の學者が競つて司馬遷を誹謗するのには、まだ深くは悟らない人のいふことぢや。恒産のない者には恒心が御座らぬ。百姓は勤勞して穀物を作り、工人は其の巧を能く修め、商人は意を働かして、有る所からは買ひ無い者には賣り、己おれが職業を修め、家を富ませて、先祖を祭り、子孫の爲を計る外には、人たる者の爲すべき事は何も御座らぬ。諺に「千金の子は市に死せず、富貴の人は王者と樂みを同じくす」と申す。まことに淵が深ければ魚がよく遊び、山が大きければ獸がよく育つのは天の然らしむる道理ぢや。然るに「貧しうして樂む」といふ語があつて、文字を學ぶ學者や音韻を採る詩人などを惑はせる端緒となり申して、それが弓矢や刀劍を手に持つ武士までも富貴は國の基であることを忘れて、あやしい謀略ばかりを訓練し、物を殘ひ人を傷けて、おのづと己が徳も失つて子孫を絶つといふのは、畢竟財寶を輕んじて名ばかりを重んずるから

の惑で御座る。よく考へて見ると、名も財も求めるといふ心に二つは御座らぬ。文字の上の學問に束縛されて、金銀の徳を輕んじ、それを自ら清廉潔白と唱へ、鋏鋤を揮つて耕作のみを専らとし、算盤を捨てて金勘定せぬのを賢いと人はいふが、さういふ人は賢くとも、さうした所行は賢いとは申されぬ。黄金は七寶の中でも第一に貴いものぢや。土の中にあつては靈泉を湛へ、その地の不淨を除き、その地に妙音を藏するものぢや。かういふ清い寶の、どうして愚昧貪慾残酷の人の許にのみ集まる筈がありませんや。今夜年來の鬱憤を晴らして嬉しう御座る」といふ。

左内は興に入つて、席を進め、

「お話を承はると、富貴の道の高く貴ぶべき事は、拙者が常と思つてをつた所と少しも相違御座らぬ。それにつけても爰に愚かな事で御座るが、お聞きしたい事が御座る、どうぞ事細に教へ下され。今のお話しは金銀の徳を輕んじ、富貴の大業なることを知らぬのを罪とされ

たのぢやが、彼の書物讀の申す所も理由があると思はれる。それといふのは當世の富者は十人が中に八人ぐらゐるまでは、貪婪殘酷の者で、おのれは俸祿に飽き足りながら、兄弟一族を始め、祖先以來久しく召任つた者の貧窮を救ふことをもせず、鄰家の者が勢力を失つて他人に援けとなる者がなくて零落したのを僥倖として、それが持てる田畑をふみ倒して強ひて安價に買つて己がものとし、今己は村長となり上に立つても、むかし人から借りたものは返さず、禮儀のある人が席を譲れば、その人を奴僕ぬぼくの如く見下し、稀に舊友が寒暑の見舞に訪ねて來れば、自分の慾心から判斷して、それを金借りに來たのかと疑つて、留守をつかふやうな輩ともがらを數多見て參つた。

また主君には忠義の限りを盡し、父母に對しては孝行の評判があり、貴人を尊敬し賤者を扶養する心懸けはありながら、三冬の寒い夜でも一枚の蒲團(二〇)に寢起し、三伏の暑い日でも生平一枚で、濯あらいつて著る著きか換さへなく、豊年であつても朝夕一碗の粥かゆで腹を満すだけであり、又さういふ人は固より朋友が訪ねて來るでもなく、卻つて兄弟一族の方から通路を塞ふさがれ交際

を絶たれて、その怨を訴へる所もなく、ただ汲々として一生を終る者も御座る。それなら其の人は生業せいげふに疎うといが爲かを見ると、朝は夙はやく起き夜は遅く寝て、精力を費して働き、東西に奔走して更に暇なく、併も其の人が愚昧でもなく能く才能を用ひるのぢやが、それが甘く中あたらないのぢや。それでも一瓢(二一)の飲いんの清貧に安んじ得た、彼の賢人顔回けんじんがんくわいのやうな悟つた人ならばあきらめやうもあらうが、かう一生苦み働いても貧乏で終るのを、佛家では前生の業といつて説き示し、儒門では天命であると教へ諭して御座る。もし佛家のいふやうに未來といふものがあるとしてもすれば現在の世の陰徳や善行で、來世が楽しく暮らされるといふもので、人人暫らく今の貧窮の憤懣いんせほりを休め得ませうが、さうすれば富貴の道といふものは佛家の方でばかり其の道理が盡されてゐて、儒門の教の方は荒唐無稽くわうたうむけいちやと申さねばなりません。貴靈も佛家の教を道理ぢやと思ひなさらう、さうでないなら、その譯を詳こまかに説き示して下され」といふと、老人は、

「貴方が問はれるところの者は往古からまだ論じ盡されぬむづかしい道理ぢや。彼の佛法

で説くところを聞くと、富貴と貧賤とは前生の業の善悪によると申すことぢやが、それは其のあらましを云つたことで、前の世で己を善く修め、慈悲心を専らとして他人に情深く接つた人が、その善報によつて、今世に富貴の家に生れて來、然るに己が財力を頼んで他人の前に勢力を振ひ、無理を言ひ募り、禮儀を知らぬ淺ましき夷心を現はすのは、前生の善心が失くなつた爲で御座るが、これは又いかなる惡報のさせるのであるやら、佛菩薩は名聞利養を忌み嫌ふと聞いてをるからには、なんで貧賤や福德の事になど關つて御座らうや。さうであるべきのを富貴は前生の善業、貧賤は惡業の報とのみ說法するのは、一文不知の尼媾を蕩すだけの生佛法といふものぢや。

それが貧賤であらうと富貴であらうと構はずに、專念に善を積む人であつたならば、その身は兎に角、子孫には必ず幸福が來るであらう。『宗廟これを饗けて子孫これを保つ』といふのは此の道理の精妙なところぢや。おのれが善をなして、おのれが直ぐさま其の善報の來るのを待つといふのは、直ぐ正しい心懸では御座らぬ。

また慳貪殘忍の人が富貴ばかりでなく、壽命も永く、終りを善くするのは、私に人と異なつた意見が御座る。暫時お聞き下され。私が今假に姿を現はして物語は致し申せども、神でもなければ佛でも御座らぬ。もともと非情のもので御座れば人間仲間とは異なつた思慮が御座る。往古の富貴の人は、天の時に叶ひ、地の利を明らかにしての上、産業を治めて富貴となつたのぢや。これは少しも無理をせず天の自然の道理を計つてする事で御座るから、財貨の此所に集まつて來るのも、天の自然の道理で御座る。また卑吝貪婪の人は、金銀を見ては父母の如く親しみ、食ふべき物も食はず、著べき物も著ず、二度と得難い生命さへも、金錢の爲には惜いとは思はないで、起きても寝ても金錢の事を忘れるといふやうな事がないからして其所に集まるのは何も不思議なことは御座らぬ。私は前にも申した通り、神でもなければ佛でもない、唯非情のもので御座るから、其の非情のものが、人の善惡を糺したり、彼の人に從はうの、此の人から離れようのといふ譯は御座らぬ。また善人を愛撫したり、惡人を罰したりするのは、天とか神とか佛とかで御座る。此の三つのもものは、取りも直さず道で御座

る。私共の力の及ぶべきものでは御座らぬ。ただただ善人なり悪人なり、私共を鄭重に取り扱つて下さる方に集まつて参ります。これは金錢に靈が有ることは有り申せども、人間とは違つた所で御座る。また、富貴だからといつて善根をするにしても、理由も無く恵み施し、其の人の義か不義かも確めずに、輕卒に金銀財寶を貸し與へるやうな人は、假令善根であるにしても、自分の財寶は遂には散じ盡くるで御座らう。これ等の人は、金の用は知つてをつても金の徳を知らないで、輕としく扱ふが爲で御座る。又身の行も正しく、人に對しても眞心がありながら、世を貧窮に苦しむ人は、造物者の賜物薄く、福分少なに生れ出て來たのぢやから、幾ら精神を費しても、一生の中に富貴になることは御座らぬ。それぢやから古の賢い人は、富貴を求めて益があれば求め、益がなければ求めないで己の好むがままに、世の中を山林に遁れて靜かに一生を終るといふのは、心の中はどんなに清くさつぱりして居つたかと、羨ましく思はれるので御座る。

それで、富貴の道ばかりは、一種の術であつて、その術の巧な者は能く集め、其の術に未熟

の者は、己が持つた金までも容易く散るので御座る。その上私共は人の生業に附き隨ふだけで、これと定めて頼みとする主人もなく、此所に集まつたかと思ふと、その主の所行によつては忽ち他人の許に走ることは、水の低きに就くが如くで御座る。さうして夜となく晝となく、それからそれへと、廻り歩いて休む暇も御座らぬ。それで、これといふ生業も無い閑人ならば、泰山のやうに積んだ金錢もやがては食ひ盡し、江海の如く澤山な財寶も遂には飲み乾してしまふで御座らう。幾度も申しますが、不徳の人の財寶を積むことなどは、その善惡に就いて、兎や角君子たる者は論ずるに足らぬ事で御座る。時を得、運に乗じた人が、儉約を守り、費を省いて能く努力しませうなら、おのづと家が富み、人も服従するで御座らう。私は佛家の前業といふ事も知らなければ、儒門で申す天命といふ事には關りなく、それ等とは全く別な境涯に遊んでをる者で御座る」

といふ。左内はいよいよ興に乗じて、

「貴老の議論は眞に妙で御座る。久しい間の疑念も今夜幸に氷解致し申した。ついでに試み

にもつと御聞き申さう。今豊臣太閤の威風四海を靡かし、五畿七道稍靜謐のやうで御座るが、亡ぼされた國々の義士共が彼所此所に潛み竄れ、或は大名の許に身を寄せて世の中の變を窺ひ、かねての志を遂げんとしてをり、百姓も亦戰國の者ぢやから鋤鋤を釋てて武器に易へ、農業を怠つて武藝を勵むといふ有様で御座れば、武士たる者は枕を高く安眠する時節では御座らぬ。今の豊臣の世では、永く不朽の政體とも申されぬ。誰が此の世を一統して民を安からしめるで御座らうか、また貴老は今の武將の中で誰に與しなさるか」と問うた。老人は、

「これも亦、人道で御座るから私の知つた事では御座らぬが、ただ富貴の道から申して見ますると、甲斐の信玄が如きは、智計謀略は百發百中ともいふべきぢやが、一生の間、その威勢を僅かに三國に震うたのみで、しかも世の中では名將ぢやと皆賞めて御座るが、その末期の言葉に『當時織田信長は果報すぐれた大將ぢや、それがし平生に彼を侮つて、征伐を怠つてをる中に、此の疾病に罹つた。我が子孫もやがて彼に亡されるであらう』といつたとの事

で御座る。越後の謙信は勇將で御座る。信玄が死んでからは、天下に敵する者もないが、不幸にして早く死に申した。信長は器量人に勝れてはあつたなれど、信玄の智謀には及ばないで、謙信の勇猛には劣つてをつた。併し運よく富貴を得て、一度は天下の大將軍にもなられた。がしかし軍の事を任せて置いた臣下の者に恥辱を與へて、卻つてそれが爲に命を落したのを以て見ますれば、文武を兼ねた名將でも御座らぬ。太閤秀吉は志は大きいが、初めから天地に満つるといふ様な抱負があつた譯でも御座らぬ、と申すのは、勝家と長秀が富貴を羨んで、其の姓の柴田と丹羽の一字づつを取つて羽柴と名付けたのを見ても知れ申す。今は龍となつて大空に昇つたが、はや池中を忘れたでは御座らぬか。秀吉が龍となつたとて、龍の中の蛟蜃で御座る。蛟蜃が龍となり申せば、その先の壽命は僅かに三歳を過ぎないものぢやといふ事で御座る。これも亦後が續くことでは御座るまい。それで驕を以て治めた世といふものは往古から永く續いた例は御座らぬ。人の守るべき道は儉約ぢやが、これも過ぎると卑吝に陥り申す。されば儉約と卑吝の境ひ目を能く辨へるやうに努むべきが正道ぢや。今豊臣

の政體が久しく保たなからうとも、近いうちに萬民賑はしく、戸々に千秋樂を唱ふやうになり申して、貴殿の望み通りになるで御座らう」

といつて、八字の句を諷つた。其の詞は、

(二五) 堯 莫 日 杲 百姓 歸 家

といふのであつた。

數々の語りぐさに興も盡き、遠寺の鐘が五更を告げた。老人は、

「夜も明け申した。お別れ致しませう。今夜の長談義、まことに貴殿の睡りを妨げ申した」

といつて、起つて行くやうであつたが、かき消すやうに見えなくなつた。

左内は、熟と夜もすがらの事を思ひ浮べて八字の句を案じ考へると、百姓家に歸すの句が略その意味がわかつて、深くそれを信ずる事になつた。まことに堯莫が瑞草であるが如くに百姓が家に歸するのは瑞祥である。

註

(一) 陸奥の國蒲生氏郷 陸奥の國といつたのは岩代の會津を指したのだ。蒲生氏郷はもと織田信

長の臣、天正十八年豊臣秀吉小田原の北條を亡して、九月に氏郷を會津四十二萬石に封じた。

文祿四年に氏郷卒して後は上杉景勝の領地となつた。

(二) 崑山の壁 支那の西方崑崙山から出る壁。千字文に玉は崑岡より出づとある。

(三) 堂谿・墨陽の劍 支那の古劍。廣雅に、燕支・蔡愉・千勝・堂谿・墨陽、並びに劍名なりとある。

(四) 晋の石崇 晋の世の富豪。字は季倫、河陽に別莊金谷園を營んで驕りを極めた。後に愛妾綠珠の事の爲に孫秀に殺された。

(五) 唐の王元寶 唐の開元天寶頃の富豪。非常な奢侈を極めた者で、天寶逸事に其の二三の記事がある。其一、富窟と題して、「王元寶は都中の巨豪なり、常に金銀を以て疊んで屋壁と爲して上に紅を以て之に泥す。又宅中に於いて一の禮賢堂を置き、沈檀を以て軒檻と爲し、砥硤

を以て地面に^{いしだ、み}甃にし錦文石を以て柱礎と爲し、又銅線を以て錢を穿つて后園花逕の中に甃し、其の泥雨に滑らざるを貴ぶなり。四方の賓客至る所歸するが如し。故に時人呼んで王家の富窟と爲す。」其二、床畔香童と題して、「王元寶賓客を好み華修を務めとす、器玩服用王公に僭す、四方の士盡く歸して焉を仰ぐ。常に寐帳床前に於いて矮童二人に七寶の博山爐を捧げしめ、晚より香を焚いて曉に徹す。其の驕貴なる此くの如し」。

また野客叢書に王元寶が鑄錢司に命じて開通元寶を鑄さずる記事がある、それは開元通寶でなくて開通元寶であるとの考證だが、錢を鑄る、既に富豪を證據立ててゐる。

(六)呂望 周の武王の功臣太公望。

(七)范蠡 越王勾踐の功臣。越王の爲に吳國を亡ぼして後、行方をくらまして殖産を計つて富豪となつた。即ち陶朱公。

(八)子貢 孔子の門人だが、曹國や魯國の間で商賣をやつて金満家となつた。史記の貨殖傳に「子貢駟を結び、騎を連れ、束帛の幣以て諸侯に聘享せらる、至る所の國君庭を分ち之と抗禮せざる無し」とある。

(九)白圭 魏の文侯の時の富者時變を觀測する事が上手な人で、人が棄てる物は自分が取り、人の

欲しがるものは高く賣つて大いに富を得た人である。

(一〇)三冬云云 三冬は十・十一・十二の冬三月。一枚の蒲團に寢起しは、原本に一裘に起臥しとあるが、裘は毛衣と訓するので、日本では毛衣など不似合であるから、ただ起臥に因んで蒲團とした。

(一一)三伏云々 三伏は暑中の初・中・末の三伏。暑い盛りの節をいふ。生平一枚云云は、原本に一葛を濯ぐいとまなくとある。葛は葛織の著物であるから、キビラとした。

(一二)瓢の飲云々 史記の顔回傳に「孔子曰く、賢なるかな回や、一簞食・一瓢飲、陋巷に在り、人其の憂に堪へず、回や其の樂みを改めず」とある。

(一三)宗廟これを饗けて云云 中庸に「子曰く舜は其れ大孝なるかな、徳は聖人爲り、尊きこと天子と爲り、富四海の内を有つ、宗廟之を饗け、子孫之を保つ、故に大徳は必ず其位を得、必ず其祿を得、必ず其名を得、必ず其壽を得」云云とある。

(一四)三國 甲斐・駿河・信濃の三國を指す。

(一五)堯莫 支那の聖帝、堯の代に、帝の庭に生じた莫莢といふ草を指す。その草は「十五日以前

は日に一葉を生じ、以後は日に一葉を落し、月小にして盡くれば則ち一葉厭して落ちず、名
けて莫茨と曰ふ、之を觀て以て旬朔を知る」と十八史略にある。
（一六）家に歸す。家康に心服する意を含む。即ち徳川の天下になる意。

雨月物語終

春雨物語

春雨物語の序

春雨が今日で幾日か、靜かに降つておもしろい。筆だの硯だの、水入だのと文房具をとり出して、何か書かうと思つて見たが、何も言ひ得る事がない。古い物語風を學んだのは、まだ初心であるし。それでも自分相應の山賤やまがつめいた卑いやしい事であるならば、何とか書きつけ得よう。昔の事でも今の事でも、人に欺かれて聞いたのを、それを虚言うそ話はなしと知らないで、己もまた人に語つて欺くものである。よしよし寓言そらごとを書き綴つづつて、それを尊つととい經文きやうもんのやうに戴かかせる人さへあると思つて、私わも物云ひ續けると、猶も春雨がしとしとと、降るは降るは。

春雨物語

血かたびら (第一)

〔梗概〕 五十一代の帝平城天皇が、御在位僅かに四年にして、皇太弟神野親王に御位を譲られた後、平城天皇の寵姫藤原薬子が、兄の仲成と謀つて、平城天皇を再び帝位に就かせ奉らんとして事敗れ、仲成は誅せられ、薬子が自殺したが、其の時の血が帷子かたびらに著いたのが恐ろしかったといふので、題名を血かたびらとしたのだが、内容は、平城天皇と神野親王（後嵯峨天皇と稱せらる）との問答、

薬子が天皇の御側おそばを去らずに、或は詠歌し或は舞踊などして奉仕する様を描寫したもので、終りに自殺のありさまを簡短に記してある。

(二) 天の大國高日子おほくにたかひこの天皇、神武天皇開闢かいはくから五十一代の大政を聞き召し給うたので、五畿内は固もとより七道の諸國までも、早魃かんばつ・水災すゐさいなどがなく、人民が腹はらを鼓つづみがはりに打つて、豊年ほうねんの歌を唱うたふかと思れば、到るところに別に悪木といふべきもないので、良禽(二)りやうきんは木を擇えらむこともなく巢すくふといふ有様で、歴史を司つかさどる記傳きでんの博士はかせ達たちが、其の佳運かうんを表徴へうちようすべく大同の二字(三)を撰えらんで年號とした。帝位に御就おつきになつて程もなく、太弟(四)かみの神野親王しんわうを皇太子に御定めになつて、春(五)はる宮みやを御造營ごぞうえいあそばされて其處そこに御遷おんうつさせられたまうた。此の御事は神野親王に對して、先帝桓

武天皇の御寵愛が一層まさつてをられたからである。

神野親王は御聰明にあらせられて、上に立つ君主としては例がない程に和漢の書籍を御涉獵あそばされたが上にも、書道では草書でも隸書でも外に勝る人がないまでに御上手なので、來朝した唐人までが、押し戴いて貰つて歸つたとのことである。

此の時代は、唐では憲宗の御代であつたが、徳ある鄰國と思つて日本に喜んで交通し、また新羅の哀莊王と申す天子が、往古神功皇后の征伐後の例にならつて、數十艘の船で貢物を獻上するのであつた。

平城天皇は、善柔の御性質に、御わたらせ給うたので、早く春宮に御位を御譲りあそばされる御意を、内々御沙汰なされたのを、大臣參議達が、

「それは暫らく御待ち下され」

と申して、お止め申し上げたのであつた。

一夜、御夢を見たまうた。その御夢に、先帝桓武天皇の御聲高く、和歌一首、

けさの朝げ鳴くなる鹿のその聲を

聞かずば行かじ夜の更けぬとに

平城天皇には、此の御歌を御熟考あそばされて、その意味を御知りになり給うた。

また或夜の御夢に、先帝の御使者が來て、

「早良親王の御靈が、柏原の御陵に參詣して御罪を謝し申したが、ただ親王の後嗣の無いのを歎き訴へた」

と申して、其の御使者が歸られた事を御覽になられた。これは御心の御弱さに徒夢を御覽になつたのぢやと、御心づきなされたなれども、早良親王に、崇道天皇と御尊號を贈られたまうて、僧侶巫覡等を召び集め、祭壇に昇らして加持祈禱をなさしめられた。

其の時、尙侍藤原の藥子と、その兄仲成等が一齊に申し上ぐるのには、

「夢に六の區別を説いて御座るが、その善惡に數の定まりがあるとも申されうや。御心の御正直過ぎさせ給ふところに、惡神が憑り附くので御座る」

といつて、天皇の御健康の御勝れあそばさぬより、かういふ御心細い御夢も御覽するものと合點してか、出雲の廣成に云ひつけて、御藥を調合させて奉つた。

また參議の宮臣達が相談して、諸々方々の神社や名刹に御使者を遣つて、祈禱の事を取り計らはせたが、その上にも、世を避けて遠くの伯岐の國に隠れ住んでをる名僧玄賓を召し寄せて、御加持祈禱を行はせられた。

此の玄賓法師は、前に僧都に昇された程の者だが、一族の弓削の道鏡が暴悪を汚らはしいと自ら恥ぢて、山深く幽邃の所があれば、其處此所と尋ね住んで行ひ澄ましてゐた。今度、七日間祈禱したので朝廷に立つて、

「妖魔を禳ひ除け申した上は御暇をたまはりたい」

と申し上げた。天皇の御心、清々しくならせ給うたので、猶ほも天皇の御側に奉仕するやうに勅りがあつたなれども、何か外に決心する事があつたのか、又と京を去つて遠い土地に去つてしまつた。

仲成藥子兄妹は、謀計をめぐらしては外の朝臣を天皇の御側から遠ざけて、己等二人で天皇に追從輕薄して、善からぬ御事があつて御諫め申し上げべき事も、卻つて笑顔を作つて、ただただ御心を取るやうに振舞つた。

宵とごとの御宴に、歌垣つくつて御遊あらせられる事を御勧め申しあげた。その時の御製は、
さ小鹿は夜こそ來鳴け置く露は

霜結ばねば朕わかゆなり

といふのであつた。此の御製を、お側の者が高らかに歌ひあげると、天皇には御土器を御取りになられ、藥子は扇を颯と開いて、御座も狹しと立ち舞ふのであつた。且つ舞ひ、且つ歌ふ歌は、
「三輪の殿の神の戸をおし開かずもよ、幾久と」

と、聲朗かに、舞の大袖ひろがへして、萬歳をことぶきたてまつると、大御心清々しく、次の日の朝政も怠らせ給はなかつた。

皇太弟神野親王の、才學秀で給ふのを嫉妬して、天皇に讒奏する者があつた。その時天皇に

は、誰に向つて仰せられるともなく、

「皇祖の尊は、太刀矛取つて荆棘の道を開かせられ、弓箭を以て仇敵を討ち亡ぼされてから、十代の崇神の御時までは、何等記載すべき事が無かつたのか、養老の紀に見るべき所がない。儒道渡つて、其の聖賢の教で、悪を撓め善に歸するかと見ると、正直を枉げて言論ばかりが巧みで、素朴の風がなくなり、代々繁榮になるかを見ると、卻つて世の中が靜謐ではない。朕は書籍を読むことには疎いから、ただ直く正しき事を旨として勤むるであらう」と獨言を仰せられた。

一日の事である。大虚に一點の雲も無く、枝を鳴らす程の風も吹かないのに、大空に物音が轟いた。其のとき丁度弘法大師が参り合はせて居つたので、數珠をおしすり、咒文を高く唱へると、忽ち地に墮ちたものがある。怪しいことには、異國人が車に乗つて空中を飛行するのであつた。それをひつ捕へて櫃に籠め、難波の堀江に沈めさせ、朝臣忌部の濱成が、蠻人の墜ちた所の土を、深さ三尺まで掘つて、神逐に逐ひ遣る祝詞の聲が高らかであつた。

又一日の事である。皇太弟神野親王が、御父桓武天皇の柏原の御陵に御参詣なされて、密旨の奏文を捧げ奉つたが、其の密旨の御意のあるところは、如何なる御事であつたか、誰にも分らなかつた。

天皇も、また一日柏原の御陵に御参詣したまうたが、その時は、百官百司、御前を追ひ拂ひ、御後を警備し、左大將・右大將・中將等、御車の右と左に、弓と矢を張りしほり、金銀をちりばめた佩刀をきらびやかに佩びて扈從した。御陵の前に御著になつた時は、百取の机に幣帛堆(二三)く並列べ、神の枝と色とりどりにこき交せて取り掛けた有様は、神代の儀式も斯くあらんと思はれるまでであつた。それのみではない、雅樂寮の樂官等は左右に立ち並んで奏する、三種の笛・鼓の音楽は、その音の聞き分けも知らない仕丁等でさへ、面白しと、耳傾けて聞くのであつた。

その時である、怪しい事には、後の山から驟に眞つ黒な雲霧が立ち昇つて、雨が降らないが、月なき大晦日の夜の暗いのに等しかつた。それで天皇には御急ぎあつて御還幸なされるのに、數多の仕丁等のみでなく、我も我もと左右の大中將達が、列を亂して、鳳輦に取りついて御警備

申しあげた。内裏に御著あそばされると、御伴の者が、

「還御」

と、高らかに呼ばはると、大伴の氏は、御門をさつと開いた。

御容體、御平常にあらせられじと申して、醫師等急ぎ參内して、御藥を調合して奉ると、天皇には、

「豫ねて思うてある、讓位の祥であらう」

と、長閑に覺し召されて、更に御惱の御氣色があらせられなかつた。

かくて宵の御宴となつて、御土器御取あそばさると、栗栖野の小川の(二五)小鱒に、蕨の岡の蕨と
りあはせて、膾や何やと御進め奉つるのであつた。夜になつて月も出で、時鳥の(一六)一聲二聲鳴き
渡るのを聞かせ給うて、御氣色よく、大殿(二七)ごもらせたまうた。

翌朝になつて僧空海が參内した。天皇、空海に御問はせ給ふには、

「唐土の三皇五帝の事はあまりにも遠い、その後の代の物語せよ」

と仰せられた。空海の御答へには、

「何れの國でも教へによつて開けて行くといふものでは御座らぬ。(二〇)殷の湯王が、鳥獸を捕る
に網を四方に張つたが、のち心づいてその三面を解き、一隅のものだけが我に來れと云つた
のでさへ、私心の始めて御座る。只々、御心の眞直なところを御基として覺し知りたまへ」
と申しあげた。此の時天皇には、空海の語に基いて、堯の代の老人の詞に「日出でて起き、日
入りて臥し、飢ゑては食ひ、渴して飲む」と云つたのも思ひ出だされ、民の心に私なしとうち
うなづかせ給うて、空海に向つて、ただ、

「よしよし」

と、勅りあらせられた。

また一日太弟神野親王が、天皇の御所に參られて御物語が久しくあられた。その時天皇は、
「周の代は八百年、漢の代は四百年、どうして斯く長かつたものであらう」

と仰せられた。皇太弟は、御賢くあらせられたから、御兄天皇の御心を推し量つて、

「長いとはいふものの周は僅かに七十年、後には衰微して振はなかつた。漢の代も祖先の高祖が死んで、其の骨のまだ冷えきらぬ内に、^(二二)呂氏の亂が起つたでは御座らぬか。これしかしながら、謹戒せぬからばかりでは御座らぬ」

と、何事も天命であると言はんばかりに御答へ申しあげた。天皇は又

「さらば天の時か」^(二三)

と、御質問あそばされると、太弟は、

「天とは日々に照らしませる皇祖の御國で御座る」

と御答へ申せば、天皇は、

「儒臣等に、天とは則ちアメを指すかと聞けば『命祿である』と云ふし、また『數の限である』とも云うたが、これは面倒ぢや。それに釋迦は『天帝も我に冠傾けて聽かせたまふ』などと申してある。ああ煩はし」

と仰せられたが、太弟は、今度は御答へなくて、退出あそばされた。

明日御讓位の宣旨が下つた。今は上皇と申し上ぐべき平城天皇には、新京城の平安に都を遷されてからは、故郷となつた大和の平城に御下り居させ給はんとの思し召しで、元明天皇から光仁天皇まで七代の宮所であつたほどで、昔は宮殿のあつたありさまを、歌の上には、^(二四)『咲く花の匂ふが如く今盛なり』と、小野の朝臣老が詠んだのも思し出でられて、其處にと御定めになつた。

良き日を選んで、今日こそはと出御あそばされた。伏見も過ぎ宇治に至つて、鸞輿しばし御止めあつて、河面を御眺めあらせられて、詠ませ給はつた御歌は

武士よ此の板橋のたひらけく^(二五)

通ひてつかへよろづ代までに

此の御製を、侍臣等七度歌ひ上げた。其處には長き橋がある。

「網代の波は今日は見えないが、千代千代と鳴く鳥は、河洲に羣れて居るわ」と御意あつて、また御土器を召された。例によつて尙侍薬子が捧げ參らせると、

「處に附けて歌詠め」

と仰せたまはつた。薬子は、

朝日山(三六)にほへる空はきのふにて

ころもできむし宇治の川浪

と詠んだ。上皇は、

「河風は涼しくこそ吹け」

と仰せあつて、うち笑ませたまうた。左中將藤原の惟成(三六)の歌

君が今日朝川わたる淀瀬なく

我はつかへむ世をうちならで

兵部大輔橘の三繼(三七)は、

妹(三六)に似る花とし云へばとく來ても

見てましものを岸の山吹

と詠んだ。上皇、

「それは橋(三七)の小島が崎ならずや、飛鳥(三六)の故郷の草香部の太子(三七)の宮居(三六)ありし處よ」

と仰せたまはつた。猶ほ種々の歌があつたが今は忘れた。

奈良坂(三九)で御晩餐(三九)まるられて、上皇、

「兒手(三〇)柏(三〇)はいづれ」

と問はせたまうた。

「それは二面(三一)にて、心の邪(三二)けた人に例へた忌(三三)としき事(三四)で御座る。御供仕(三五)うまつる臣達(三六)が、い

かで二面(三六)で御座らうや」

と申しあげると、

「よし」

と宣ひて、平城(三九)の古宮(四〇)に夜に入つて入らせたまはつた。

明日御簾(四一)をかかげさせられて、四方(四二)の景色を御見晴(四三)らせ給ふに、東は春日(四四)・高圓(四五)、南は三

輪山・鷹むら山を限つて、西は葛城や高間の山・生駒・二神の峰と、初夏の若葉緑に青牆をなしてゐる。上皇は、

「國の開き初めより宮居を此處に定めたまうたのも道理である。しかるに先帝のいかに思はして、北の平安に遷らせたまひしか」

など、御獨言仰せられた。侍臣は、

「北には元明・元正・聖武御三帝の御墓立ち並びたまふ」

と申し上げたので、杳かにふし拜み給はつた。

大寺名刹の葺高く層塔數多あるを數へさせたまうた。城市の家とも、まだ今の都に遷り盡さないもので、古き都と申しても、故郷といふべきほどには淋しくもない。

(三二) 東大寺の毘盧舍那佛御參拜あらせんとて先づ出御なされた。大きな佛體を見上げさせられたまうて、

「思ふに過ぎた容體である。身毒といふ西の國の端に生れて、此の國の陸奥の黄金の花に、

光添へさせ給ふことこそ不審」

と仰せたまうたので、近く扈從した僧侶が、

「これは華嚴と申す御經に説かれてある御容で御座る。如來の變化、天にあつては虚空にはだかり、また芥子粒の中にも狹しともなく所得させるとは申して御座る。御肖像は、日本にも渡つた、御足の裏に開元の年號あるのが、三度の御うつし姿で、變遷があつても五尺に過ぎたのを眞像と信賴し奉る」

と賢しげに申し上げたが、御心には御納得なくあらせられしと見えて、何等の御答なく、物を仰せられなかつた。此の御本性こそ本の天子として誠に尊く思はれた。薬子・仲成等が、悪く撓めようとしても、御冠傾けてのみ御座すこそ畏くもいとほしき御有様であつた。

供御の御臺參らせ奉れば、よくきこしめしあそばされて、

「難波の蟹が貢ぐは、此處も近きか」

と仰せられた。薬子は、

「難波に都あらせ給うた帝は、御父が弟御子を立てて、日嗣と定めたまはつたので、神去りたまひて後は、兄皇子等も、ただただ宇治に仕へ奉つたが、兎遅の皇子は『われ兄を踏えて登極せん事、聖の道にあらず』と仰せあつて御位を譲りたまうたが、兄の皇子は又『否、御父が既に日嗣の皇子と君を定めたまはつたのぢや』と三年まで兄弟相譲つて、天皇の御座空しかつたので、弟兎遅の皇子は遂に又伏して、世を去られたと申す。此の時、難波の蟹等が貢ぐ眞魚は、兄皇子弟皇子と、遠近にさまよつたので、眞魚は道に腐れたと申す。それぢやによつて諺に『海人なれや、己が物からもていさつ』と語り傳へて御座る。兄の皇子詮方なく御位に昇らせ給うたのを聖王と申し奉り、仁徳の御名は代々に有り難く申し傳へて御座る。君には僅に四年で御位を下り居させたまうたので、臣も民も望みを失つて悲歎に暮れて居り申す。今の帝は、唐土の書を讀んで、彼處の篡ひ代る悪しき風俗を識らせ給うて御座る」

と申し上げると、天皇には

「あなかしまし」

と御制し給うた。薬子は又、

「否、此處に仕へまつる臣達は、今一度平安の宮を都として、御位に還らせんことを心に願ひ奉つて御座る」

と申しあげた。すると太弟今の帝に心通はす奈良坂の人も有つて、薬子の言葉を聞き漏らし、

「あア」

と歎息の聲を發する者もあつた。薬子に代つて、兄の仲成は、

「君の御位下りは暫しの御惱なりと宣旨あつて、御即位再びあらせたまへ。今上の御心に違

はば、我は兵衛督で御座る、奈良山・泉川に軍立ちして、御稜威の程を示し申さん」

と、邊をはらつて申しあげた。

此の頃、奈良の市や三輪の町の童謡に、

花はみなみにまづ咲くものを

雪の北窓こころ寒しも

と歌ふのが、北方平安の宮所に聞えて、平安の近臣を召し寄せて、推し問はせたまへば、

「これは薬子・仲成等が勧め参らすことで御座り申す。此の春正月の朔日に、例の御薬参らすのに、屠蘇・白散ばかりを御進め申して、^(四)度瘴散を奉らなかつたので、『どうして』と御問はせ給うたのに、薬子等が申すのに『君、瘴壁を超えたたせまじきに、奈良坂平であつても、青垣山の外の邊の山路で御座る、此の御墻の内ですへ、悉くは貢物奉らうとはせぬでは御座らぬか、悲し悲し』といつて、涙を袖に包み漏らされた。此の時御前に侍りて此の事を聞いた外には、正しき事は知り申さぬ。聖代に生れ合はして誰かは兵仗干戈を善き事と思はれませうや」

と申し上げたので、さらばとて、即ち官兵を遣はされて、仲成を捕へ、首刎ねさせ、奈良坂に梟けさせられた。薬子は家に下して籠めをらした。

また御子の高丘親王は、今の帝が、上皇の御心をとつて、一旦、皇太子と定め給うたが、此

の度の事を以て停止されて、僧侶になれと宣旨あつたので、親王は髪を薙ぎ、改名して眞如と申されたが、三論を法隆寺の道詮に學び、眞言の密旨を空海に習ひたまうて、猶奥旨を極めんと、貞觀三年唐土に渡り、行きゆいて葱嶺を越え、遂に羅越國に至られて、心ゆくまで問ひ學んで、歸朝あらせられた。此の皇太子の御代知らせ給ふを、上下ひそかに願ひ合つたといふ事である。

さて薬子は、おのれが罪惡は悔まずして、怨みの愠氣焰の如く、遂に自害して死んだが、其の血が、帳帷子に飛び灌いで、月日を経てもぬらぬらとして乾かないで、恐ろしく見えたから、心猛き若者共が、遠く弓で射つたが、矢がはねかへり、劍で切れば刃が缺けこぼれて、ただ恐ろしさが増るのみであつた。

今度の事、上皇には固く知し召さなかつた事ではあるが、ただ御自ら誤つたと覺し召して御髪下しなされて、御壽五十二と申すまで、世におはせしといふ事、史書に記してあると申すことである。

註

(一)天の大國高日子の天皇。平城天皇の御名。
 (二)良禽木を擇む。左傳の哀公十一年の條に「仲尼曰く、鳥は則ち木を擇む、木豈能く鳥を擇まんな」とある。此の物語での意は、日本中に別に惡木といふのがないから鳥も木も擇む必要がないのである。

(三)大同。平城天皇の年號。

(四)神野親王。桓武天皇第二の皇子。後に平城天皇の讓りを受けた嵯峨天皇。

(五)春宮。東宮に同じ。皇太子の宮。

(六)書道云。嵯峨天皇は逸勢・空海と共に日本の三筆と稱せられた能書の御一人。

(七)善柔。作者秋成の意では、人に逆らはない柔和な性質といふのであらう。

(八)早良親王。光仁天皇第三の皇子。桓武天皇の弟。桓武天皇位に即いて皇太子となつた。故あつて藤原種繼を殺して、淡路の國に配流され、途中で薨じたが、其の靈崇りを爲して後の皇太子が永く病んだり、疫病が流行つて人多く死んだ。延暦十九年に追尊、崇道天皇と稱せられた。

(九)藤原藥子。記事が長くなるが、此物語の不足を補ふ點もあるから本朝通紀の記事を譯して見ると「初め上皇(平城天皇を指す)位に在るの日仲成が妹藥子を以て宮に納る、時に藥子性奸佞にして巧みに愛を求め恩寵に媚ぶ。上皇甚だ之を愛して其の奸を知らず、故に言大小と無く聽容せられざる無し。百政衆務悉く藥子が自由に出づ、威福の盛重四方を煩はす。仲成も亦妹に憑つて權勢を恣まにす。天皇(嵯峨天皇を指す)太子と爲つて能く其の奸を知る。藥子衆惡の己に歸することを知つて仲成と相ひ計つて上皇に告し、宮城を平城に造り、遷都の事に託して、重祚の企てを勧め、潛かに使を遣はして畿内及び紀州の兵を募る。天皇大いに驚き、坂上田村麻呂に勅して將に平城の宮を圍まんとす。上皇之を聞いて平城を出てて川口の道より東國に入る。其の諸司及び宿衛の者皆從ふ。田村兵を放つて淀山崎宇治の諸路を守る。右近衛住吉豊繼、仲成を射殺す。上皇、大和國添上郡に到り、田村が兵道を遮ぎると聞いて

行かん所を知らず。乃ち宮に旋りて剃髮す。薬子は衆惡の歸するを知つて、遂に薬を呑んで自害す。天皇、勅して餘類を捕へて處々に流し、太子高岳親王を廢して僧と爲し、大伴親王（淳和帝なり）を立てて太子と爲す」とある。

(一〇)仲成。同じく本朝通紀に「仲成は三位宇合の曾孫贈太政大臣正一位雜繼の長子なり。性狼狽にして酒色に溺れ、放縱にして人の彈りを憚らず。女弟薬子、寵を専らにするに及んで、威を假りて益王公に驕る。初め仲成、民部大輔江人の女を以て妻と爲す、其の姨頗る色有り。仲成之を見て之を悦び、刀を以て女を強ひて之を姪す。其餘の逆行不義、人の患を顧みず、衆惡己に歸して遂に誅せらる」とある。

(一一)玄賓。姓は弓削。河内の人で、唯識を興福寺の僧宣教に受けて名がある。性質囂塵を厭つて、此の物語の如く伯耆の國に隠れて居つたが、後には備中の湯川寺に通じて去つた。そして弘仁九年六月年八十餘で寂した。

(一二)空中を飛行。正史に此の事がない。今の飛行機だが、架空の捏造とすると、作者秋成の想像力、偉とすべきである。併も蠻人が空中を飛行すとあるが、果して後世に西洋人が飛行機を發明した。併し弘法大師のやうに呪文を唱へただけで、飛行機を墜落させ得る者が出て來

るかどうかは疑問である。

(一三)百取の机。百は多い意。取は持の義。種々の飲食物などを載せる多くの机。神代紀に「之を百とりの机に貯へて之を饗す」とある。

(一四)讓位の祥。平城天皇は、前に善柔の御性ともあつて、御父天皇桓武帝の意のあるところを推察したり、又御弟神野親王の賢人であるのを考へたりして早く讓位の御意があつた。それで附隨者の薬子などが惜がつて、無理に重祚の御謀叛を勧めたのである。

(一五)栗栖野。山城宇治郡の地名。今の山科驛の西南半里ばかりの所にある。

(一六)蕨の岡。蕨の出る岡か、地名か未だ考へない。

(一七)大殿ごもり。御寢所に入ること。

(一八)三皇。盤古・有巢・燧人の三氏。また天皇・地皇・人皇の三氏。

(一九)五帝。伏羲・神農・黃帝・堯・舜。

(二〇)殷の湯王云云。史記殷本紀に「湯出でて野に網を四面に張るを見、祝して曰く、天下四方よりして皆吾が網に入れと。又曰く、嘻之を盡せりと。乃ち其の三面を去つて祝して曰く、左せんと欲せば左せよ、右せんと欲せば右せよ、命を用ひざらんものは乃ち吾が網に入れと。諸

侯之を聞いて曰く、湯の徳至れり、禽獸に及べり」とある。

(二一)堯の代の老人の詞 十八史略帝堯の條に「老人有り哺を含み、腹を鼓ち壤を撃つて歌つて曰く、日出でて作し、日入つて息ふ、井を鑿つて飲み、田を畊して食ふ、帝力何ぞ我に有らんや」とある。即ち擊壤の歌である。

(二二)呂氏の亂 呂氏は、漢の高祖の後の姓。亂は漢の惠帝の八年に、呂祿・呂産等が外戚の威をかりて亂を起したのを、いはゆる劉氏に左袒する者劉章等が諸呂を誅したのをいふ。

(二三)天の時 地の利に對する語で、天のなせる運命の時期ぐらゐに解してよからう。

(二四)咲く花の匂ふ 青によし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今盛りなりの歌である。

(二五)板橋 宇治橋をいつたのである。

(二六)朝日山 宇治の三室戸あたりの山。

(二七)橘の小島 宇治橋の西で、舊橋姫の社の在つたあたりをいふ。

(二八)草香部の太子 天武天皇の皇太子。御母は持統天皇。持統天皇の三年薨す。御年二十八。岡

宮天皇と追尊された。

(二九)奈良坂 京都から行つての奈良の入口。即ち奈良の市街の北の端れ。

(三〇)兒手柏 漢名、側柏。和名、フタオモテ・テガシハ・カヘ・ハリギ・ソノテ等がある。

(三一)二面云 萬葉集に「奈良山の兒手柏の両面に左にも右にも佞人の徒」の歌があつて、二心ある人に例へてある。

(三二)東大寺の毘盧舍那佛 奈良の大佛で通つてゐる。

(三三)身毒 天竺の別名。

(三四)陸奥の黄金云云 古く陸奥の金華山から黄金が出たと傳説がある。其の黄金で佛體を鍍金したので、光添へさせ給ふとあるのであらう。

(三五)いさつ 泣くことをいふ。

(三六)彼處の篡ひ代る悪しき風俗 支那の代々の帝王の風。日本のやうに皇統一系でない習慣。

(三七)あなかしまし云云 爰ては、賢だてして穿鑿つてうるさくいふの意。

(三八)奈良坂の人 二心ある人の意。

(三九)兵衛督 軍人を左右し得る官。

(四〇)泉川 山背川的一名。後世木津川とのみ稱する。

(四一)度嶂散 正月元日に屠蘇と共に用ひる邪氣を拂ふ藥。

(四二)高丘親王。平城天皇第一の皇子。

(四三)葱嶺。印度大雪山の北に在る。釋迦は此の山で修業した。

(四四)帳帷子。原本に帳かたびらとある。藥子が居間の几帳きぢやうと見てよからう。

天津處女 (第二)

〔梗概〕 小倉百首には僧正遍昭となつてゐるが、まだ在俗の良岑宗貞といつた時、五節の舞姫を見て詠んだ「あまつ風雲のかよひお吹きとぢよをとめの姿しほしとどめむ」といふ歌がある。それは豊の明の舞姫五人を天女五人と見立てて、雲の上から來たのだから、其の通路を塞いでもらつて、いつまでも下界に居らして眺めたいものぢやとの意だが、此の物語では、好色家の良岑宗貞が仁明天皇に御勧めしてから舞姫が五人になつたやうに書いてある。そして此の物語の題號も前の歌から出てをり、主として宗貞の逸事を述べて、其の間、嵯峨天皇の儉約、仁明天皇の奢侈、高雄の神護寺の縁起などを織りまぜてある。

五十二代の帝、嵯峨天皇は、御兄平城の帝が僅かに四年間の御在位で、御讓位あらせられたので、登極あそばされたのである。

萬機の政を御試みたまふに、唐土の聖人共が書き置かれた經典を御参考に行はせられるので、世間はただ國土までも改まつたやうに人々が申すのであつた。

姫御子の御なぐさみにも、『木にもあらず草にもあらぬ竹のよの』とか或は又『毛を吹き疵を』など、口調剛しく詠みなされて、全くの國風の歌よむ人は、おのづから口を閉ぢて作らなくなつた。

平城の帝が僅かに四年で、御位を下り居させたまつたのを、歎かはしく思ふ人も少くなかつた。今一度取り返さま欲しく、大御思すならんと御推察申しあげて、額集めては、よりより申し合つたと云ひ傳はつてゐる。嵯峨の帝も御推量あそばされて、御弟の大伴の皇子を皇太子に定め給うて、上皇を御慰めなされたのは、これこそ貴き御叡慮ぞと、世の人々が申しあげた。やがて御位下り居させたまつて、嵯峨野といふ山陰に、茅茨剪らずの例を以て、遷らせたま

うた。是は先帝の平城の宮の結構の様ではなく、瑞籬・石垣の宮居に返させられたのである。

されども長岡の地は餘りに狭くて、王臣たちが家を奈良に止めて、遠く通つて仕へ奉る者もあつた。普通の人民は況してであるから、これは誤りであつたと思しめして、今の平安の宮を作らせて遷らせたまつたのである。土を均し、百敷ついたて、豊岩眞戸・櫛岩窓の神神に、願ひごとを御誓約あつて御遷りになつたが、人の心は華美にのみ、移り奢る慣ひであるから、いつともなく王臣の家も屋敷も、殿堂の如く大きく、奈良の都の古き例に復つたので、古老の物知は、賈誼が三代の古を忍びて、政體を改めさせよと申せしを、賢臣等諫め奉りしは誠であると、漢書の某の卷探り出して、日本の今の世を仰ぎ奉つたといふことである。

上皇、下居の宮に花としく若やぎたまふ。参り仕へる者には、唯と唐土の書籍讀めとのみ勸めたまふ。草書隸書善く御學びあつて、多く唐土よりの海舶の便宜によつて、渡り來た法書を御覽じ、空海を御召しになり、

「これ見よ、王羲之が眞筆である」

と、示されたので、空海下して見奉り、

「これは空海が彼の地にあつた時、手習したので御座り申す、これ御覽あそばされよ」

といつて、法書の裏を少し剝して、御覽に入れたが、それには空海筆と記して置いたので、ねだく思したまへるにや、何等の御言あらせられなかつた。空海が書を善く書いて、世に五筆和尙と云つたのは、書を種々に五體にも書き分けたのであらう。

皇太弟受禪したまうて、後に淳和天皇と申し奉つたのは、此の御代である。年號を天長と改めたまうた。奈良の太上皇は、此の秋七月に雲隠れさせたまうたので、尊號を平城天皇と贈り奉つた。

嵯峨の上皇の御見識、度々改まりたまうて、法令事繁く、儒教を専らに取り用ゐさせたまうた。なれども、佛法は少しも衰へずに、

「君の上に此の御佛の立たせ給へるよ」

と仰せあつて、佛堂伽藍を年毎に建てならべ、博學有驗の僧侶等が大臣參議と一緒に朝廷には

立たないが、政權をさへ時々奏聞するので、自然と彼の佛教に引導され給ふ事も少なからずあつた。それで、

「如何なれば、佛法の冥福をかうむらせたまうて、如來の大智の網に込められたまふか」といつて、歎息する下々の者もあつた。

中納言和氣清麿が、高雄山の神願寺は、妖僧道鏡の勢力を以て、宇佐の神勅を己が心のままに矯めようとしたのを、清麿、正しく明らさまに奏聞したので、道鏡憤怒して清麿を一度は因幡の員外の介に貶したが、それでも飽き足らないで、今度は庶人に下して大隅の國に配流した。しかるに忠誠の志が上下の皆知るところであつたから、稱徳天皇崩御の後に、流罪の地から召し還され、漸老人になつて中納言にまで擧げられた。そして本國の備前に下つては、水害を除いたりして人民を安穩にした功勞もあつたので、其の徳を慕はない人もなかつた。それが皆神徳報恩の寺であるからといつて、後に神護寺と改められたが、しかしながら、命祿の薄いのばかりはどうかもしやうがない。

今上淳和帝の皇太子正良・御位を受けさせられて、淳和の帝はほどなく下り居させて、上皇御二方と申す事、唐土にも聞かぬ例であると人々は申し合つた。天皇、仁明と尊號し奉つて、年號を承和と改めたまはつた。

佛道は猶も盛んであることは、まことに恠むべきである。儒教も相並んで流行はしてをるが、車の片方の一輪が聊か缺け損じて、足遅いやうではある。

さて政令はといふと、唐朝の盛んなるを羨望したまひ、終に御心は驕に伏したまうた。六位(一三)の藏人良峰の宗貞といふ男は才學ある者で、帝の御心になつて、近く召しつかはれ、時々、文讀め、歌作れと、御愛憐あつたので、何時となく朝政の御事も密かに御問ひがあつたが、宗貞は利口で、政には少しも御答へ申さないで、ただ御遊に關した事などは、昔の例を引いて、御心を推し量つて申し上ぐるのであつた。好色の男であるから、花やかな事を好み、年毎(一四)の豊の明の舞姫の數をふやしたいものと思つて、

「これは淨見原の帝、天武天皇が、吉野に世を避けたまはつたが、御國知らすべき御性であ

らせられたので、天女五人まで天下つて舞伎を以て慰め奉つた例で御座れば、五人の少女こそ古例で御座る」

と申し上げると、同じく色好ませたまうたので、今年の冬を初めに宣旨が下つて、花やかになつた。大臣・納言の人々の御女達、粧り磨かせて、御目移れかすと、仕構へたが、帝が眺め捨てさせたまふを如何とも詮方がなく、伊勢・加茂の齋宮の例にならつて、老い行くまで籠められ果てるのであつた。

和歌は此の御代より又盛んになつて、宗貞については、文屋康秀・大友黒主・喜撰法師などいふ上手な者共が出て、また女の中にも、伊勢・小町などが、新らしい姿の歌を詠んで、歌人の名を後世までも傳へた。天皇、四十の御賀に、興福寺の僧が詠んで奉つたのを御覽になつて、

「長歌はいま僧徒に残つてある」

と仰せあつたといふことである。今見れば善くもない歌どもを、その昔は珍らしかつたのであらう。人丸・赤人・憶良・金村・家持卿等の調子は知らないやうに見えた。

或時、天皇、空海に問はせたまふには、

「欽明・推古の御時から、唐土の經典しきりに敷島に渡つて來たが、なほ一切の經とは數不足とかいふが、汝が眞言の呪はどうかや」

との事であつた。空海は、

「經典は、たとへば醫師の素難の旨を學び、運氣六經を悟つたと同じで御座る。我が呪術は黄耆・人蔘・附子・大黃などの即功有るものを選んで、原因から病症を探り診て病氣を癒えしめるのに似て御座る。車の兩輪相並んで道は行けるかと思はれ申す」

と御答へ申し上げた。天皇は頷かせたまうて、空海に祿をたまはつた。

天皇、宗貞が色好みで、戯れ歩くのを見現はしてくれようと思しめされて、或夜後涼殿のはしの間の御簾の下に、衣被いて忍びやかに御あらせられたが、宗貞は欺謀たまふとは知りやうがなく、御袖を引き試るに、御答がないので、宗貞は忍び聲に、

(二八) 山吹のはないろ衣ぬしや誰

問へどここたへず口なしにして

と歌よむと、天皇は衣を脱いで、御顔を見合せたまはつた。宗貞は驚いて惑ひ逃げるのを、天皇はおし止めなされて、

「ただ參れ」

と御召しになつて御氣色がよくあらせられた。(二〇) 唐土に、桃の實の食ひかけたのを、『これめしあがれ、味がよい』といつて奉つたのを、忠誠ある者と思つて召しつかはれた例ではある。山吹を口なし色といふのは、此の歌から初まつたのである。

(二一) 淳和天皇の後の宮、今は太后であらせられるが、御父は橘の清友である。圓提寺の僧が奏問するのには、

「橘の氏の神を圓提寺に祭れと、先帝淳和天皇から、夢で御告があり申した」

との事であつた。天皇には此の事を御許容あらせられる御様子であつたが、太后の宮が聞しめされて、

「外戚の家であるのに、國家の大祭にあづからしめるのは、卻つて禮ではない」と仰せあつて、御許しがなかつたが、葛野川の邊(二二二)の今の梅の宮は橋の氏神を祭つたのである。このやうに太后の宮は男らしく雄々しかつたので、宗貞が好色の性質の善くないのをひそかに御悪みあそばされた。伴の健宗・橋の逸勢等が、嵯峨上皇の御諒闇の御謹慎の時に乗じて謀叛したのを、阿保親王が漏れ聞かれて、朝廷に知らせたので、官兵早速驅けつけて搦めとつたが、太后は、これをも逸勢が橋の氏を汚したといふので、

「重く刑に處せよ」

と獨言あらせられたといふことである。皇太子は、此の反逆の主人であるといはれて、髪を剃り僧となつて、名を恒寂と申された。世の人は、

「受禪廢立の悪例は、唐土の書に見えてあるが、これに倣はせたまうたのぢや」といつて、歎息するのであつた。

天皇は嘉祥三年に崩御あそばされて、御陵墓を紀伊の郡深草山に築いて、葬り奉つて深草の

帝と申しあぐるのであつた。御葬禮のあつた其の夜から宗貞は行方知れずになつた。これは太后の宮を初め、諸大臣の御憎を恐れて逃げ隠れたのである。殉死といふ事は、此頃は停められてあつたが、よもや此の宗貞は生きてはをるまいと、情實を知つてゐる世の人は云ひあつた。ところが生きてはゐるが、衣服も著ずに蓑笠ばかりに身を窶して、其處此處と修行して歩いてゐた。或夜清水寺に參籠してゐるが、此の夜は小野の小町も(二四)同じ清水寺で念じ明してゐるが、鄰の方で經讀む聲の凡人でなささうに聞えたので、もしや宗貞ではあるまいかと、疑つて、試みに歌を詠んで持たせて遣つた。其の歌、

(二五) 石の上に旅寝をすれば肌さむし

苔のころもを我に貸さなむ

宗貞法師が、此の歌を見て、小町が筆蹟と知つて其の紙の裏に墨壺の墨で、返歌を書いて遣つたのは、

世を捨てし苔の衣はただひとへ

かさねて薄しいざ二人寝む

といふのであつたが、其處を早く逃げるやうに立ち去つてしまつた。小町はさればこそと、をかしく思つて、^(二六)五條の太后の宮に其の歌を御覽に入れると、

「先帝の御形見の者であるからと、捜し求めてをる時ぢやに、どうして止めなかつたのぢや」

と仰せられて、御呻吟あそばされたといふことである。

畿内の彼處や此處と諸方を修行し歩いたので、遂に見あらはされて、時と參内することもあつた。また時の帝（光孝天皇）は、宗貞法師を才氣ある者と覺しめして、頻りに昇進させ、僧正の位にまでなされたまうた。名を改めて遍昭と稱せられたのは、此の宗貞法師である。これも本はといへば、修行の徳ではなくて、前世からの冥福の善かつた人であらう。

男子二人あつた。兄の弘延は官の役人として賢い人であつた。弟は、

「法師の子は法師になれ」

と、父の僧正遍昭にいはれて、髪を剃り落して、素性法師といはれたのは、此の人である。歌人としては聲譽は父にも劣らなかつたが、僧侶としては時と悪い世才を發して世の中から爪弾きをされたのは、心の底から道心を發して坊主になつたのではないからである。

僧正遍昭は、花山と云ふ所に寺を建てて、行ひよく終つたといふことだが、佛道修行はまことに恠しいものであつた。それといふのは、世を捨てた初めの心にも似ないで、華美な色法衣に唐錦の袈裟を纏うて、車を轟かせて參内するのであつた。それを苦しく思つて、

「兎に角、人間の善いも悪いも、天から稟け得たおのれおのれが果報ぢや」

と批判する人があつた。僧正遍昭自身もさう思つてをつた事であらう。

註

- (一)木にもあらず草にもあらず云云 古今集雜の部、讀人知らずの歌「木にもあらず草にもあらず
ぬ竹のよのはしに我が身は成りぬべらなり」
- (二)毛を吹き疵を云云 古今集雜の部、高津内親王の歌「いたくこと好む由を時の人といふと聞
きてと題して、直き木に曲れる枝もあるものを毛をふき疵をいふがわりなき」
- (三)大伴皇子 後の淳和天皇。
- (四)茅茨剪らず云云 支那の古聖帝の質朴の風。韓非子に「堯の天下に王たるや、茅茨剪らず、
采椽斲らず」とある。
- (五)長岡 桓武天皇數年奠都の地。其宮城趾は、今の京都御所の西南約二里餘の向日町大字鷄冠井
に在る。
- (六)豊岩眞戸 櫛岩窓の神の別稱ともいふ。
- (七)櫛岩窓の神 御門守護の神。其の神社は兵庫縣多紀郡大芋村大字福井に在る。
- (八)賈誼 漢の文帝の臣。年僅に二十餘にして諸老先生より勝つて居つた。漢書の傳に「誼以爲ら

- く漢興つて二十餘年、天下和洽す、宜しく當に正朔を改め、服色を易へ、度を制し、官の名
を定め禮樂を興すべしと。猶ち草して其の儀法を具さにし、色は黄を^{たつと}上び數は五を用ふ。官
名を爲り悉く更めて之を奏す」云云とある。三代云云は爰の所を云つたのであらう。其の著
過秦論で有名である。
- (九)法書 王羲之の蘭亭序・樂毅論とか、智永の千字文のやうなものをいふ。併し爰ではさうでな
く弘法大師の書であつた。
- (一〇)五筆和尚 傳説に、空海が兩手と兩足の指と、口にくはへて字を書いたので五筆和尚の名稱
があるといつてゐる。原本に書體さまざまに書き分かちけん、とある。それは篆隸楷行草な
どをいつたのであらうから、作者秋成の所見に賛成していつその事五體にも書き分けとした。
兩手は兎も角足や口で書いたのでは弘法大師は曲藝師の名を免かれまい。その愚説を秋成が
苦々しく思つて、爰に一寸意見を漏らしたものと見える。
- (一一)雲隠れ 高貴の人の死亡したのをいふ。近頃賣笑婦と待合などに入つたのを雲隠れなどといふ
が、餘りに稱謂の學を無視してゐる。
- (一二)命祿 運命の祿。

(一三)良峰の宗貞。桓武天皇第十六の皇子良峯安世の男。後髪を剃つて遍昭と稱した。百人一首の僧正遍昭とあるのは宗貞である。其の性格などの詳しくは此の物語で分る。

(一四)豊の明の舞姫。雅樂舞の内の女舞の處女。其の舞は、中世大嘗會の時豊明節會に於いて行はれるのを例としたが、大正四年の御即位禮に際して復活した。

(一五)伊勢・加茂の齋宮。伊勢は齋宮。加茂は齋院と稱せられる例である。伊勢大神宮や加茂明神に奉仕せられる皇女の稱。歷代天皇御即位毎に、未婚の内親王若しくは王女を卜定して差遣はされたもの。

(一六)素難。支那の古醫書、素問と難經。

(一七)後涼殿。大内裏の一殿。清涼殿の西、陰陽門と相對してある。

(一八)山吹のはないろ衣。黄色に染めた衣。

(一九)口なし。物いはぬをいふ。山吹色に染めるには、口なし、即ち梶子を用ゐる。

(二〇)唐土に桃の實云云。彌子瑕が衛の靈公に桃の喰ひ缺けを與へた故事。彌子瑕が若くて靈公に寵せられた時は、桃の喰ひかけを喜んで食はれたが、晩年寵衰へて、それを罪の一つに數へて罰せられた。

(一一)淳和天皇の後の宮云云。橘の清友の御女とあるからには、嵯峨天皇の橘皇后の誤りであらう。大日本史にも、「嵯峨橘皇后、諱は嘉智子、内舍人清友の女なり」とある。仁明天皇の御母で檀林皇后の御事である。

(一二)梅の宮。山城國葛野郡西梅津に在る。

(一三)橘の逸勢等が謀叛。本朝通紀、仁明天皇承和九年の條、秋七月嵯峨太上天皇崩ズ、太子恒貞三位を廢し道康親王を以て皇太子と爲すの下に、「太子は淳和帝の子にして天皇の從弟なり、天皇即位の始め立てて東宮と爲す、而して後帝と相ひ睦しからず、是に於いて東宮の帶刀伴健峯、但馬守橘逸勢等、隱に廢立を謀り、上皇の崩に乗じて謀反す、時に阿保親王先んじて之を知つて檀林皇太后に告ぐ、太后乃ち良房を使はして之を奏す。天皇怒つて官兵を遣はし、健峯・逸勢等を捕へ、之を配流し、其の黨、大納言藤愛發・中納言藤吉野・參議文室秋津等を京師より放追し、東宮の位を廢し、帝の皇子道康を以て皇太子と爲す」とある。爰にこんな長い註をしたのは、檀林皇后の威權と、次篇の海賊の文室の秋津の名が見えてゐるかから參考に出した。

(一四)局して。局は一間々々仕切つた室だから、小野が清水の觀音堂の一間を借りきつてゐたので

あらう。小町と遍昭の歌問答は大和物語に詳しくある。

(二五)念じ。心に祈念すること。

(二六)石の上に旅寝をすれば云云 後撰集雜部小町が歌に「いそのかみといふ寺に詣てて日の暮れにければ夜あけてまかり歸らむとて止まりて此の寺に遍昭侍りと人の告げ侍りければ物いひ心みむとていひ侍りける。と題して、岩の上にたびわをすればいと寒し苔の衣をわれにかさなむ」とあつて、遍昭の返し歌に、世をそむく苔の衣はただ一重かさねばうとしいぎふたりねむ。とある。秋成が聊か添作してあるやうだが善くなつてゐる。いそのかみの寺といふと、石山寺のやうであるが、大和物語でも清水になつてゐる。苔の衣は法衣である。

(二七)五條の太后 藤原順子、仁明天皇の女御で文徳天皇の御生母。此の時は仁明天皇崩御の後の物語であるから太后といった。

(二八)先帝の御形見 仁明天皇の寵臣の意。

(二九)自身も云云 原本に御みづからも然か思されぬらむかし、とある。秋成が僧正遍昭に對しての語としては餘りに尊敬し過ぎたやうに思はれる。それで御みづからは身みづからの誤りて、身の字が假字でなかつたかとまで疑はれる。

海 賊 (第三)

〔梗概〕

紀の貫之が土佐の國守となつて、任果てて都に歸るとき、海上で海賊に出逢つて、海賊と物語する筋だが、それは土佐日記に海賊を船中の人が恐れて、海賊が襲ひもしないのに、海賊のむくい、海賊のおそり、海賊追ふ、などと海賊云々の文句が數ヶ所にあるので、此の物語は、土佐日記を讀んで腹案がなつたのであらう。貫之が船の海賊を恐れたのは、此頃丁度東國に將門の叛亂があり、西國には純友が海賊となつて横行する時であつたから、世の噂で恐れたのであらう。此の秋成の物語は文屋の秋津といふ學者が放蕩であつた爲に都を追はれて海賊となり、貫之が船で都に歸るのを聞いて、物取らうとしてでなく、當時歌人として名高かつた貫之を片腹痛く思つて嘲弄し

に來た趣向であるが、秋成の性癖として當時の學者を白眼を以て迎へてゐた其の鋒芒を文屋の秋津になり代つて、世の學者顔して居る者を、貫之に見立てて罵倒したかの觀がある。文屋の秋津は承和九年に伴健岑・橘逸勢等の謀叛に與して配流せられ、翌十年に歿してゐるから、貫之が土佐から歸つたのは承平四年の十二月で、百年も後の事では辻褄が合はないけれども、これは正史でなく小説であるから面白くさへあれば善いのである。併し原本に承平を承和としてあるので見ると、秋成は貫之の都歸りの年を承和と思違してをつたのかも知れぬ。又思違てなく全く承知の上で遣つて除けたのも構はぬ。今の大家作家などが少しでも史實に反した事を書くとき、非難する人があるが、岩見重太郎や荒木又右衛門などの事を書くのに史實責めにしては書き悪くて物になるまい。近松門左衛門などは源頼光時代に三味線を弾かせたり、鎌倉時代に煙草を吸はせたりしてゐるのを世間ではちつとも構はないではないか。

(一) 紀の朝臣貫之が、土佐の國守となつて、五年間の任が果てて、(二) 承平某の年十二月某の日、都に參り上られた。其の時は、土佐の國の親しい人とは、皆名残を惜んで悲歎に暮れたが、人民も、

「昔からこんな有り難い國守があるのを聞いた事がない」

といつて、父母の別れに、子供が泣くが如くに慕つて泣いた。いよいよ出帆の時は、(三) 誰も彼もが其所此所から追つて來て、酒や肴を持つて來て、餞別の歌詠み交す人などもあつた。

順風でなかつたから、船は思ふやうには漕ぎかねて、思ひの外に日數を費したが、其のうち(四) に海賊が恨があるといつて追つて來るといふので、安心が出來かねて、ただ安穩に都に到着出來るやうにと、朝夕海神に幣帛を奉つて祈禱するのであつた。船中の人とも擧つて海底を臨んで禮拜するのであつた。

「此の船は和泉の國まで」

と船長から聞いたので、氣ばかり急がれて、國に下つた時眺めた所々の國の名所も、此の度は何所も見捨てて國々の名も覚えようともせず、ただただ和泉の國とばかり氣に止めるのであ

つた。

貫之夫婦は、都で生れて土佐の國で死亡した幼児の今度一緒に無いのを悲み言ひあつて、都に早くと心が急かされても、また一方には子供の死んだ跡の土地にも心引かれて、忘れかねるのも悲しみのひとつであつた。

「最早此所は和泉の國の領分ぢや」

と船長が云ひ聞かした時は、船中の人々は、皆生きた心地がして、氣が落ち著き、嬉しさが胸一パイであつた。

此の時である、釣舟かとも思はれる木の葉のやうな小舟が、風に散るが如くに奔つて来て、貫之の船に漕ぎ寄せて、直ぐさま苦をおし上げて出た男が、

「前の土佐守殿の御船に、對面たまはりたき事があつて追つて來た」

と聲荒かに呼ばはつた。

「何事があつてか」

と問ひ返すと、

「お主が國を出られた時から、後を追つたが、風波が荒いので、得追ひ著かずにしまつたが、今日こそ對面たまはり度い」

といふ。

「すは、然ればこそ海賊が追ひ來たのぢや」

といつて、船中の人々が騒ぎ立つた。貫之は船屋形の上に立ち出でて、

「なんぢや、男、我に物云はんといふのか」

といふと、

「これは云つてもいはんでもどうせ無駄事ぢや。しかし云ふとすれば、波の上を隔てては風が聲を妨げてその甲斐がない、許されよ」

といつたが、翹あるものやうに素早く此方の船に飛び乗つた。見ると最むさぐるしい男が、腰に段平の劔を帯び、恐ろしげな眼つきをしてゐる。貫之朝臣は氣色善く、

「八重の汐路を凌いで、此所まで来たのは何事あつてか」と問はせたまふと、其の男は、佩いた劔を腰から取つて、自分の小舟に抛げ棄てやつて、そして云ふには、

「海賊ぢやからといつて、仇をしない事が御分りになられたなら、うち寛いで我が申す條に物答へて聞かせられよ。お主が國に五年の間、參らう參らうと思つたなれど、筑紫の九國、山陽道の國々の、國守の怠の隙を見聞しようと、其の遠近を歩き巡つて今日に立ち到つたのぢや。海賊といふものは心が幼い者のやうに正直なもので、お主が國を能く守らせるのみでなく、淺ましい貧乏な山國であるので、賊をはたらくにも働き甲斐がないので、餘所に見て捨て置いたのぢや。都の御館に參れば參るべき筈ぢやが、特別に人に注意されるので、世の中が狭くなり、兎に角かうして紛れ歩くので御座る。

さて問ひ參らすべき事は、延喜五年に勅を奉つて、和歌を撰んで奉つたが中に、お主こそ長者であつたと聞くが、續萬葉集の題號は、昔の誰が集めたとも知らないで次がれたので御

座らう。是はまだよし。題の心を聞くと、萬は多數の義ぢやといふ。是も又善し。葉はどうぢや、後漢の劉熙が釋名に『歌は柯なり、言ふところは、人の聲あるや草木の柯葉有るが如し』と云つてあるが、是はどうぢや。人の聲には喜怒哀樂につけて、聞くにも喜ぶべきものも悲むべきものも御座る。それぢやから聲に長短もあれば緩急もあつて、歌うたふに調の整はないのがあり、草木と枝葉の風に音がするの、疾風であつたならば、誰があはれと聞かうや。さて柯葉とのみでは理が分らぬ。往古の人は僅に釋名に就いて文字を解釋してをるが、それは人が馬鹿だからといふばかりではない、又さういふ風に意を誤つたのは誰の罪といふではない、これは世相といふものぢや。同じ代でも、許慎が説文に、『歌は詠なり』といつたのは、舜典に『歌は永言なり』と有るのを據所として云つたのぢや。是はよし。字を解釋するのでさへ、その道の教の種とであるのを思ひたまへ。

さてお主が續萬葉の序に『やまと歌は人の心を種として、萬の言の葉となれる』と云つたのは、文章めいてはあるが、全く誤つて御座る。言・語・詞・辭は悉くコトと訓むより他は

御座らぬ。言の葉、コトバとも言つた例がない。釋名によつて、題の意を助けても、古言に違ふ罪、國風の歌にも文にも、見許しがたいのを、大臣・參議の人々は、己が責任でないからして、餘所目つかつて捨ておいたであらう。

また歌に六義あるといふのは、唐土でも僞妄の説で御座る。三義三體と言ふのならば許す事も出来よう。それも定まつた數があるといふ譯ではない。喜怒哀樂の情の、それからそれと枝葉に別れては、幾ら有らうか、數へるのも徒事で御座る。また濱成が和歌式に、十體であると言ふのも、同じ淺はかな理窟で御座る。お主は歌は善く詠むが、古言の意も知らないから、帝さへも誤らせ奉るではないか。

また大寶の令に、唐土の掟に習つて法を立てられた後は、人道として良媒なくて夫婦と爲るのは、犬猫の挑み争ふに同じと見て、必ず亂るべからずと、法令を定められてあるのにも拘らないで、歌が上手に出来てをるからといつて、法令に禁じてある性質のものを集め、人の秋波に心を寄せては忍び逢ひ、見咎められたといつて、造作なく出で行く別れの袖の泪川

聞き悪い歌まで選んで奉つたのは、政令に違ふといふもので、男女の道を亂した者と同罪ぢや。戀の部といつて五卷までも多くあるのは、餘りに謹慎の心がない徒事である。淫奔の事については、神代の昔は、兄妹相思つても情の誠ぢやといつて、罪惡とはしなかつたが、人の代となつて、儒者盛んになつてからは、夫婦別あり、また他姓を娶らずなどといふのは、異國の賢者の言つたのを選び採つたからである。それでこそ清涼・後涼の兩殿が造立せられたので御座る。彼の國でも、初めの程は同姓でなければ、相近寄るといふ事がなかつたが、國が榮え、境が廣まり、他姓とも多く交はり、人多く産むべき便宜の爲としては、他姓と婚約するのも善い事としたので御座る。

歌を賢く詠んだからとて、選んだ四人の筆の誤りは、學文がないから間違つたので御座る。昔相公一人が氣付いて、苦しく悪んでをられたが、其のうちに遠く筑紫に左遷されたまうたので、其の事を咎め立てはしなかつたので御座らう。延喜を聖代といふのも、阿諛の言である。君も御眼暗くおはして、博覽の忠臣菅公をも黜けたまうた世ぢや。三善の清行こ

そ、少しも違背なく仕へまつたのでさへ、僅に参議式部卿で停まつた。選舉の道が暗いといふべきである。清行が意見封事十二條は、文も善く、内容も聞くべき事があるが、唯々學者は古轍を踏み違へじとばかり心懸けて、頑愚の言もあり申す。第一條に、齊明天皇西征の時、吉備の國を過ぎたまふに、人煙賑はしい里があるのを御覽じて『誰が住んでどういふ所ぞ』と、御問あつたので、里長が答へには『近き頃、年に月に人多く住みついて、今は幾萬人が住んでござらう、若し軍人となるべき者を召されたまふならば、二萬の兵士は集め参らするでござらう』といふので、『さらば此の後、里の名を二萬の里と申せ』とあつたのが、延喜の頃になつては、國守が數へたのに、幾人も出すことは出来ぬやうになつたとあるが、榮枯地を易ふることのあるを知らないで、國の爲に患へたのは愚である。人々の思ひ思ひによつて何處に棲んで榮ゆるやうになるかは、初めから知れた事ではない。こんな事を勘定に入れるのは無駄の事である。人民は利益損亡によつて移轉するもので、蜂が巢を編み易へるのと少しもかはらぬ。

また學問の事でも、文筆の造詣の學者でも、大臣公卿の推薦がなくては、其の位が進むべきものとは極つてゐない。是れ此の國の習慣であるし、學校に集まる幼稚の公達に讀書して文章の意を解釋してあげるだけの事でも、朝政が時と變るによつて、思ひもよらず學寮は、
(二二) 坎壤の府・凍餒の舍などと、世の誇りぐさになるぐらゐのものぢや。

また播磨の印南野の魚住の泊は、行基が此の間遠し、舟泊の便よからずとて造つたのぢやが、その後度と風波につき崩されたのは人工を善い事に思つて、天然に逆らつてあるからで、終に世に何の益もない。惻隱の心があつても、其の功空しいものぢやから、朝廷では見捨てて置いたので御座らう。かういふ事柄は、聖の教といふでもない、ただ一片の老婆心でこそあれ、こんな仕損じは、萬機の政に參與する大臣等の仕事といふでもないけれど、云はば云ふべきぢや。我は詩を作つたり、歌を詠んだりする事はないが、書籍を讀む事が好きで、自然人の前に自慢しては人に憎まれ、とうとう亂酒して罪を犯し、都を追ひ拂はれた後といふものは、海上に浮んで活計を立て、人の財産は我が物と思つて、酒は飲む、肉は食ふ、か

うしてあつたならば百年の長生は大丈夫。歌道の外の事ならば何でも問うて見よ。猶も喋らん。咽喉が喝いた、酒をふるまへ」

と、傍若無人にいふ。船中の人は酒肴取り添へて與へると、飽くまで食ひ、飽くまで飲んで、

「もう興が盡きた、木偶殿よ、暇申さう」

と、木工権頭貫之を、でくの坊扱ひに、モクどのと呼んで、己が舟に飛び乗つて、舷叩きながら、

「やんら目出度」

と聲猛く歌つた。貫之の船にも、そつちこつちと船子等が歌ふのであつた。海賊の船は、はやいつとなく漕ぎ隠れて、跡は白浪ばかりが見えた。

貫之が都に歸つて後、誰とも分らない者が書状をもつて來て、投げ入れて歸つた。披いて見ると『菅相公の論』と云ふもので、手蹟は亂暴だが、條理正しく論じてあつた。それは、

「懿哉菅公、生而得二人望、死而耀三神威、自古惟一人已。會聞、君子無二幸而有二不幸、小人無二幸而有二不幸。如レ公則有レ德而非二幸、然亦不幸貶ニ于外藩、其所ニ以不レ冤者、蓋遇ニ

君臣刻賊之天運、而不レ能三致仕以令二其終、又罵二辱藤菅根、而結二其冤、不レ舉二三清公、人以爲レ私。且、不レ納二其革命之諫、仰非レ求レ之乎、清公之言云、明季辛酉運當二變革、二月建卯將動二干戈、遭レ凶衝禍、雖レ未レ知二誰是、引レ弩射レ弓、當レ中二薄命、自レ翰林超二昇槐位者、吉備公之外、無二復與二美、伏冀知二其止、則足レ察二其榮分、由是思レ之、吉公當二妖僧立朝之時、持二大器而不二傾殆、建二勳平之勳、矣。今也公以二朝之寵遇道之光輝、與二左相公、有レ鸞、終所二貶黜、故雖レ無二幸、亦不レ免二不幸也。然生而得二人望、死而耀二神威、有德之餘烈、可レ見レ赫ニ、然于萬世一矣哉。』

とあつて、言遣の險しく、しかも縦横無盡であるところが、前の海賊が文と推察された。又それに副書があつた。それは

『前の對面に言ふべき事を、言に餘りて漏しつ。汝が名以レ一貫之と云ふ語を取りたるものとは知らる、さらばツラヌキと讀むべけれ。之は助音、ここには意ある事なし。之の

字ユキと讀む事、詩三百篇の所々にあれど、それは文の意につきて訓むなり。汝歌よめども、文多く讀まねば、目いたくこそあれ。名は父が擇んで附くるためしなれば、汝知らずば、歌の名をおとすべし。歌暫し止めて、窓の燈火かけ、文讀めかし。ある博士の以貫と附けしは、ツラヌキとこそ讀みたためれ。可憎男よ』

と、荒々しく憎さげに書いて、(三八) 本頭殿と宛名してあつた。此のことを貫之が學友に逢つて、
「誰だらう」

と聞くと、一人の朋友は、

「それは文屋の秋津であらう。彼は博覽の學者であつたが、放蕩亂暴で終に追放にあつたが、海賊になつて暴れ歩くといふことぢや。それといふのも彼が天の祿の助けるところであると見えて、今まで刑罰にもあたらないで、世間を縦横に勝にかけてをるわい」と話したといふことである。

これは、我欺かれて又人を欺くといふもので、筆は劍と同じく人を刺し、刺せば又人にも刺

されるが、しかしお互に血は見ない。

註

(一) 紀の貫之。紀長谷雄の子、古今集の撰者、天慶九年卒。

(二) 承平某の年十二月某の日。某の年は四年。某の日は、二十一日。原本に承平が承和になつてゐる。これは梗概でも斷つたやうに、承和にすると海賊の文屋の秋津には時代が合ふが、貫之には合はなくなり。承平にすると、秋津には合はないが貫之に合ふやうになる。それで原本通りに承和にしようか、どうしようかと考へたが、承和にすると、土佐日記の註釋などを熟讀してゐる人や、史實を云爲する人に出ツくはすと、直ぐに承和の和は平の誤植だと見られる虞れがあるから、武斷にも承平とした。また疑つて見ると、秋成たる者が貫之の時代を無視して百年も前に持つて行くのも餘りにをかしい、秋津を無視して百年後に持つて來るなら

ば浦島太郎のやうな永生きする者もあるから全く理に合はないでもない、人に非難されれば強辯する事も出来るなどと秋成に代つて考へて見ても、僭越に書き直した罪を恐れて慎重にしようとして、参考に藤岡氏の校訂した名著文庫をはじめ、有朋堂文庫の上田秋成集・國書刊行會の上田秋成全集などを見ても皆々承和となつてゐる。併し承和としては史實を知つてゐる讀者は興味を削がれて巻を掩ふであらう。

(三) 誰も彼も 土佐日記によると、藤原言實・山の康教・橘の季衡・山口の千岑・長谷部行政等である。

(四) 海賊が恨があるといつて追ひ來 土佐日記に「船君なる人、浪を見て、國よりはじめて、海賊報いせんといふなる事を、思ふうへに海のまたおそろしければ」云云とある。此の土佐日記の報いせんを恨みあつてと云ひ直したので、貫之が土佐の國守中に、海賊仲間を捕へて懲らした事があるやうに聞える。

(五) 和泉の國まで 土佐日記、廿二日の條に「和泉の國までたひらかにと、願ひたつ」とある。

(六) 心が幼い 心が單純な意。

(七) 續萬葉集 古今和歌集の一名。萬葉集に次いで撰したので稱される。

(八) 劉熙が釋名 後人が揚雄の方言と比較して、「劉熙釋名を製するに至り、始めて譬況假借して以て音字を證すること有り、而れども古語今と殊別なり、其間輕重清濁猶未だ盡く曉さず、然れども亦六經に益有り功薄からざるなり」といつてゐる。

(九) 柯葉 枝と葉。木なれば枝、草なれば莖にあたる。

(一〇) あはれ 感動詞で、面白い事・美しい事・悲しい事等いろいろに遣はれるが、爰では面白い事にあたる。

(一一) 許慎 後漢の儒者。字は叔重といつた。說文解字・說文韻譜を著した。

(一二) 舜典 書經の篇名。舜の事績を書いた書。

(一三) 六義 漢詩の六種の體。風・賦・比・興・雅・頌の六體。それを紀淑望の古今集眞名序には倭歌に六義有るといつて此の通りに書いてゐるが、貫之の假字序には、歌のさま六つなり、からの歌にもかくぞ有るべきといつて、そへ歌・かぞへ歌・なずらへ歌・たとへ歌・ただごと歌・いはひ歌の六種を擧げてゐる。

(一四) 濱成の和歌式 濱成姓は藤原、官は參議。和歌式は和歌四式中の一で、歌經標式とも濱成式ともいはれてゐて、作歌の法式的書である。今傳はつてゐるのは偽書の疑がある。

(一五)大寶の令 文武天皇の大寶元年八月に成つた律令。

(一六)法令に禁じてある性質のもの 古今集中の戀の部の歌を指したのである。

(一七)泪川の聞き悪い歌 古今集の戀歌の部に涙川云々の歌が七八首あるが、殊に貫之が「世と

ともに流れてぞゆく涙川多も氷らぬみなわなりけり」などを苦々しく思つたのであらう。

(一八)清涼 殿名 前に雨月物語の白峯の篇に註した。

(一九)後涼 殿名 前の天津處女の篇で註した。

(二〇)菅相公 菅原道實。

(二一)清行が意見封事 延喜十四年四月、三善清行が上奏した十二箇條の封事。

(二二)坎壞 零落すること、不幸な事などにいふ。楚辭の九辯に「坎壞兮貧士、失_レ職_キ而志不平_レ」とある。

(二三)凍餒 著物も食物も無いこと。禮記の祭義に「非_ズ上積重而下_ニ有_ル凍餒之民也」とある。

(二四)魚住の泊云云 魚住は明石郡の舊い泊所で上古は印南郡の韓泊_{からとまり}と輪田(今の兵庫)の間に

此の船瀬があつた。ウラズミをナズミとも云つた。行基云々の事をいふと、此の魚住の泊に就いては、其後貞觀九年には僧賢和、建久七年に僧重源、正應二年に僧性海と僧侶ばかりが

修築の計畫を立ててゐる。そして此の事は三善清行の封事第十二條の全文を充たしてゐるが、

それには天長年中清原真人が奏請した事が載つてゐる。

(二五)神威を耀かす 道實は死後天滿大自在天神と祭られた。その初まりは天曆年中に民間で北

野に祀つたのである。

(二六)外藩に貶さる 太宰府に左遷されたのをいふ。

(二七)君臣刻賊云云 これは三善清行が、醍醐天皇の昌泰三年に、翌年(延喜元年となる)革命

あることを豫想して辛酉革命議といふのを奏上した中に、明年二月、帝王革命之期、君臣刻賊之運といふ語があるのから出てゐる。

(二八)藤菅根を罵辱す 道實が藤原菅根の學才を識つて推薦してゐながら、庚申の夜に殿上で菅

根の頬を打つた事が、江談抄に出てゐる、其の喧嘩の原因が詳かて無いが、道實が罪を蒙つて左遷される時、法皇(宇多天皇)が時の帝醍醐天皇に道實の罪を許すべく御相談あらうと

した時、菅根が前の事を遺恨にもつて、法皇を退めて通さなかつた。

(二九)三清公を擧げず 三清公は三善清行を指す。巨勢文雄が三善清行を賞めて、才學時輩に超越すと評した時、道實が聞いて之を晒つたといふ事であるから、同じく朝に居つて、無論推

擧はしなかつたであらう。

(三〇) 革命の諫を納れず。三善清行が世相を看破して道眞の權寵を避けるのを勧めたが、道眞は従はなかつた。

(三一) 翰林。翰は文筆のこと、林は多いこと。學海・文海などいふに等しい。

(三二) 槐位。三公の位。昌泰二年に、藤原時平が左大臣、道眞は右大臣に爲つた。

(三三) 吉備公。吉備眞備。

(三四) 妖僧。弓削道鏡を指す。

(三五) 勃平。漢の高祖の功臣、周勃と陳平。高祖歿後に、劉氏の爲に劃策した。

(三六) 左相公。左大臣藤原時平。

(三七) 一を以て貫くといふ語。論語の里仁篇に「子曰參乎吾道一以貫之哉」とある。

(三八) 柰頭。貫之が官名。

(三九) 文屋の秋津。正史には文屋を文室と書いてある。淨三の二男。承和中に檢非違使別當に補せ

られた。正史に酒癖が有つて、數杯を飲むと必ず悲泣したとあるから泣上戸であつたらう。

伴健岑・橘逸勢等の隱謀に與して出雲權守に左遷されて翌年配所で卒した。年五十七。

目一つの神 (第四)

〔梗概〕 昔相摸の大磯あたりに生れた男が、東國の者だからとて和歌も詠めないではと、京都に上つて歌道を學ぼうと志して行く行く近江國まで行くと、日が暮れて老曾の森に野宿して、其夜いろいろの怪物に出逢つて其中の目一つの神に意見されて京都に行かずに、其處から故郷に引つかへすといふ物語だが、其の怪物は彷彿として何處かで嘗て見た事があるやうに讀者に思はせるのが作者の手腕である。

序でにいふが、目一つの神は、筑紫伊勢兩國の忌部の祖先と古語拾遺にある天目一箇命を云つたのか、それなれば、兵庫縣多可郡日野村大木の村社で、天目一神社として祭られて居る。また馬琴

の歸旅漫録に一目連と題して「桑名より三里ばかり西北に多度といふ所あり。多度大神宮立たせ給ふ。相殿に一目連といふ神おはします。宮殿に扉なし、翠簾のみなり。神體は太刀一振と幣のみなりといふ。此の神甚だ奇瑞を現はし、折々遊行し給ふことありとぞ」とあつて、頭註に一目連は天目一箇命、又天麻比止都命、天津比古禰の御子なりとある。此の神體は太刀一振とあるのを見ると、古語拾遺に天目一箇神をして雑刀斧及鐵鐮を作らしめきとあるのに縁故があり、此の物語中には目一つの神が自ら一目連と稱して居るのを見ると、馬琴の云つた一目連と合致してゐる。ところが延喜式に奥石神社とある老曾の森の神様の本體は何であるかは知らないが、天目一箇神は刀工の祖先といふ事から考へると、老蘇の森が聊か刀に縁故がある。それは、天智天皇七年に新羅國の僧道行といふ者が、熱田神社の劍を盗み出して、近江國蒲生郡まで行くと、之を取返さんと追て行き、大磯の森から追初めたので、即ち追初森と云つたのを、後世老蘇となつたとある。それで猶ほも附會して考へると、此の物語の主人公は小洵綾即ち大磯の者だが、其の大磯と老蘇と名稱に關係あるところから、關東の大磯の者などを引つぱり出して、作者秋成が心潜かに會心の笑を漏らして居たのかも知れぬ。なほ一目連を追想すると、これは全く關係のない事だが、菊池三溪の本朝虞初新誌中の箱根の隻目山一眼寺の怪談がある。

吾妻の人は夷である、和歌などどうして詠めるものかと世人がいふ。

相摸(一)の國小洵綾の浦人で、優(二)にやさしく生れついて、萬藝(三)に志深く思ひわたる者があつた。

如何にもして京都(四)に上つて貴紳堂上方(五)に和歌の道を習ひ學んだならば、古今(六)の序にあるやうに、

花(七)の蔭(八)の山賤(九)とばかり、人に笑はれもしまいにと、都のある西の方にばかり心が馳せてをつた。

それで、鶯は田舎の谷の巢なれどもだみたる聲はなかななりけりといふ歌を直ぐさまとつて、

「鶯は田舎の谷底(一〇)に巢(一一)くつても、濁(一二)みた聲では鳴かぬものぢや」

と、天晴(一三)己は鳥の中(一四)でも鶯のつもりで親(一五)に暇(一六)を願つた。親は、

「この頃は、文明(一七)・享祿(一八)の戦亂(一九)の餘波(二〇)を蒙つて、往來(二一)の路(二二)を絶たれ、便宜(二三)悪しと人はいふ

が」

などといつて一度は諫めて見たが、其の優人は、